

■風俗文献とSMプレイ情報満載■

奇譚クラブ

♥カラーイラスト競艶♥懐かしの奇ク嬢たち
♥獣愛小説・犬と私と夫（上野悦子）♥マゾ
ヒズム幻想♥投稿作品・闇の青い手♥S M時
評・S Mビデオガイド♥読者誌上デイト公開

復刊第4号

6

S Mのエキスだけを集大成した
マニア待望の読者参加情報雑誌



奇譚クラブ 6月号目次

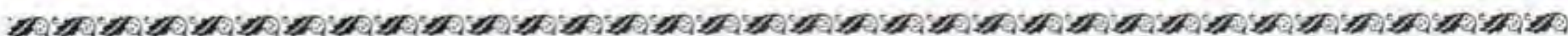


競艶SMイラスト	(3)
OL緊縛初体験 (読者投稿)	(8)
懐かしの奇ク嬢たち・前田真知子	(11)
辻村隆氏との交遊記④	(20)
読者誌上デート	(28)
闇の青い手 (画・四馬孝)	(40)
切腹・異聞 憂国	(47)
犬と私と夫②	(54)
百恵の太腿③	(60)
生人形地獄④	(74)
淫縄狐火街道 (美濃村晃)	(84)
標的は牝犬④	(92)
マゾヒズム幻想 (読者投稿)	(106)
SM半世紀 (読者投稿)	(112)
SM時評 (ロマン派生)	(120)
僕の憎まれぐち (室井亜砂路)	(126)
レスポスの園① (結城紀子)	(130)
奇クサロン	(132)
読者ポスト	(140)
読者交際欄	(142)
投稿規定	(144)



桐丘裕詩

閨房鬼



蝶

と

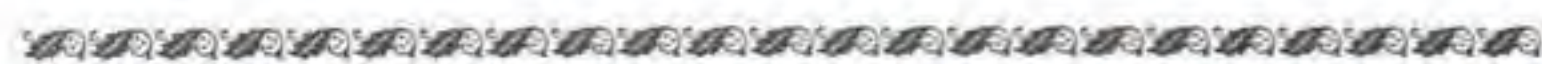
地

蜘蛛

蛛

山崎無平





平岡 寛



M

治

療

たつみ良行



闇

祭

り

昭和初期の戯画



読 者 投 稿 フォ ト

OL緊縛初体験

三河ウイロウ（愛知）





名古屋で一番振やかな栄町の
繁華街をふらついているところ
をハントしました。彼女の名は
慶子（仮名）、二十二歳、勤務
先の商事会社ではベテランOL
のほうに入るそうです。最初の
デートでモーターへ行き、3回
目に、SMの話をしました。興
味がありそうなので、さっそく

OL緊縛初体験

三河ウイロウ（愛知）
緊縛プレイを始めたところ、す
ごくスリルがあるわ、と興奮し
ました。テーブル縛り、柱縛り
など、いろいろ試し、興奮の度
合いを調べてみると、やはり局
部晒しやパイプ責めには猛烈な
反応をみせました。今後は剃毛
やアナル責めなどの調教をしよ
うと思っています。

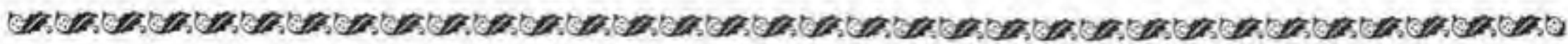


懐かしの奇ワ嬢たち

前田真知子















前田真知子

スラリと伸びた健康そうな四肢良家の
子女を思わす美人で、その人気は梨花
悠紀子をしのごほどだった。





奇譚
クラブ

1982年6月号



By. 賀山 茂

と灼熱のプレイ



カメハンの依頼に張り切る

辻村さんから、奇クの読者通信の女性のハントの依頼の手紙がきました。東京・品川に住む家庭の奥さんです。「主人に内緒で奇クを読んでいます。是非ハントしてください」

ねがってもないグットニュースに気もそぞろ。初めてのハントがなんとか成功裡に終わりたいものと、考えると一日中ソワソワウキウキです。

辻村さんの手紙はさらに、このほど東映で制作する拷問映画に参画するとなりました。

「徳川女刑罰史」の緊縛指導を辻村さんが担当されるのです。いよいよSMが表舞台におどり出す感じです。心の中で思わず万才を叫びました。

私は興奮を抑え切れず長距離電話を辻村さんに入れました。私とは逆に辻村さんは落着いたもの。「どれだけ本当にやってくれますかねえ」

私はこれまでいろいろお世話になったお礼にいちど東京にご招待したいと申し上げ、その時映画の写真も見せてくださいとおねがいしました。

東映のロケが終り、学校が春休みになると、待ちに待った辻村さんが上京してこられました。東京駅に出迎え、まず私のマンションにご案内しま

19才の谷ナオ三



した。

辻村さんは久しぶりの上京なので、まるで修学旅行の生徒みたいでした。

私はその頃、マイナーの芸能プロダクションの大手である火石プロの社長と親密なおつきあいをしてましたので、辻村さんのプレイメイトに、ピンク映画の女優さんを考えていました。

私はなかでも、辰巳典子さんが大の気に入りました。小柄だが、バストはたっぷりあって、主演クラスの女優さんです。根性もなかなかのものです。

彼女はちょうど都内の劇場に出演しているところでしたので、火石さんにスケジュールの調整をおねがいしました。

辻村さんにプレイの相手が辰巳さんだと知らせると、「それはすばらしい。とても楽しみです」と満面に喜色をうかべられたのです。

「ところで賀山さん、作品を見せて下さい」

辻村さんの長旅の疲れを感じさせない元気さにびっくりしながら、私は数冊のアルバムをさし出しました。

「賀山さん、私はネガを5本持ってきました。お貸ししましょう」

そう言いながら私の作を見る辻村さんの眼はラ



ンランと輝きははじめ、喰い入るように見入っています。時々みずから合点するようにウムウムと相づちを打つのです。「大変なものです、賀山さん。シロウト、シロウトというが、とんでもありませんよ。アマチュアでこれだけやれる人は、めったにいません」

辻村さんにほめられて、私はなにかハクがついたようないい気分になりました。

「賀山さん、ネガがあったら5本ほど貸して下さい。できればカメラハント用に使わせて下さい」

「私も5本お借りしたのですから、どうぞ」

ロッカーから比較的うまくいったと思えるものをえらんでお渡ししました。

「賀山さん、これから時々ネガの交換をしましょう」

私もねがったりかなったりです。

さて、先日、辻村さんに依頼された妊婦のカメラハントの件をご報告しなければなりません。

35ミリは現像中でしたが、ビデオの方は出来ていましたので、ごらんに入れました。なにしろ私はプレイヤーとカメラマンをかねてましたので大変で、余り自信はなかったのです。しかし、辻村さんは、

「とても感受性の強い女性ですね。純生だから迫力があります。なかなかの傑作ですよ」

またもほめられ、ハナ高々となっている内に辰巳典子さんの約束の時間がきました。

両手に花、典子とナオミ

辰巳さんが出ている銀座の地球座へ向いました。彼女は映画の幕間のアトラクションのSM劇に出演しているので、終了までまだすこし時間がありました。

彼女は大金持の令嬢の役で、さらわれて責め折檻を受ける場面でした。辰巳さんの巧みな演技ぶりに辻村さんもうたくご満足の様子でした。

腰巻一枚で床柱に縛りつけられた辰巳さんは、なんともいえない色気を舞台いっぱいに発散させ、また縄目の美しさも披露していました。

舞台が終って楽屋口から出てきた辰巳さんはブラウスとストラップスの簡素なスタイルで、まるでそこいらの事務員みたいな感じです。豹変ぶりにいささか驚かされました。善は急げと青山の私のアジトに車を走らせます。

「辰巳さん、よろしくお願いします」

縄を持った辻村さんはビョコンとお辞儀します。辻村さんの眼が、獲物を前にした漁師のように輝き始め、辰巳さんに挑んでいきます。さっきの舞台よりはるかに迫力のあふシーンが展開されました。

私はカメラの撮り手に回り、全裸にされた辰巳典子のすばらしい緊縛美を余すところなくレンズに収めたのです。

最初の嵐がすぎ、猪縛りにされた辰巳典子は、無惨にも



二つ折りの姿勢で転がされており、辻村さんは一服しながら、本当にすばらしい女優さんですねと慨嘆されたのでした。

「辰巳さん、どうもご苦労さまでした」

縄をほどきにかかる、顔が上気しており、汗ばんだ肌は熱を帯び、赤味を増して、彼女の興奮がいかにわかりかを示していました。思わず抱きしめたいようなお色気でした。

「賀山さん、実は明日、団鬼六さんに会うのですが、よろしかったら一緒にされませんか」

帰り際、辻村さんは、東映の拷問映画のスティールを一束、



私の手の平にのせながら、そんな誘いの言葉をかけてくれたのです。東映の縛り師の仕事も、実は団鬼六さんの紹介だったのです。

私もSM界で評判の団鬼六氏には是非面識を持ちたいと思っていたので、よろしくとおねがいしました。

辻村さんと私は、渋谷の団鬼六さんの事務所を訪れました。辻村さんが手土産を渡し、東映出演のお礼を述べ、昨夜の辰巳さんとのプレイを報告し、しばしSM談義に花が咲きました。

辻村さんは私のSMに対する熱意を盛んにPRして下さい、やがて、今晚みんなでプレイしようということになり、団さんが新人を呼ぶことになりました。

やがて一人の若い女性が現れ、彼女こそ後年の女王、谷ナオミだったのです。

私のアジトにつくと、団さんは、

「ナオミちゃん、このオジさんたちは怖い人なんだよ。これからキミを裸にして縛ってしまいたいと言うんだよ」だが彼女は、なんのことかわからないようです。

「辻村さん、ナオミは役者です。芝居でナオミを犯すつもりでかかって下さい」

と、こんどは辻村さんをけしかけにかかります。

いやいやをしながら辻村さんに脱がされていくナオミさんは、とても19才とは思えず、その肉感的で迫力のあるボ



デイと演技力は、大モノの片鱗を見せていました・ナオミさんのヒイヒイいう悶え声で辻村さんはすっかり興奮してしまい、豊かな乳房を握りしめ、果てはパンティまで剥ぎとり、全裸のナオミさんをガンジガラメに縛り上げてしましました。

陸上げされたマグロみたいなナオミさんを眼の前に三人はビールで乾杯し、これからどんな手で責めようかと悪企みをめぐらしていました。

辻村さんと選手交代した私は、片足のロープを壁のフックに掛けもう一方の足を辻村さんをお願いして、大股開き



の羞恥責めに入りました。何ひとつ身をおおうものがないナオミさんは羞恥の部分のパツクリと開陳し、弱々しい声でイヤイヤと言っているのです。本邦長初で最後の谷ナオミの全開シーンだったのでしよう。ファイナーレとして、ナオミさんを囲んで記念写真を撮りました。

読者誌上デート

「縄妾志願」の洋子さん

読者とSMデート

記事・写真—編集部

洋子のメッセージ（本誌4月号掲載）



○S一五五センチ・B八〇センチ・W六〇センチ
H八十五センチ・チビだけど、それなりに恰好いいのよ。やせた女の子が好きな人にはわたしは好適。軽いからどんなポーズにもOKよ、よろしくね……。

（No・3 洋子・21才）

本誌掲載の「縄妾志願」は大変好評で、メッセージを掲載した女性たちへ

は毎日のように回送のお手紙が届けられています。どなたとデートするかは女性たちの判断にお任せしてあるので、百通ちかくものお手紙をいただいた女性もおり、相手を決めかねているという話でした。

今回は、前号の「るみ子さん」に続いて、読者とSMデートをすることになった「洋子さん」（4月号掲載）を取材させてもらいました。

洋子さんが選んだ男性は岐阜県で文房具店を営んでいるという三十八歳のK・Yさんです。

「私がYさんのデートをお受けしたのは、実は簡単な理由なんです。私も岐阜の出身で、親しみを覚えたからなんです。読者の皆さんからは三〇通ぐらいのお手紙をいただきました。Yさんのほかにもお会いしてみたい方が何人かいらっしやるので、いづれご返事を書きたいと思っています」（洋子さんの話）

「私が洋子さんを選んだのは、後ろ姿

ながら、初々しさがとてもよかったからです。小柄な女性というのも私の好みでした。会ってみて驚いたのはバストがすごく大きかったことです。恥ずかしいので小さめにいった、ということでしたが、細身でバストが大きい女



性というのが私の好みなので、とても嬉しかったです（Y・Kさんの話）

洋子さんとのデートは、Kさんの東京の友人宅で行なわれました。その友人もSMマニアだそうで、洋子さんと



デートできたKさんを羨ましがっていました。軽い夕食を済ませた二人が友人宅へ向うのを追ってSMプレイの模様などを取材させてもらいました。

二人っきりで食事をしてきたせいかプレイはスムーズに始まったのですが、



何分にもYさんは女性を縛るのは始めて、ということだと思うようには縛れません。

「むずかしいなア、SM写真を見て勉強してきたんだけど、後手に縛るのも思うに任せない……」



Yさんは、おとなしく両手を後ろへ回している洋子さんを相手に、ああでもない、こうでもないと何度も縛りなおしています。そのたびに、洋子さんは恨めしそうにYさんをチラチラ見上げているのです。



女性の心理とは奇妙なもので、縛られると覚悟を決めてきた以上は、ささと縛られてしまいたい、とでもいうのか、最初からもたついてしまったというKさんに少し焦れているような様子さえ伺えます。



「いやア、難しいもんだなア……」
しきりに首をかしげるKさん、どうやらすっかりアガっている様子なのでしばらくカメラを向けるのを遠慮している、やっと落着きを取り戻したのか、どうにか後手縛りができあがります。



した。
「ま、こんなところかな……」
Kさんは自分自身に納得させながら「痛くないですか？」と洋子さんの顔をのぞきこみます。多分、Kさんは優しい性格なので、



痛くないように縛ろうとするから、なかなか縛れずにいたのかもしれませんが、洋子さんのほうは、まだ服をきちんとして着たままなので、それほど恥ずかしいとは思ってないはずです。それに、Kさんの後手縛りがゆるいので、少し





手首を動かすと、簡単に抜けてしまいました。

「あのオ、もう少しきつく縛ってくださっても結構ですけど……」

洋子さんは縛られたと思った手が簡単に自由になったせいにか、クスッと笑



いながらKさんにいっていました。

「そうですか。それじゃ、今度は遠慮なく縛らせてもらいますよ」

Kさんがテレ臭そうに笑ったので、プレイのムードは急になごやかなものになりました。そういえば、Kさんが



後手縛りに熱中していたときは、なんとなく緊張したムードで、二人とも黙りこくっていたのです。

プレイ中、饒舌になる人と、反対に寡黙になる人とがいますが、どちらがいいとは一概にいえません。要は、

自分だけ陶醉するのではなく、相手の女性を駆りたて、高揚させてしまうことが肝心なのではないかと思えます。そのためにも、相手の女性の性格をよくのみこんでおく必要があるでしょう。無言の迫力で押しきられるのを好



む女性もいれば、賑やかな、まるでお祭り騒ぎのようなプレイを好む女性もいるからです。

洋子さんの場合、初めてプレイではまだよく判りませんが、どうやら賑やかなほうを好む女性のように思えまし



た。

さて、いよいよ洋子さんが服を脱がされ始めました。

といっても、優しいKさんのことですからムリヤリに脱がすなんてことはせず、いちいち、





「すみませんが……」

スカートを脱いでください、パンストを脱いでください、などと頭をさげているのが、ほほえましく思えたものでした。

K子さんのほうも、



「ハイ……」

と答えて脱いでいきます。

シミーズ姿になったところで、また後手縛りにしました。今度はうまく縛れたので、

「えーと、このまま胸のほうも縛りま



すよ」

と、洋子さんの乳房の上下へシミーズの上からロープを回しました。後手乳房縛りの出来上りです。

優しいといってもKさんだってマニアの一人です。自ら縛りあげた女体を



目の前にして気持が高ぶらないはずはありません。
「シミーズもブラジャーもとりましよう」
といいながら、再び後手縛りをほどこにかかりました。



洋子さんは、さすがに緊張して。シミーズやブラジャーはとったものの、両腕で大きな乳房をかかえたまま前こごみになって恥ずかしさをこらえている様子です。
そんな彼女の両手を、Kさんは無情



にも後ろへ回させて、またも後手乳房縛りに縛り始めました。前かがみになったままの洋子さんが体を揺すると、大きな乳房もブルンブルンと揺れるのです。
「大きいなア……」



Kさんはロープが上下にかかった大きな乳房を改めて眺めると、感心したようにいいます。

「恥ずかしい……」

洋子さんはますます前かがみになって大きな乳房をかくそうとします。



「このままちょっと転がして……と」

Kさんは洋子さんの体に手をかけるとゴロツと転がしてしまいました。洋子さんは横倒しになったまま、じっとしています。

「ウーム……、ウーン……」



Kさんはしきりに唸りながら、洋子さんの姿を眺めまわしていました。

そのうち、何を思ったのか、

「パンティ、ちょっとさげますよ」

というと、すばやくパンティのゴムに指をかけてスルツとさげてしまった

のです。洋子さんの可愛らしいヒップが丸出しです。

「アッ……」

小さな悲鳴をあげた洋子さんは、体をキュッと丸めて県命に恥ずかしさを耐えている様子です。



すると、Kさんまで顔を赤くして、あわてて洋子さんのパンティをずりあげてヒップを隠してやるのでした。

ヒップを隠してもらえたと知った洋子さんは、ホッと小さな溜息をついて緊張をときます。



はたで見ているとはがゆいほどの二人ですが、優しさのこもったプレイの中にも二人の息が次第に合いはじめているのを感じました。Kさんは無意識でやっているにせよ、どうやらその焦らし戦法が、洋子さんの気持を昂らせ





てきたようです。

洋子さんのパンティをずりあげてやったKさんが、次にとった縛りは、股間縛りでした。別のロープを乳房縛りのロープに交差させてから洋子さんの股間へ通し、後手縛りのロープにくぐ



らせて絞ります。

「アアッ……」

・ 薄い布地の上からとはいえ、女の羞恥部分をロープでタテに割られて洋子さんの悲鳴も真に迫ってきました。しかし、横倒しのままの股間縛りで



は面白くありません。Kさんもそれを感じたのか、無言で、洋子さんのヒップをかかえると、膝立ての姿にして、ヒップを強調させると、股間へ通したロープの端を握ってギュッと締めつけたのです。

これには洋子さんもかなりこたえたとみえて、しきりにヒップを揺すって、「アアッ……、こすれるッ……、食いこむわッ……」

と身をもがかせていました。揺れるヒップを眺めているうちにK



さんも興奮して、

「こらッ、おとなしくしてなさいッ」と語調を強めて、片足を洋子さんのヒップに乗せて押さえつけるのです。自ら縛りあげた女のヒップを足で踏みつける、その行為が、おとなしいと



思われていたKさんの嗜虐心を煽ったのでしようか、顔をまっかにしながら無言のまま洋子さんのパンティをはぎとり、それまでとは打って変わった機敏さで開脚縛りにしてしまっただけです。洋子さんは羞恥部分をむきだしにされたまま開脚縛りを強制されて、俯向いたまま、いやいやをするように肩をゆすっていました。

もどかしいようにゆっくり進行する二人のプレイ。初心者同志とはこんなものかもしれないが、ギャラで庸ったモデルの緊縛とは違う、熱いムードが漂って、今更のようにSMプレイの楽しさを感じさせてくれたお二人のデートでした。

プレイ後、Kさんは、遠慮していると、かえってうまくいかないようですね、と語ってくれましたが、今回のデートでいくらか自信がついたので、これからはハントに精を出すそうです。

手 青い の 闇

範 生 沼 木

孝 馬 四 イラスト

地下鉄を阿部野駅で下りると、海野は時計を見た。まだ少し早いな、と思ったがゆっくりと歩いて駅前の大通りを少し行った繁華街の反対側にある白いビルの上階にある喫茶店「サフィヤ」の階段を上っていった。窓際の場所に腰を下ろしコーヒーを注文すると、外を眺めながら海野は二日前、初めて真理とすごした夜の事を思い浮べた。とりたて美人と言う程でもないが、青白い顔に影があり、肌は病的な位いすき透った白い柔肌を持っていた。

気持のたかぶりを覚えられような、そんな相手でない、彼の心は燃えないのであった。これは、海野が今迄に多くの体験を経て知ったものである。だから抱いて見て、二度と逢ふ事もなかった女は数知れなかった。真理と肌を合せながら、海野はその柔肌の薄い香りに顔を埋めて、上から下までじっくりと愛撫しながら、そのすき透る肌の感触を味った。

海野にはそれが少なからず魅力を感じた。

それは思った以上にすべすべと弾力があつた。海野にとって普通の交渉は味気ない乾いたものであったが、次の楽しみを期待出来るかどうかの刺激はあつた。

胸の底で、この柔肌に縄を掛け引き絞って喘がせて見たい、汗と苦痛にゆがませてこの柔肌がどんな変化を見せるか、今迄に彼の目にふれた以外の、全く別の何か新しい刺激がそこから出てくるかもしれない。そんな思いにふと立ち立てられたが、表面は、いつもの冷静さを崩さず、海野はいつもそうするよう

真理はベットのの上に、細身の白い肢体をうねらせ、のけぞらせて、時々小さく呻いて喘いだ。

うに、至極普通の決まったコースを辿ってホテルの一室で真理を抱いたのであった。彼は初めから自分の欲望をさらけ出す事はしなかった。まづだれもする当り前の交渉の中で、じっくり相手を見るのだ。

海野はそんな真理の細いしなやかな両手を思いきり背中に廻し、組み合わせるように押上げた。小さい悲鳴を上げた真理は身もだえしたが、その息づかいからも、あからさまな拒否反応はなかった。

そして、これならと思う或程度の見極めと

背の上で組合わされた両手は、やわらかく肩のあたりまで上っていた。海野の手は更に荒々しく、真理の身体を弓なりの格好にさせたりして、かなりの力を加えたりしながら、やがて薄く汗ばんだ柔らかい髪の中に、彼



は身体を押入れて行った。

終ったあと、真理の顔を見ながら海野はこの女とはもう一度逢いたいな、と思った。

そして期待通り今度逢えば、この病的なまでの薄い柔肌から何か新しい刺激が生れそうであった。

ホテルを出て、お茶を飲みながら、海野はやんわりとSMの話をした。そして明後日、よかったら又逢ってくれないかと話すと、真理は小さく笑って、いいわ、と答えた。彼女もこんな話は初めてではないらしく、さして驚いた様子は見せなかった。海野は帰りの車の中で、そつと五万円入りの封筒を彼女に渡すと、明後日の約束を決めて別れたのであった。

窓の外を流れる車と人の波は、同じようなリズムで途絶える事なく続いていた。

海野は時計を見たが約束の四時にはまだ間があった。真理は必ず来ると思っていたが、もしも現れない時の後の予定も一応立てておかなければならないな、と思っていた。

クラブ「楓」のママ兵藤ふじ子にはまだ連絡していなかった。真理を紹介してくれたのもこのふじ子であった。

いつも大阪へ来るたびに何かと世話になっ

ているのだ。昨夜は梅田にある店の方に行くつもりだったが、戸田との付き合いでそれが出来なかったのだった。

戸田と逢って、まさかああいう時間の過し方をするとは想像もしていなかった。全く予想外だったのだ。

海野の脳裏に昨夜見た8ミリ映画のシーンが鮮やかに浮び上ってきた。ミナミのレストランで戸田と食事をしながら、彼は、「今から8ミリを見に行かないか、実は思いがけない電話を今日受けてな、8時に約束したんだ。かなりのものらしいんだ、前から何度か話には聞いていたんだけどね、減多な者には見せられん代物らしいよ。直接のコネじゃないんだが、会社の取引関係の方からのツテでね、知り合った相手なんだ。丁度君が来ているから相手にも了解はとってあるんだ」

どうだと言わんばかりの戸田の顔が、ビールのせいばかりでなく少し上気していた。

彼がかなり乗気であるものを、海野は尻込みする筈はなかった。

その種のもものは二人とも以前から、かなり目にはして来ているが、いづれも興ざめするものばかりだった。それを知っての上で彼が興味を持つのだから、何か期待の持てるものがあるのかも知れない、と海野は思った。

約束の時間に車で戸田に案内された場所は住宅街と思われる閑静な中にある。一見中流構えの二階家であった。

その応接間に通され、雑談を交した後、見せられた8ミリ映画は、今迄海野が目にして来たものとは全く違って、かなり迫力があり、時には血が逆流するような興奮すら覚える位いのものであった。

(なる程、これは見せかけの作りものじゃあないな)

戸田も同じ感じらしく、身を固くして画面を見つめていた。

カラーではなく、モノクロだが、鮮明な画面と同時録音の技術は相当高度のものであった。いきなりクローズアップで現れた美人の表情は切迫した恐怖感がにじみ、その身ぶりは芝居ではない実際のそれらしかった。

まだ若いショートカットのこの美女は、質の悪い金融業者の手にかかって、借金の肩替りを、更に暴力団まがいのボスに渡された上に、そのカタに連れ込まれたらしく、

「金のかわりにたっぷりこの体を楽しませてもらうからな、ええ、別嬪さん、フッフ、文句はねえだろうな」

そう言った二人の男の手は荒々しく動いて、女の着ているものを次々剥がし、素裸にする



と、容赦なくその白い裸身に縄を掛けていく。

男達の縄捌きは鮮やかで、後手に縛りあげられた女は身をよじるように、荒い呼吸と小さい悲鳴をあげていたが、彼らは委細構わず縛りあげた女をその場に立たせると、改めて裸身のすみずみまで、まるで舐めるように調べ廻すのだった。

部屋は、地下にでも造られてあるらしくコンクリートの壁に大きなシミが滲入している。

強いライトが女の裸身を照らし、きめ細かい白い肌がぬめぬめと光っていた。男達はギラギラ光る目ばかりでなく、しゃぶりつくように女の肌を眺め廻し、匂いを嗅ぎながら、手も執拗に全身をまさぐっている。

白いふくよかな女の尻の割れ目に、男は顔を付けたり、手を下腹部の秘所へ撫ぜ廻しながら、その指先の匂いを嗅ぎ、薄笑いを浮かべると、それを女の高い鼻の穴に押込んだりした。男達の興奮した息遣いと、女のきれぎれな小さい悲鳴があたりを異様な雰囲気につつまんでいる。

縛りあげられている女は、なめし皮の革敷の上に転がされ、一人が女を坐らせて顔を上げさせると、別の男が女の顔から全身に小便を放水するのだった。

それも交替でやり合った後、彼等はニヤニ

ヤ笑いながら、ビチョビチョにぬれている女の身体を敷皮の上で、まるで何かを塗りたくるようにさすり廻した。

そして何度もその身体を転がしてから、立たせると、次の部屋に通じるドアを開け、女を押し入れたのだった。

さして広くないその部屋の光景に、一瞬女は身を震わせ喘いだ。

見ると木製の首枷台に、両足を広げられたもう一人の女が、これも素裸にむかれ、中腰の格好で首枷に掛けられているのだ。

「よく見るんだな、この女もおまえと同じように、借金を踏倒して逃げて捕まったんだが、ちゃんと話の判るようにお説教をしてやっているところだ」

男は身を震はせている女の耳元に囁くように言いながら、

「そのうちなんでも言う事を聞くようにさせてやる」

口をゆがめて笑う男の顔は、醜悪の本性をむき出しにしているようだった。そこへ又、別の男が現れると、二人の男が首枷台の女を弄り始めた。その様子を女は押さえつけられながら、すぐ近くでじっくりと見せられるのだった。

首枷台の女は、すでに何回も男達の責め弄

りを受けているらしかった。白い顔を伏せ、身動きならない手足を時々震はせていた。

一人が前に、もう一人が後ろに廻り、情け容赦なく女を弄りあげていた。

前の男の股間には、特製と思われる器具が付けられ、太く柔らかなその先端から何やらしずくのようなものが手の動作で飛び出るように細工されているらしく、始めはゆっくりと、あとは激しく、女の顔に押付けられ揉まれ、さすられ、口の中にも周りにもぬるぬるした液が溢れ流れた。

「フッフ、こんないい匂いの飲物は滅多にないぜ、さあ、もっとたっぷり飲むんだ」髪を掴まれ、息も詰まる位い口中に流し込まれて、女は呻きながら喘いでいた。同時に、後の方は男の手が、まるで粘土でもこね廻すように胸のふくらみから下半身を揉みさすると、やがて手指にたっぷり、これも液状のものを女の尻の割れ目に丁寧に塗りたくった。そこへ柔らかいゴム製の親指大の棒が差し込まれ、ビチビチと小さく音を立てて女体を震はせていた。

前と後ろで、執拗なまでのこんな弄り責めに、女の呻き声もだんだんに細くなっていた。傍らで、しっかりと押えられ、それを見せられていた女は、立って居られなくなった



のか、ふらふらとその場に崩れ折れてしまったのだった。

女は最初の部屋へ運ばれ、再び革敷の上に転がされると、ぎっちり縛りあげられている縄目を解かれた。

「フッフどうだな。おまえもああしてたっぷり可愛がってやるが、あれはまだ序の口の方だからな、まあ、ゆっくりやってやるぜ。一ぺんに刺戟を与えて薬が効きすぎてもいけねえからな。フッフ、少し休ませてやる。だがな、休ませるのも特別な仕掛けをしてやるからな」

すぐさま一人の男が取出してきたのは、黒いなめし皮で出来ている拘束衣であった。そして皮製の紐も束で手にしていた。

女の裸身は汚水でまみれたままで、それが乾いて、にぶい光沢を放っていた。

抵抗する力も無く、男達の手で彼女の全身はその黒光りの革衣で包まれ、更にその上を革紐で後手に嚴重に縛りあげられていった。

拘束衣の下半身の一部と、後ろの尻の部分だけはむき出しになっている。全身を締めあげている革紐は特にその、むき出しになっている下半身を縦に割って幾重にも喰込ませ、ぎっちり締めあげられたのだった。

かすかに顔を振って喘いだ女の口から泣き

声がもれていた。

男達はニヤニヤ笑いながら、女の顔に鼻吊りの枷を掛け、形のいい鼻を高々と上向けて吊り上げ、固定してしまつたのである。

革の拘束衣を着せられ、嚴重に縛り上げられた女は男達に立たされると、そこで再度縛り目を調べられ、じっくり観賞されてから、そのままよちよちの無残な格好で歩かされ、部屋から連れ出されたのであった。

「フッフ、このまま暫くの間この俺とベツトで楽しもうぜ、な」

男のゆがんだ薄い唇が大きくクロースアップされて、そこでフィルムは終つたのである。見終つて、海野は正直、胸の高鳴りを覚えていた。この8ミリのだれが撮つたかは知らないが、これはまさしくまがい物ではないと思つた。

画面から伝わってくる、匂ってくるあの雰囲気は、演出では出せない本物のような気がしてならなかった。

今迄にこんな物にお目に掛つたのは初めてであつた。戸田が言つていた通り、滅多に見られんような代物であつたようだ。

上気した戸田の顔にも、満足以上の驚きがあつたようである。

その夜ホテルへ帰ってから、この時の余

韻は海野の胸からなかなか消えなかった。

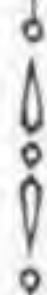
窓の外の風景は相変わらず、車と人の流れがつづいていた。

新しいコーヒーを注文して、再び海野は時計を見た。そろそろ約束の時間であつた。

それにしても戸田の奴、いいコネを見つけたものだ、と彼は思った。あいつの事だ、どんな事をしてあの種の物を手に入れるに違いないだろう、そうなら、いやそうやってほしいものだが、そうすればこっちも大きな楽しみがふえると言うもんだからな、海野は新しい煙草に火を付けながら薄笑いをこぼした。

その時、目の前に甘い香りをただよわせて真理が姿を見せた。

海野はこれでどうやら、昨夜からの身体の下に溜っているうずきが思いきり発散できるな、と肩で一つ大きく息をしたのだった。



異聞

「憂国」

原 紀里雄



陸軍駒場練兵場は、旧一高、駒場ヶ丘の北から南へ、広大な土地に広がっていた。眼下に目黒川を見下し、その南には同じ陸軍の馬場操練所が続いていた。丁度、現在の警視庁第三機動隊と、第二交通機動隊の居留地に当る場所であった。

この駒場練兵場は、佐々木練兵場の副次的操練の目的を持っていたが、主に、近衛歩兵大隊が常駐し、その練兵の目的に使われていた。練兵場の周辺には、士官クラス以上の家族宿舎が数十軒建ち並んでいた。竹島静次中尉も、その宿舎の一軒に、新妻の恵子と共に住んでいた。二人は、昭和十年十月に結婚、子供はなく、まだ新婚気分の抜けないまま、市ヶ谷参謀本部勤務から、この駒場勤務となり、移り住んでいた。竹島の役職は、練兵場付、主計中尉ということになった。昭和十二年、三月のことである。前年の昭和十一年二月二十六日に、あの二・二六事件が起きていた。

北陸の寒村の出身である竹島は、皇道派青年將校達の仲間であり、彼が結婚する迄は、事件の決起將校達と行動を共にして、事ある時は一蓮託生の命運を誓い合っていた。その竹島が事件に加わらなかったのには二つの理由がある。一つは、彼が結婚したことで、新

婚の彼を仲間に加えるのは忍びないとする友人達の思いやりが、竹島を謀議から外してしまったこと。二つめは、彼が、事件のあった昭和十一年の正月から、右手に激痛を訴えて、医師の診断の結果、右腕上腕部の骨が原因不明の進行性軟化症に冒されていたこと。それが仲間の知るところとなり、「竹島は外そう、この計画には参加出来まい」ということになったこと。

竹島中尉は、事件当日、陸軍病院のベッドにいた。その事件を知った時の胸中は、何とも形容出来ない口惜しさで満ちていただろう。半年の入院生活を終えても、腕は一向に良くなり、ほとんど右手が不自由のまま退院したわけである。医師も首をかしげ、

「痛みは一応無くなったし、他へ転移する徴候もなさそうだから、事務をとることぐらいならば可能であろう」

として、竹島の駒場練兵場付き主計官が決定した。この役職は閑職であった。

竹島の軍人としての無念さは、この時、既に横溢していた。決起にも加えてもらえず、又、将来、軍人として国の役に立ちたくとも、自らの身体のことを思うと、それさえも果たせそうにない。竹島の「切腹」への決意はこの時、固まっていた。せめてのこと、国の弥

栄を祈って、腹を切る以外に、軍人の自分の生きる道はないと

しかし、すぐにそれを決行しなかったのは、妻への憐憫の情が深かったことによる。同時に、妻への未練でもあった。

夫婦がいるだけである。妻の恵子も同じように、弟が嫁をとり家を継いでいる。父母はこの世の人ではない。もし竹島が腹を切れば、恵子も必ず生きてはいまい。その思いが竹島にはあった。

駒場へ移り住んだ竹島夫婦は、誰の眼にも、幸福そうな新婚夫婦に映っていた。事実、竹島の入院期間を差し引けば、新婚といってもいいぐらい、二人は共に暮した月日が短い。夫への思いがさらにふくれあがっていた。右竹島はこの世に身寄りと言え、郷里に兄手の不自由な竹島の世話をする恵子の瞳には



慈母の愛が宿っていた。

竹島も、恵子の美しさを認めた。雪国育ちの恵子の肌はあくまでも白く、きめ細かく、竹島の不自由な愛撫にもよく応えた。たまたなくいとしく、愛らしかった。それが余計に未練を誘った。未練と憐憫が重なり合って半年が経った。事件から一年以上が過ぎていた。その未練を断ち切るように、竹島が恵子に自分の決意を打ち明けたのは、春の駒場ヶ丘に土埃が無う一夜のことだった。

黙って夫を直視したまま、恵子は告白を聞き終えると、首を横に動かした。泣いてすがりつきたい気持ちを押えつけるようにして、「思いとどまってはいただけませんか」と一言。竹島は心が動くのを禁じ得なかった。その夜は、説得をあきらめていた。

次の夜、竹島は前夜にも増して、固い決意を話した。恵子は、

「どうしても——」と夫をみつめた。唇を真一文字に結んで首肯く夫をみると、

「私もごいっしょさせて下さるわね。」

竹島は、いけないと言えなかった。二人の間に無窮の時間が流れていった。

竹島と恵子は、黙した瞳の内に、各々の充足感を感じ合っていた。不思議とおだやかな気持ちがあった。と同時に、腹を切ることへ

の昂ぶりが沸然としてきた。

「左手で腹が切れるだろうか」と竹島は考えた。

次の夜は満月だった。明りを消した室内にも月の光が差し込んでいた。

月明に恵子の肌が浮きあがった。

「この世の名残りにお前の身体をよく覚えておきたい。」

竹島の言葉に恵子は素直だった。思えば結



婚してからこの日まで、夫の前で裸身を晒したことは幾度があっても、この時ほど、自分の身体を誇らしく、堂々と開いたことはなかったように思えた。最後の沐浴を済ませたまの身体を浴衣につつま、夫の待つ、庭に面した八畳の間へ。くもり硝子のガラス戸を背にして浴衣を落とすと、竹島の前に、恵子の白磁の肌が現われる。

髪をうしろで束ね、恥しさから背を向けている恵子の肩のあたりに月の光が落ちていた。

竹島の眼には、おぼろに霞んで見えた。竹島は泣いていた。恵子の裸身の美しさへの感動の涙でもあり、今生の名残りの涙でもあった。肩の細い曲線と項のたよりなさに、今、自分と共に命を絶とうとしている妻への哀惜が沸々とこみあげてきた。

「恵子」そう呼んでみた。涼とした声であった。恵子は右手を胸に、左手を女の生命の叢林へあてて、くると振り向いた。

「きれいだ、とても」

白く浮き出た肌に朱が差してくる。竹島はむしゃぶりつくように妻を抱いた。接吻の雨を降らせた。唇、耳、項、そして双の乳房へ。決して豊かとは形容出来ないが、形の良い、凛と張った双球があった。乳首は未だ幼さを残して、薄桃色に輝いていた。それでも、堅く存在を誇るように突起している。竹島の唇がそれを含むと、恵子の身体が共鳴して震え出し、吐息といっしょに、小さな愉悦の音が流れた。

「あなた、私もお腹を切っている？」

突然の妻の声に、竹島は思わず愛撫が中断した。妻の顔は、竹島を見下して、それでもおだやかだった。

「恵子、俺は腹を切るが、お前は女だ。腹など切れるわけもなからう。いかんよ、苦し

むだけだ。」

「ううん、大丈夫よ。私ね、あなたと同じことをして死にたいの。喉を突いたり、胸を刺したりして死ぬのは嫌よ。あなたと同じように、お腹を切りたい。許して、お願い。」

竹島の不自由な右手のことを考えて、恵子は腹を切るなどと言い出したのかと思ってみた。確かに、自分の割腹は左手でするのだから深くは切れない。腹を切ることは形式に終わってしまうかも知れない。その自分の無念さを察して、妻は、自分も腹を切ると言い出したのか、そうだとしたら、不憫である。女の身で切腹は難しい。まして、自分が先に腹を切り、その後始末をしてから、誰も介添えない身で腹を切るのは、よほどの女丈夫でも困難だ。それをこの恵子がしようと言うのか。

そして、恵子の性格から、一度言い出したことは、必ずやり遂げる友であることは、竹島が一番よく知っていた。竹島はしかし、承諾はしなかった。承諾を与えるかわりに、恵子の叢林を被った手を払いのけると、竹島の唇は、恵子の女の生命へ密着していった。

「あゝ、あなた、そこは汚ない、そんなことをなさってはいけません。」

事実、妻のその部分への口吻は、その時が

初めてであった。

竹島は恵子がたまらなく愛しかった。白いやわらかな曲線を描いた腹、そして、その中心に置かれた深く切れ長の臍。そこが無惨にも切り裂かれるのかと思うと、余りにもせつなく哀しい。

恵子は裸身を横たえ、狂い乱れた。今まで夫の身体のことを考えて慎しんできた女の情念が、炎となって一気に吹き出していた。

夫のものを口に含んだ。愛しかった。これが今生の最後の営みだと思うと、羞恥は消えていた。夫は何度も達した。恵子の口の中、喉の奥へ放出し、そして、女の秘洞の奥、腹の真底へも放出し、今また、彼女の白い腹の上へ夫の白い泥液が飛び散った。果てることのない宴かと思われた。恵子も達した。何度も何度も、忘我の境をさまよった。二人だけの世界が、今、生命を断とうという前になって、夢幻のように華開いて、そして終わった。

恵子は夫の流した血の海にいた。異息が鼻を制したが、気にならなかった。白い敷布は、もう真赤だ。どす黒いように濡れている。

竹島は、やはり苦しんで死んでいった。左手での切腹は無理だったのだ。

揮一本の夫は、左手に九寸五分の短剣を持

ち、天皇階下万才を叫ぶと、一気に右脇腹へ突き立てた。深く切ろうとしてか、力の限り突き立てた。しかし、刃は突き立ったまま、動かなかった。思い直して、一度、腹から刃を抜くと、もう少し下の右脇腹へ。今度は浅く突き込み、一気に左まで引きまわした。そこまでであった。氣力を使い果たしたように、竹島は、刃を抜きとり、己が首筋めがけて、左手の短剣を突き刺した。しかし、左手の感覚ではおぼつかない。一筋、二筋、狙いは外れた。首筋が無惨に割れた。柘榴のように血がはじけた。ピューという音を立てて血が飛んだ。それでも意識は薄れない。口で息をすると吐瀉物がこみあげてくる。苦しんだ。見かねた恵子は、夫の左手に自らの手を添えて、身体をぶつけるようにして、夫の首筋深く突き入れた。ガクンと身体がはねかえったように硬直して、夫は絶命した。

「あなた、さぞ口惜しかったでしょうね。左手一本では、満足にお腹が深く切れなかったのですから。いいのよ、その分、私が立派に切ってみせますからね。」

恵子は、夫の禪のあたりに眼を落した。血の海の中で、禪もベットリと血が溜りをつくられていたが、その赤い血の中に、夫の男性から放出された白い泥液があった。



「あなた、あんなに私の中に出したのに、お腹を切りながら、また出てしまったのね。こんなに沢山」

死の直前まで生命の営みを残した夫が、まるで恵子に何かを伝えているように思えた。

恵子は無意識に、傍に落ちている。夫の九寸五分の鞘を右手にとると、夫の側に立って、血に染った喪服の裾を開くと、かがみ込みような姿勢で、己が秘洞に、その鞘を突き刺した。

「あなた、私、お腹を切る前に、ここを、こうして、突くわ、突いて、私のお腹の中をめちやめちやにするわ。子宮も、こうして、破ってしまう」

ぐえーという絶叫を発して、恵子は鞘を自らの秘洞深く突き刺して、力の限りこねまわした。耐えられない痛みが襲ってくる。

夫の死の儀式の中に放出された泥液を見て、自らの生殖の機能も破壊してしまいたいという無意識の情炎の故だろうか。秘洞からは、

鮮血がしたたり落ちる。

恵子は痺れるような下腹部の激痛をこらえて、喪服を着直し、血の海の部屋を出た。次の間が自分の死の座に用意されていた。

太腿には、さきほどの聖器を破壊する行為の名残りの鮮血が、まだ流れ続けていた。痛みは、ドクドクと脈打つような鈍痛になっていた。

あらかじめ用意された白布と三宝。恵子はその死の座についた。

最早一向の躊躇もない。思い残すこともない。ただ、夫の果たせなかった、深く大きく切り裂く割腹を果たすことだけを考えればよかった。

三宝を後に廻し、母の形見の短剣を抜く。切先を見つめる。杉原紙を刀身に巻きつける。喪服の帯を解いた。作法通りにひとつひとつ切服への段を登りつめていく。

正座した両の膝をすぼめるように、ピタリと合わせ、脛と太腿をひとつに、抜き帯で結ぶ。

下腹部の鈍痛が、かえって勇気を与えてくれているかのようだ。

「あなた、これから私も参ります。おそばにいきます。よくご覧になって下さい。立派に切ってみせます。」

そう、はつきりと口に出して言うてみる。

胸元に双の手を差し入れて、一気に喪服を肌脱ぎにする。白の長襦袢が現われる。それのためらうことなく押し開いた。

双の乳房が、そして白い臍下までが、一気に現われる。

女ながらも、夫にかわり腹を割かんとする恵子の凛々しい裸身が、夜気に震えた。

自らの乳房を愛しむように、そっと両の掌で被ってみた。

「愛しい乳房よ、さようなら、恵子はいま切腹します。」

右手に短剣を握り、左手で、これから切り裂かんとする己が下腹部を揉んでみる。指先で左脇腹のあたりを、グイグイと、押し撫でみる。

「いざ、いきます。あなた——」

力の限り臍下、二寸近くの左脇腹へ突き立てる。肉の壁に押しもどされるように、刃先は没しないで、皮を少し破っただけで止まっていた。

「ダメだわ。お腹に力を入れなくては」

思いきり反り身になると、腹を膨くらまして、再度、渾身の力で突き刺した。

ドスッ——。鈍い、はじけるような衝撃があった。痛さは、瞬間には感じなかった。

「あっ、刺さったわ、お腹に刀が刺さっている」

油汗が額から流れ落ちてくる。痛みよりも嘔吐感が襲ってきた。

このまま、一気に右脇まで引きまわしてしまおうと、力をさらに加える。

ゾリッ。肉のはじける音が響く。

「切れてるわ。お腹が切れてる。」

黄色い脂肪層を露わにしながら、腹の肉は少しづつ、確実に裂けていった。

「うむ、うん、うん、ぐえっ。ぐ——。」

必死の呻きだった。胃液が食道をのぼり、恵子の口の中にあふれ、逆流していた。

苦吟の様子は、しかしながら、ひたむきな夫への官能の炎により、むしろ愉悅の表情とさえ受けとれた。

「切ったあ、一文字に。切れている。私のお腹が一文字に。」

事実、波模様、ジグザグしてはいるものの、ほぼ真一文字と言ってもよいほどに、右脇腹に割腹は及んでいた。

「これから十文字よ。お臍へ突き立てなくては」

切先を下に向け、両の手で、挟るように臍を突く。

「痛い、うーむ、痛い。駄目。こんなに痛

い。うー。ひどいわ。ひどい痛さよ」

一文字の痛みとは比較にならぬほどの激痛が襲ってきた。余りの痛みのためか、刃先は肉を裂くのを忘れたように押し戻されてきてしまう。

「駄目だわ。切れない。これでは十文字に切れない」

恵子は、意識が薄れていくのが判った。このままでは十文字腹を切り遂げられない。激痛と出血により、朦朧となる意識の一点を搾り出すように、全体重を刃先にかけてみた。ゾリッ——。鈍い破裂音のような響きがあった。

「切れた。切れたのね。十文字に」

刃先は、恵子の血を吸って泥沼のようになった叢林のあたりで止まっていた。

「とうとう切ったのね。あなた、よく見て女ながらも、腹十文字に切ってしまったわ。えらいでしょ。誉めて下さるわね」

既に、恵子の意識は幽明界へ入っていた。ゆっくりと、身体が前へ傾いていく。双の腕は、短剣を抱え込んだまま。

刃先は恵子の女の生命の部分を突くように叢林の中へ没していた。

白布は血の海の中に沈み、恵子の身体から断末魔の痙攣が起こり始めていた。

血の海の中に浮かぶように残された遺書に 二人の発見された遺体が全裸に近く、情交のは、一行、天皇階下万才、と記されていた。 跡が生々しい故が、私匿されたままである。 竹島夫妻の割腹自決は、その凄惨さの故が、



犬と私と夫2

上野悦子

夫はイライラした様子で、私とチェリーのした。

重なりあった部分を覗きこんでは、

「どうだ？ まだ駄目なのか、早くつがってみせろ！」

と怒鳴りたてるのです。

「まだ、ですわ……」

長い時間、私なりに努力はしてきたのですが、どうしてもつがったという感じにはなれないのです。

夫はとうとう本気で怒りだしてしまい、

「この犬、バカ犬に違いない。せっかく、人間さまの、しかも飛切りのスケベイ女が足を開いて待っているというのに。このバカ犬めが！」

怒った夫が足で犬を蹴ると、

「キャン！」

と鳴いて部屋の隅で小さくなってしまいました。

私のご気嫌をとり、ドレスや靴まで買って

獣姦に挑戦した夫なのに、それができないと判ると、犬に当たり散らすのです。

「こんなバカ犬、殺してやる、保健所行きだ」

犬と獣姦はできなかったのですけど、可愛いコリー犬のチェリーに、私はペットとしての愛情が芽生えていました。

「もう一度、私が試してみますから、保健所行きだけは許してやってください」

私はチェリーのペニスを優しく握り、顔を寄せました。

「さあ、私とつがってちょうだい。さもない

と本当に保健所行きにされるわよ。夫はサドだからウソでないのよ。私の女の中って気持ちいいのよ、頑張ってね」

でも、やっぱり前と同じでした。

このままではチェリーは本当に保健所へ連れていかれてしまうと思うと可哀想で、私も懸命に頑張ったのです。

「チェリー、あなた……、私がフェラしてあげる、おしゃぶりよ」

それでも駄目なのです。

「駄目ねえ、あなた、インポなのね。仕方ないわ。私、丹那さまを替えますよ」

私まで怒ってしまいました。

＊

私の丹那さまのチェリーはインポのクセに女性器を舐めることだけは大好きなのです。

「この犬、変態かな？」

夫はそういうけど、私もそう思えてくるのです。私が、ベッドの端に裸で腰をかけ、股を開いていると、肉ヒダに舌を当てて愛液を舐めるのです。私も、犬のあのザラザラした特有の舌で舐められると、異常な快感にいい大きく股を広げて舐めさせてやります。

「どうだ、悦子、気持ちいいか」

「気持ちいい……」

チェリーと私がお尻とお尻でつながるところを期待してカメラを構える夫ですが、どうしてもつながらないので、犬に舐陰されている写真を撮っているのです。

どうして犬って舐めるのが好きなのでしょう……。私の丹那さまのコーリ犬、チェリーは、私が股を開いている間、ずーっと舐めつづけているのです。

夫が何本かのフィルムを使いました。猥姦シーンこそ撮れませんでした。が、犬との戯れの写真が、夫のアルバムに加えられることになります。

＊

私と犬との戯れの写真を夫に見せられました。

「何だ、この悦子の気持のよさそうな顔。そんなに気持がいいのか」

「ええ……」

そんな言い方をされると恥ずかしいのですが、犬の舌のザラザラしたところが、異常な快感でした。

「オイ、見ろ。お前、目まで細めて、まるでオナニーで気をやりそうな時の顔と同じだ」
夫のいう通りです。オナニーでだくだくと快感が出てきて絶頂へ向っていく時と同じように、犬に舐められて、私は気分を出しているのです。

夫は、そんな私の写真を見て、
「チンを飼う」



「犬と私と夫」イラスト入選作品・室井亜砂路

と相談を持ちかけてきました。その頃、夫はあちこちから獣姦の資料を集めて、その事に熱中している最中でした。

「俺も出張が多いからなあ……」

口ではそんなことをいいながら、すぐに、舐陰にはチンが一番いいなどといい出すのでした。

「俺の調べでは、チンは未亡人専用の犬らしいぞ」

夫が期待していた獣姦で満足させてあげることができなかった私なので、反対することもないのです。

私も賛成すると、夫は早速、チンを買ってきました。こうして、私の家では二匹の犬を飼うことになったのでした。

コリー犬、チェリーも可愛いかったですけど、ドングリ眼の、ヒョウキンな目つきをしたチンも私は愛しました。

夫の知識は正しく、チンはコリー犬よりもずっと舐陰が上手なので、コリー犬は獣姦用、つまり結合用に、チンは舐陰用にと夫は決めました。

私とつがうのが目的で犬を飼ったのですがどうしてもつがうことができないので、コリー犬は庭で、チンは部屋の中で、舐陰中心の生活が始められたのです。

コリー犬にチンが一匹増えて、世話こそ大変でしたが、暇で何もすることのない私にはとっても楽しい毎日になりました。

チンが私の家に来てからは、それまで私たちの寝室で寝ていたコリー犬が庭で寝て、替りにチンが寝室へ入りました。ちょっと可哀想でしたけど、コリー犬のチェリーは、獣姦もできませんし、チンよりも舐陰が下手なので、すから仕方がありません。それに、そうするようにとの夫の命令なのです。

私が、腰にバスタオルを巻いてお風呂から上ってくると、夫はチンの小さなペニスをいじりながら待っています。

「それ！ 舐めてやれ。悦子の××××を」

夫は私からバスタオルを剥ぎとると、どつと私を倒してしまいます。チンを意識して、倒れたときにわざと股を開いたものですからチンはさっそく唸りながら鼻をこすりつけてきます。

「ウーン、話の通りだな」

夫ときたら、とってもご気嫌で、ニヤニヤと中年男のいやらしさ丸出しです。チンは、私の入口を見つけると、すぐに舐めはじめました。

「気持ちいい……」

「いいのか、そんなにいいのか」

「とっても気持ちいい……」

私は正直にいいました。チンは舐めだしたら絶対に離れようとはしませんから、すぐに愛液がなくなってしまうます。そこで、私は夫に言いました。

「お××を舐めてくれないと、おツユが……」
「ヨーシ、××だな、悦子の××をねぶらせるのだな」

「はい……」

普通ではとても言えない言葉が平気で口に出せる心境です。

夫が冷蔵庫からバターを持ってきました。私の肉芽は皮かぶりですので、めくりあげてバターを塗るのです。夫が指先につけたバターを塗りこめました。

「さあ、これを舐めるんだ！」

チンはバターの匂いを嗅ぎ、私の飛びだした肉芽を舐めはじめました。

「気持ちいい！ そこよ！」

ザラザラした犬の舌で舐められたので愛液が出てきたのでしよう。チンは舌を伸ばして奥のほうまで舐めるのです。

「バターがなくなっただけかな」

なくなれば塗り、なくなれば塗りするので私は舐陰の快感から降りることができないのです。

「どうだ、チンは？」

「いい……、いいわ、この犬……」

「チェリーとどうだ？」

「私、チンのほうがいい……」

それ以後、チンは私たち夫婦の営みの前戯には欠かせない一員となったのでした。

＊

会社の仕事ですから仕方がないけど、夫は2週間もの長い長い出張に旅立ったので、私はまるで未亡人のような生活が始まりました。

夫が家にいる時は、何かと、世話のやける夫、そんな感じの私でしたが、いざいになると夫の有難味がわかります。それに、私は仕事を持っていませんので、暇で暇で一日を経るのが大変な苦痛です。

まるで毎日が日曜日みたい……。難かしいことは夫に任せればいいのですから、私が考えることといえは性のことばかりです。

（チンで、どんなペニスを持ってるのかしら）私の肉体は一週間もセックスとご無沙汰していますと、モヤモヤしてきて、そんなことを考えるのです。

見てやろう……。私の後を追ってくるチンを捕えて、抱きあげるとペニスをいじってやりました。

（あら、これがチンの瘤だわ……）

小さな犬なのにちゃんと瘤を持っているのです。瘤とペニスをしごいてやると、毛の中から小さなペニスが飛びだしてきました。面白かったので、いじり続けていると、ペニスが小指ぐらいになりました。

（まあ、この犬、私とセックスしたがっているのかしら？）

こんな小さなペニスでも、私の中に入ったらどうなるかしら……。私はペニスの大小でなく興味を覚えてきました。

（交わってみようかしら……）

そんな気持の私は、そーッと自分の花芽を撫でてみると、欲情していることがわかりました。

大きくなってる……。おえてる……。チンの小さなペニスですけど、筋だけは一人前で瘤も固くなっています。

（入れよう……。チンの瘤は小さいから抜けなくなることもないでしょうに……）

そう自分で決めると、私はチンを両足の間へ引き寄せました。

「気持がいいわよ、私の中……」

私はチンを押さえつけたまま腰を浮かせました。でも、あまり小さいので感じません。それに、どうしたのでしょうか、ちよっと油

断して手を離すと、チンは逃げようとするのです。

「どうしたの？ 恐いの？ 人間の女と交わるのが……」

そのうちチンのペニスは毛むくじやらの中へもぐってしまい、見えなくなってしまいました。

（チンも人間の女の私と交わるのを嫌うようだわ、やっぱり犬は犬同志のほうがいいのかしら……）

そう思えてきたのでした。

＊

私、チンと遊んでいるうちに大発見したのです。自慰のとき、チンに入口を舐めさせながら花芽の摩擦をしていると、とっても気持ちよく気がいけることを発見したのです。

私は、夫が出張の折は就寝の前に自慰をして、その疲れを利用して眠りにつく習慣になっていました。

チンはエッチで、私の愛液が大好きなんです。昼間でも、私のスカートの中へ首を突っこみ、クフン、クフンと愛液を求めているのですから。

「エッチねエ、あなたったら！ そんなに私のおつゆが欲しいの？」

昼間なので、玄関に鍵をかけて、ショーツを脱ぎ、チンに舐めさせてあげます。脱いだショーツの一番細い部分をさわってみると、湿っていました。鼻先へ持ってくると、プーンと女の匂いが鼻を刺します。その間にも、チンは私の股の間へ鼻をこすりつけながら舐めているのでした。

「そんなに美味しいの？ 私のおつゆ……」
あんまり舐め続けたので、愛液がなくなっていました。

「ちよっと待って……、いま、もっとたくさんあげますからね」

私は花芽を摩擦したり、いじったりして、愛液を出そうとしたのですが、それがそのままオナニーになってしまうのでした。私の花芽は、夫にいわせると、普通より少し小さいのだそうですが、摩擦すると、すぐに快美感が湧いてくるほど敏感なのです。

「ああ、いい気持よ、あなた。もっと舐めてください」

メス犬の私にとって、チンは旦那さまですから、あなたと呼んでいるのです。

突然、私は危く絶頂に達してしまいそうになりました。チンへのサービスのつもりで、自分の花芽を愛撫しているうちに気がいってしまいそうになったのです。

私はあわてて指の動きを止めました。でも花芽からは指を離しませんでした。離してしまうと、せっかくの快美感が消えてしまうように思えたからです。

絶頂感から危く気をそらすことのできた私は、思わず、

「危なかったわ……」

と、ホッと溜息をつきました。

「危いわ、もうやめるわよ」

チンにそういいきかせた矢先でした。それまで登りつめそうになっては何度もストップをかけられていた絶頂感が、突然やってきてしまったのです。

「ああッ！」

悲鳴をあげて花芽から指を離しましたが、すでに遅く、その時はオルガスムスに突入してしまい、戻ることはとてもできませんでした。

もうそこまで来てしまったら、途中で止めるのは、かえって不快感が残ってしまうと思います、再び花芽に指先を当てがって力を込め、上下に滑らせながら一気に登りつめたのです。それも、もうこれ以上は広げられないと思えるほど両足を開き、摩擦を続けながら登りつめたのです。

終わったあとは、ポツカリと穴があいたよう

に空虚になります。でも、夫がいない時にはチンが慰めてくれるのを知ったのは一つの発見だと思うのです。

＊

私は、ネグリジェどころかパジャマ一枚すら持っていない。結婚以来、ベッドでは全裸で、と教えこまれた私は今でも全裸でないと気持が悪いのです。

それにしても、チンの舐陰好きにはほんとに呆れてしまいます。私がオナニーで気をやり、そのまま眠ってしまったって、まだ舐め続けてるんです。

「あなたって、ほんとにエッチねエ……、いつまで舐めているの」

そういつてチンをたしなめる私ですが、そのうちまた欲情してしまうので困ってしまいます。こんな気持ではとても眠りにつくことができません。

「あなたが悪いのよ。せっかく眠ろうとしているのにいつまでも舐めているから……」

仕方なく、私はまたオナニーをして、チンに愛液をあげなくてはなりませんでした。

翌朝、目を覚ましてびっくりしました。チンはまだ舐め続けているのです。

「もうッ……、一体どうなってるの！」

とうとう私はその日、3回もオナニーをし
てしまったのです。

そんな私の家にまた一つ出来事が起こりま
した。汚い野良犬を、夫がどこから連れて
きたのです。

「わぁ、汚い犬ね……」

「野良犬だけど、瘤がカンカンなので、お前
とつがえないかと思ってな」

夫の説明ですと、その野良犬は長いことセ
ックスしていないらしく、瘤がカンカンに固
くなっているの私とつがうかも知れないか
ら連れてきた、というのです。

「イヤよ、こんなに汚い犬となんか……」

いくら夫のためといっても、私はこんなに
汚い野良犬と交わるなんて嫌です。

「可哀想ではないか、こんなに瘤をカンカン
にさせているのに……」

「無理をいわないで。それに、どんな病気を
持ってるか知らないし……」

私がどこまでも拒みましたので、夫はあき
らめてくれると思ったのに、

「仕方がない。それじゃ、お前、この犬にセ
ンズリをかいてやれ。犬はひとりでオナニー
できないからな」

というのです。

仕方がないけど、交わるよりはずっとまし

ですので、夫に教えてもらいながらしごいて
やると、射精してスーッとしたのでしよう、
嬉しそうな顔をしてどこかへ飛んで行ってし
まいました。

あの時の野良犬は、夫がいうように確かに
長い間、セックスしていなかったのか、瘤は
カンカンで、私がしごいてやるとすぐに射精
してしまったのです。私が右手でカンカンの
瘤を握ってしごいてやると、気持ちよくなって
きたのか肉棒がだんだん飛びだしてきます。

「どうだ、カンカンだろ？」

「……」

「この犬なら完全にお前とつがえるんだがな
ア……」

夫は、私と野良犬との獣姦にまだ未練を持
っていました、私は絶対に駄目です。

「オッ、こいつ、腰を使ってる。それに眼を
細めてるじゃないか。つがわせてやればよか
ったのに」

サドっけのある夫は今までに何度も射精し
たものを私の顔へかけて汚しては喜んでい
るのですが、それに甘んじている私。

「よし、今度は犬の精液でお前の顔をベタ
ベタに汚してやる、嬉しいだろ？」

「そんなッ……」

犬の精液で私の顔をベタベタに汚すなんて

ひどいと思います。でも、夫には抗えないよ
うな私なのです。野良犬の時はなんとか拒ん
だものの、夫の性格からいって、いつかは実
行に移されるような気がしてなりません。

夫の獣姦願望はあきらめるところか、ます
ます募る一方で、コリー犬、チン、野良犬と
失敗すればするほど熱心になっていくのでし
た。

そして、とうとう、今度は大きなセパード
犬を買ってきたのです。これで、私の家には
犬が三匹、ウジャウジャいるといった感じに
なっていました。

「どうだ、悦子。これだけ大型の犬ならお前
とつがえるだろう？」

このセパード犬は大きくて、立ち上ると人
間の背ぐらいもあり、ずいぶん大きい犬なの
です。

「こいつ、どんなペニスを持ってるかな」
早くも獣姦を期待している夫は、犬のペニ
スをしごきにかかりました。

「オイ！見ろ。この犬のペニス大きいぞ、そ
れに瘤も大きいぞオ」

夫はとても嬉しそうでした。私も見ました
が、確かに夫のいう通り体格が大きいだけに
ペニスも立派です。

(つづく)

百恵の太腿

そろそろトウが立ってきたタレント歌手が失地回復のため芸能プロデューサーに肉体を投げ出す。しかししたたかな仕事師は先頃人気絶頂時に結婚引退した山内百恵を復帰させる為の淫靡な計画に往年のアイドル歌手を利用しようとする。

笛吹童子

頂上のあと

すでに一度頂上を極めた女体は、燃え上るのにそれほど時間はかからなかった。豊富な潤いの花園は、滑らかに巨大な責め具を受け入れながらも、官能の昂りに従って、押し、引く度に強固な女体の層を癒着させてくる。

「許してと云いながら、すごい締めつけ方じゃないか。え、百恵さんよ」

松方は揶揄するように云いながら、張型を握る手に力を込める。松方の言葉が聞こえるのか、百恵は、

「嫌っ、嫌っ」

と、すすり泣く声とともに息を弾ませて頭を振るが、それ以上に烈しく、百恵の腰は悩ましくうねり、豊饒たる下肢が張型に合わせて揺れるさまは圧巻だった。

百恵の「嫌、嫌」と云う声が、甘美な啼泣に呑み込まれ、さらにしゃくり上げるような嗚咽に変わったのは、それから間もなくだった。が、夫と違い男は陰湿で、それ以上に執拗だった。張型のピッチを上げ、百恵を頂上近くまで押し上げるだけ押し上げると、不意に動きを止めたのだ。

「嫌っ……意地悪しないで」

とたんに泣き出しそうな声で叫んで、百恵はあられもなく官能美豊かな腰をくねらせた。「結婚して一年半だって云うのに、恥ずかしいと思わないのかい。そんなに腰を使っちゃ智和に悪いぜ」

「云わないで……もう我慢できないの」
と百恵は半狂乱に頭を振って、太腿の付根に喰い込んだ張型をグイグイと、もどかしげに締め上げていく。

「それなら、あんたの口からこう云うんだ。私は智和とのセックスだけでは満足できません。どうか張型で私に××××して下さい、とな」

「そんなこと……」

「云えないって云うのかい、これでも」

と、松方は指先で、張型を咥え込んだ花園の上端を、慎ましい叢の上から揉むように愛撫した。

「あっ、い、……云いますっ」

骨まで染み渡るような快美感に、百恵はガクツと頭をのけ反らせて叫んだ。

「わ、私は智和だけでは満足できません。どうかこの張型で百恵に××××して下さい」
熱にうなされるような調子で、百恵は恥辱的な言葉を云われるままに吐いた。頭のどこかで、それを恥じる気持ちがあるのだが、実

際口に出して云ってしまうと、呪縛から解き放たれたように、妖しい背徳的な悦びが背すじを駆け上った。

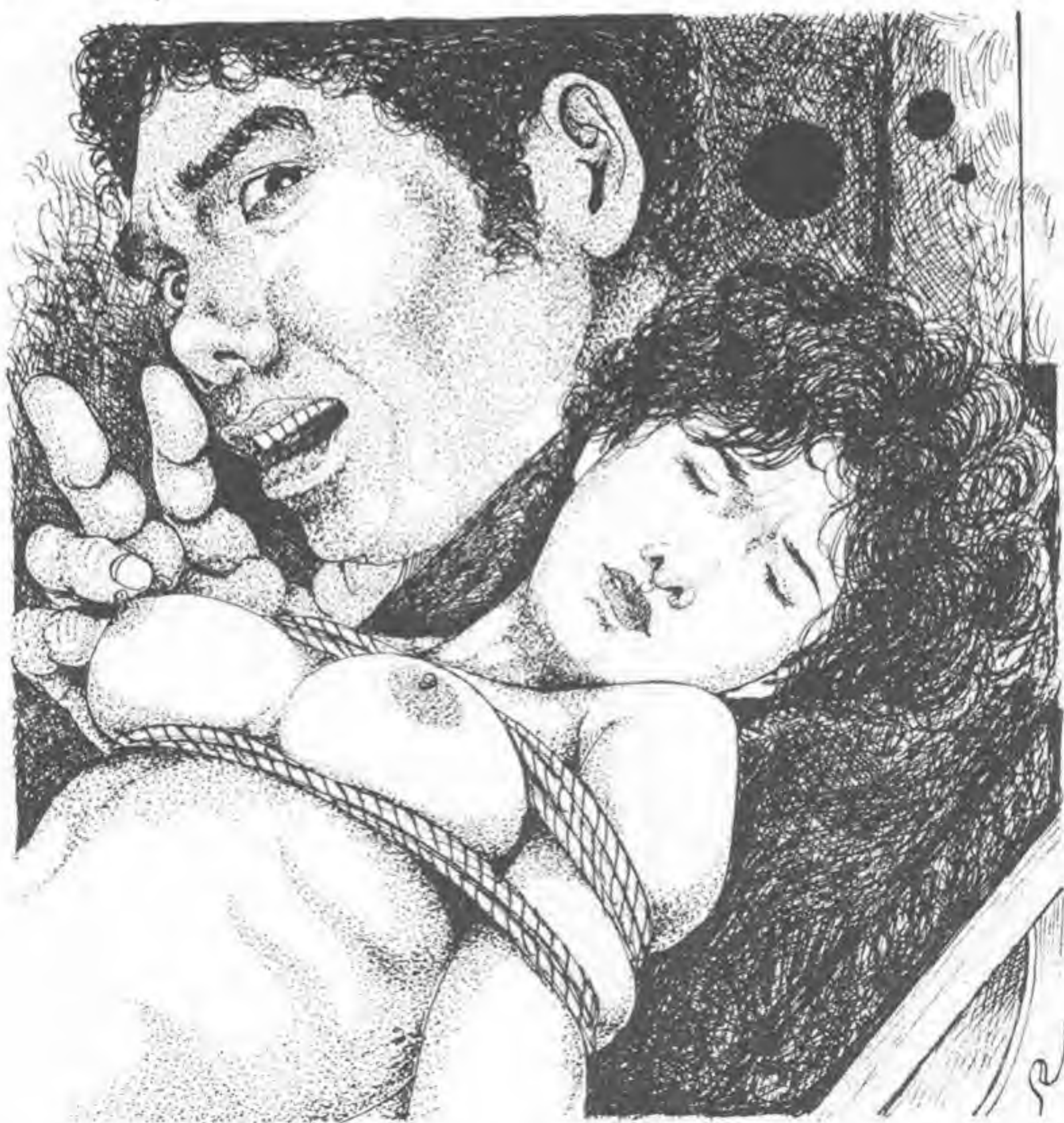
張型の抽送が再開されるなり、百恵の口からは辺りを憚らぬ露わな声が洩れ、その声は吐く息とともに甘美な響きとなって高まり、まるで獣の鳴き声を思わせた。しかも、それでいて情感たっぷりに、見ている方の男をそそのかすような響きがあるのだ。

ショート・カットの髪を振り乱す百恵は、緊縛された若々しい肢体を汗でネットリとぬめぬめ光らせながら、尖った鼻梁を脹らませ、全身をブルブルと打ち震わせる。やがて身も心も溶け合うような法悦の波が押し寄せてくると、甘ったるい嗚咽を一瞬咆哮にまで高め「行くっ」と叫んで、そのまま得も云われぬ恍惚の頂上へ昇りつめた。

揉みしだかれて

ガクガクッと頭を垂れた百恵は、しかし、それでも張型だけは離さず、陶然としたままエクスタシイの余波を味わうように、ピクツ、ピクツと太腿の付根を痙攣させて、張型を締めつけている。

その間に松方は、ビデオ・カメラをいったん停止させ、次の責めの準備を整えた。



「さ、こっちのベッドで少し休むといい」

松方は急に優しい口調になって、まだ濠臙としてゐる百恵の縛めを解いてやり、革を張った産婦人科で使う診察台の上に寝かせた。

両脚を開いて、左右の台に載せベルトできっちり固定する。松方ははコールドクリームを指にすくい、自分のそれよりはさらに二回りほど太いと思われる、二本の太腿の間へ顔を近づけた。

叢の下の花園は、薄らと口を開けて、先ほどの狂態の名残りとどめ、きらきらと淡紅色の花弁をのぞかせている。松方が指を触れさせたのは、その下の方だった。

濠臙とした意識からハッと覚め止んで、百恵は眼を見開いた。たとえ恥態を晒したあとと云えども、若い美しい女が夫にすら触らせたことのない排泄器官を弄ばれる恥ずかしさは、たまらなかった。

「何をするんです、ソ、ソコは……あっ、嫌っ」

百恵は診察台の上で、両手を後ろ手に縛られたまま、ブルブルと体を悪感に震わせた。

「智和はアヌスまで愛しちゃくれないようだな。そんなことじゃ、天下の山内百恵の亭主はじきに務まらなくなるぜ。アイツによく云っておくんだな」

アヌスを揉みほぐすように、クリームを塗った松方は、

「女を自分だけのものとして手なづけるには、こいつをやるのが一番だ。どうやら山内百恵のアヌスは特別敏感、そうだからな」

いつの間にか、ふつくと花が開くように柔かく脹らんだ菊花を見ながら云い浣腸に溶いたグリセリン液の浣腸器を持ち上げた。

それを見るなり百恵の面が強張った。

「まさかそんな……嫌です。お願い、やめて」

「おや、知ってるのか。それなら手っとり早い。経験を積むうちに、よくなっていくんだ。そして、味を覚えたら麻薬みたいに、こいつなしじゃ夜も日も明けなくなるんだよ」

そう云うと、構わず先端を菊花の中心に差し入れた。

「あっ——」

それまで烈しく身をもがかせていた百恵の体が、喉もとまで串刺しにされたように動きを止めた。

「あんまり堅くなりなさんな。これだけ立派な下半身をしてるんだ、こいつの味がわからないはずがない」

云いながら、松方は注入の手応えを楽しむようにゆっくりとノズルを押し始めた。足掛けの上に載った二十三・五センチの足が、キ

ュッと皺を刻んで折れ曲った。

五十CCを入れたところで、松方はいったん浣腸器を引き抜き、指の腹で可憐なまでの菊花を揉みしだいた。

「どうだい、感じは悪くないだろう」

指を離して、仰けの顔をのぞき込むと、不意に憂いの深い眼を見開くなり、

「変態っ！ 私の体にこれ以上触らないで」

と、相手を睨みつけるなり、吐き捨てるように云った。松方は、しかし、腹を立てず、むしろ口もとに冷笑すら浮べていた。それが追い込まれた百恵の、最後の抵抗と見抜いていたからだった。

「さっきも云ったろう。俺はフェミニストなんだ。女を悦ばせて途中で投げ出すようなことはしない。今度はさっきよりも、素晴らしい思いをさせてやるよ」

浣腸器を手にとると、さらに五十CCゆっくりと注入していく。切長の美しい眼は、とたんに閉じられ、眉合いに苦悩の表情を浮かべる。悔しいが相手の云う通り、薬液の注入される感覚は、おぞましいどころか何とも云えず妖しいやるせない甘さがあった。それを悟られまいと、百恵は精一杯の苦しみの色を滲ませるのだ。

三度目は、一気に百CCの薬を注ぎ込んで、

松方はようやく浣腸器を洗面器の中へ戻した。
「さあて、終ったぞ。あとは自然の摂理に従って待つだけだ」

松方は、百恵を見下ろしながら、煙草を啞えマツチで火をつけた。

ちやうどそのとき、壁に備えつけた電話のランプが点滅した。階上の店の電話を切り換えておけば、外からの通話を直接受けることができる仕掛けになっているが、どうやら今日は店が休みなので切り換えるのを忘れていたらしい。が、わざわざ上まで行くのは面倒だ。松方は無視することにした。

「さっき変態とか云ってたな。だが、もう何分かすれば、お前さんはその変態の俺の前で、それこそみっともない姿を晒すことになるんだ。今から覚悟しておくんだな」

百恵は相手を見下ろしたように、唇を噛んで顔をそむけているが、その面には早くもじっとり脂汗が滲み出している。

電話は執拗に点滅をくり返した。出るまでは絶対に切るまいという、掛け手の意志が何となく伝わってくる。松方は舌打ちして、「ちよっと電話に出てくる。だけど話が長びいても、天下の山内百恵がお洩らしなんてしないであれよ」

そう云って、部屋の隅の階段を昇って行っ

診察台の百恵

電話は酒田からだった。

「どうだね。うまく行ってるかね」

「ええ、まあ」

受話器に向って答えながら、松方は口もとに苦笑を浮べた。

初めに今度の奸計を企てた酒田が、今日この場にいらないのは、万一誘拐が失敗した場合を考えてのことである。彼が百恵の前に姿を現すのは、だから、完全な弱みを握ってからで、松方もそのことは承知している。それなのに、こうして電話をよこすのは、こちらの様子がよほど気になり、止むに止まれず受話器を取ったのだろう。

（なら、こざかしいことは考えずに、最初から俺に手を貸せばよかったんだ）

と思ったが、それは口には出さず、「心配はいりませんよ。万事計画通りいきますからね。彼女、自分が何故こんな目に会わなきゃならないのかって、だいぶまいってみたいですよ」

「まさか、あの子が泣いたのか」

「いえ、さすがに気は強くて涙は見せません

がね。でも、もうじき見られるんじゃないですか。今、丁度浣腸してやってる最中でしてね」

「うん、そうか——」

唸るような声で、酒田はそのあとの言葉を呑み込んだ。恐らく、早くこの眼で見てみたものだ、とでも云いたかったのだろう。相手の心中を察して、松方は、

「そのときの様子は、ちゃんとビデオに撮っておきますからね。明日にでもそちらにお届けしますよ」

「うん、そうか。頼むよ。何しろ、この計画がうまく行くかどうかは、第一段階の君の手腕にかかっていると云ってもいいすぎじゃない」

「その点なら安心して下さい。私は一度縛った女は、必ずものにする主義ですからね。私の罠にかかったら、本物のマゾになるまで抜け出せやしません」

と、松方は自借たっぷり云って、受話器を掛けた。

実を云えば、自信などそれほどない。と云うより、こういうことは相手の素質の問題だ、と松方は思っている。つまりそのけのないものを、いくら責めても徒労に終るだけだろう。ただ、そういった資質のある女を責め上げ、



本物のマゾに調教する腕には、少なからず自信があった。

では、山内百恵にマゾの素質はあるのだろうか。どこか冷めた情感と憂いを湛えた眸の百恵。現役だった頃も、ここに連れてこられてからも涙を見せぬ気丈な百恵。

(それはもうすぐわかることだ)

診察台の上の百恵は、すでに冴えた面をじつとりと脂汗で光らせ、美しい眉根に皺を刻みながら迫りくる排泄感と闘っていた。

「お願いです。な、縄を解いて下さい」

松方が階段を降りてくるのを見て、百恵はせっぱ詰まった声を上げた。

「縄を解いてどうするって云うんです」

わざと松方は、とぼけたように訊ねた。

「お、おトイレに行きたいんです」

「ほう……で、どっちがしたいんです？」

「大きい方——」

「それじゃよくわからない。ハッキリ云ってくれないとね」

男はどこまでも意地が悪かった。百恵は若妻らしい慎しみから、さすがに躊躇った。

「どうしたんです。まさか我慢しきれると思ってるんじゃないでしょうね。それともそのままの恰好でやってしまうつもりですか」

と、松方はからかうように、百恵の面を覗

き込んで云う。が、彼も内心は、見掛けの平生さとは逆に、熱い嗜虐感の昂りに四肢が震えるのを懸命にこらえていた。

「お願い、意地悪しないで」

と、声を震わせて哀願する百恵——その鋭い刃物のように研ぎすまされた、それでいて内側から滲み出す情感を湛えた面の、病的なまでの美しさはどうだろう。尖った鼻梁は脹らみ、厚い唇はわななき、一段と豊かに、丸く張り出した腹は、汗に濡れ光りながら、腸の痛みと便意をじつと耐え忍んでいるのだ。が、それも長くは続かなかった。不意に全身を強張らせた百恵は、

「縄を解いて下さい。い、云いますから、早く——」

と、引き溜った声を上げ、しほり出すように云った。

「ウ、ウンチ……ウンチがしたいの」

松方は、思わず痛快な笑みを頬に浮べながら、台にのった両脚のベルトを外してやり、部屋の隅へ行くと、白いおまるを用意して、それをビデオカメラの前に置いた。

「さ、出しちまえば、すっとするぜ」

そう云って松方に診察台から下ろされた百恵は、床の上のおまるを見て、表情を強張らせた。

「あ、あの、お、おトイレは——」

「そこにあるじゃないか。眼が悪くなったのかい」

「そ、そんな……お願いです、ちゃんとしたおトイレを使わせて下さい」

後ろ手に縛られたまま、百恵は前かがみの肢体を揺するようにして哀願する。が、ビデオカメラを構えた松方は、薄笑いを滲ませ、
「ここには残念ながら、そんな上等なもんはないのさ。嫌なら、そのままにいるんだな」
蒼白になった優美な面には、すでにしたたりそうに脂汗が滲んでいる。もう哀訴したり、云い争ったりする余裕はない。

「ああ……ひどい、ひどすぎます、こんな」
そう云って頭を振りながらも、百恵は軀を苦しそうに折って、おまるに歩みより、腰を下ろした。太腿は一段と太くせり出し、その狭間から漆黒の柔らかい翳りをのぞかせている。

松方は、ビデオカメラをロー・アングルから近づけ、

「ほら、遠慮せずに出すんだ。溜ってるんだろう？この軀だ、浣腸の味がわからないはずがない」

カメラから逃れようと、百恵は頭を右に左に揺する。歯はカチカチと鳴って、その間が

ら呻くような声が吐息とともに洩れる。すでに腸の痛みもわからぬほど、百恵の全身の神経は痺れ、その成熟した肢体は、毛穴から滲む汗でぬめ光っていた。

と、不意に百恵の軀がブルブルと震え、烈しく頭が振られた。

「お願い、み、見ないで……もう我慢できない……も、洩れちゃう……」

云い終らぬうちに、熱い流動体がおまるの底にポタポタと落ち、それはたちまちとぐろを巻く蛇のように小山を築いていく。

愛する智和と結婚して一年半、幸福の絶頂にいる百恵を、自分が今粉々に打ち砕いているのだ！

（さあ、もっと出せ、残らず出してしまえ！そして地獄の中でのうち回れ！）

松方は全身が痺れるような悦びに浸りながら、胸の中で叫び続けた。

それに応えるかのように、百恵は切長の脛を陶然と閉じたまま、まろやかに熟れた、豊饒たる臀から、次々と艶のよい褐色の黄金をひねり出していく。

と、蒼白だった面に縞みが差し、せつなげな眉の下の眼尻には、真珠のように光る雫が滲んでいた。

百恵の、これほど崇高で美しい姿を、誰が

今まで見たことがあるだろう。もちろん、被写体としての百恵が、類い稀れな女であることは、現役の頃のいくつかの写真で証明済みだが、今眼の前でスタアとしてのブライドや一人の女としての羞恥と慎しみ、さらに人間としての人格すら奪い取られ、屈辱の極みを味わったあとの百恵は、途方もない優しさと、可憐さと美しさを湛えていた。

しばし、その豊麗で神々しいまでの姿に見入っていた松方は、ようやく我に返ると、「もういいのか、残ってるなら遠慮せずに全部出すんだ。その方がすっきりするからね」と、優しい口調で云った。

その言葉も聞こえないのか、百恵は眉を寄せながらも、わずかに喜色を面に滲ませ、放心したようにポツテリした唇の間から、深い溜め息を洩らしている。

「それにしても、ずい分と出したもんだなあ。百恵ちゃん、いつもこんなにくさん出すのかい。こいつは、是非記念に取っておきたいもんだ」

おまるの中に、山となって折り重なった黄金を見て、松方は冗談とも思えぬ顔つきで云った。

「どれ、お臀は私が洗ってやろう」

おまるをどけて、代りにぬるま湯を張った

洗面器を用意すると、それを百恵の踵の間に置き、指でコチョココチョと臀の挟間を洗い始めた。

「あ……もう許して下さい、お願い」

ようやく自分を取り戻したらしく、百恵は弱々しく頭を振ったが、その拒絶は先ほどまでのように烈しくない。眼もとに滲み出した涙も、苦痛や恥辱感のせいとは云いきれなかった。信じられないことだが、排泄の際、百恵の軀を襲ったのは、解放感の他に何か妖しいまでの痺れも混っていたのである。

それだけに、百恵の受けたショックは二重だった。

鼻をすすりながら、百恵は口を開いた。

「もう充分でしょう……お願い、早く帰して下さい」

「そうはいきません。満足したのは百恵夫人だけだ。帰るのは私を満足させてからです」

松方は背後から百恵の肩を抱くと、ショート・カットの髪から覗く、雪白のゾクツとするような色気を湛えたうなじに唇を押し当てた。そして、後ろ手の縛めを解いてやりながら、

「記念に、一つ、そのおまるにサインして下さいよ」

と云って、ポケットからマジックインキを

差し出した。百恵が受取るのを躊躇っている
と、

「何ならもう一度浣腸してあげてもいいんで
すよ」

百恵は観念したように翳りの深い眸を伏せ
て、マジックインキを手にした。

口唇の奉仕

松方は百恵を両腕に抱き上げて、部屋の隅
に置かれたソファの上に寝かせた。

「残念ながら回転式のダブルベッドと云うわ
けにはいかないが」

先ほど使った張型と縄を持ち、手を後ろに
まわすように命じた。

「何も縛らなくたって、逃げたりしませんわ。
抱くなら普通にしてください」

「だが、こいつを使った方が気分が出るんで
ね」

そう云って、背中を重ねた華奢な両腕に縄
を巻きつけていく。百恵の軀は、豊饒たる大
地を思わせる下半身に比べ、上肢は細くしな
やかである。それでも肩から二の腕、胸もと
から乳房の肉付きは、若妻らしく柔かく熟れ
ている。

松方は両腕を縛って余った縄尻を、丸々と

張り切った乳房の上下にもギリギリと喰い込
ませた。

松方には、女を色々な器具で責め、鞭り、
辱めることと同じぐらい、女の軀を男女のノ
ーマルな交わりで味わってみたいという欲望
がある。

酒田は百恵を抱くなども抱いていいとも云
わなかった。ただ、他人や夫の新浦にも絶対
見せられない姿を、ビデオに収めてくれと云
っただけである。それはすでに、パイプ責め、
浣腸による排泄シーンで充分に違いない。だ
だから、こうして百恵を抱くのは、余禄と云
ってもいい。

松方は百恵を椅子に座る恰好でソファに座
らせ、自分も身をすりよせるようにして腰を
下ろした。肩を抱いて唇を近づけると、百恵
はわずかに避けるように顔をそむけたが、そ
の肉ののった唇は、すぐにふさがれた。

唇の間で、上唇と下唇を順番に挟んでから、
松方は舌をすべり込ませた。ネットリとした
唇の内側は、とろけるほどの生温かさを湛え、
松方の手が縄に挟まれ、一段とまるやかにせ
り出した乳房を揉みしだくと、躊躇いながら
熱い舌を絡めてきた。

百恵の胸もとの呼吸が乱れたのは、松方の
手の中の乳がグッと張り出し、指の間の果実

がブクッと勃起してからだった。松方は軀を
ずらして、よろこびに尖った乳房の先を口に
含んで吸った。そうされると感じるらしく、
百恵は洩れそうになる声を噛み殺すように眉
合いに皺を寄せ、上体をのけ反らせる。

松方は愛撫の手を下半身へのばした。逞し
いほど太い太腿は、さすがに閉じられてい、
松方の指は綺麗な形に、盛んに生い茂った叢
を撫でながら、

「脚を開かなくちゃ、百恵のアソコにさわれ
ないじゃないか」

わざと露骨な表現で云って、遠い方の脚を、
踵がソファに掛かるように持ち上げて開いた。

「嫌——」

頭を揺すって駄々をこねるような声音を出
すが、脚はそのままだった。心では姦通を拒
んでいるのに、官能味豊かな肉体は松方の愛
撫によって嫌が上にも悦びのうねりに溶けて
しまう——そんな若妻としての百恵の、内心
の苦悩を、松方は顔の表情と下腹の花園に読
み取っていた。

早くも淡いピンク色に上気した面は、追い
つめられながら懸命に法悦から逃れようと歪
んではいるが、美しい眉の端やわななく唇の
端には、はっきりと喜びが滲み、太腿の付根
で息づく花園は、差入れた指を熱い潤いで迎

えてくれた。

松方は五本の指を使って、巧みに薔薇の花弁を愛撫した。まず、人さし指と薬指で花園を押し開き、左右対照のやや腫れぼったい小花唇を中指でさすってやる。それだけで、感受性豊かな百恵の軀は、腹部をピクンと弾ませ、熱い蜜をジクジクと滲ませた。

さらに、クレパスの上端の、寄り合う左右の花弁の挟間から、人さし指と親指でピンクの宝珠を摘み出した。松方が見てきた中でも、百恵の宝珠は粒が大きく、瑞々しい色つやがいかに敏感そうに思われる。

人さし指と薬指で開いた花園の奥を中指で探りながら、松方はさらに小指で先ほど排泄に打ち震えたばかりのアヌスを揉み、親指でプックリ充血して顔を出す濡れた宝珠を転がしてやった。

あっ——ガクンと、露わな声を洩らして頭を反らす百恵。松方が頭を支えるようにして唇を押しつけていくと、待ち受けていたように唇を重ねてくる。お互いの情感の高まるま、ま二人は唇と唇の間で濡れ光る舌をネチネチと絡みつかせ、吸い合った。

きらきらと艶っぽく濡れた眸を覗き込みながら、松方はテーブルの上の張型を取って、それを百恵の口もとに突きつけた。

「舐めるんだ。こいつがあんたの軀の中に入って、楽しませてくれるんだからな」

百恵はしかし、張型からすぐに眼を離すと松方を盗れんばかりの情感に満ちた眼差しで見やり、

「お願い、それじゃ嫌……ちゃんと抱いて欲しいの」

「ほう……だけど、こいつならまだ貞操は守られたことになるんだぜ」

「いいえ、いいの、お願い……早く抱いて」

どうしようもない官能の火照りに、若々しい肢体を身悶えさせて哀願する。

「それなら、百恵夫人の口でまず楽しませて貰おうか」

そう云って、百恵をソファから下ろし、床に跪かせると、自分は座ったまま腰を浮して、ズボンを脱いだ。下腹に現われたそれはまだ充分な昂揚を示していない。

百恵は太い両脚をピッタリと付け合わせ、正座したまま、顔を松方の股間へうずめた。

両腕は縛められているが、百恵は器用に相手の幹を頬ばり、先端へ柔かく舌を絡みつかせた。その微妙な肌ざわりに、たちまち松方のそれは、生命を吹き込まれたように、頭をもたげ始めた。

角度がついたと見ると、百恵はいったん口

から出して、幹の側面をハーモニカを吹くように唇を動かし、さらにその下の袋まで舌を這わせた。そして、ウズラの玉子のような固まりを、片方ずつ口に含んで優しく吸ってやった。

「驚いたな、そこいらのトルコ嬢より、よっぽど上手いじゃないか」

胸に込み上げる切ないまでの情感を、他へ逸らすように、松方は幹を頬ばる百恵を見下ろした。

「智和にも毎晩こうしてやってるんだらう？ この分じゃ、だいぶ仕込まれたようだな」

そんな揶揄の言葉も耳に入らないらしく、百恵は前かがみになって幹を咥えると、色づいた面を上体と一緒に上下に揺すり始めた。なめらかな動きに加えて、舌は先端の裏側をチロチロとくすぐり、小鼻を脹らませながら頬をすぼめて吸い上げる。

「もういいだろう」

あまりの心地良さに、あやうく洩れそうになるのを堪えて、松方は髪を把み、百恵の顔を引き離した。

松方はソファに座ったまま、百恵を背後から貫いた。ちょうど下腹に百恵の、嫌になるくらい豊満な臀がのり、眼の前にはきっちり縛られた腕と男心をそそる背がうなじへと

と続いている。

両側から回した手で、二つの乳の感触を楽しみながら、松方は唇をうなじにピタッと押しつけ、キスマークがつくほど吸った。こう

して抱きしめると、百恵という女の豊かさ、可憐さ、気高さと優しさが伝わり、愛しさを覚えずにはいられない。

松方は、左右の足首を百恵の肘の辺りに掛

けて、逞しい両肢を大きく開いた。「ほら、こうすれば繋がってるところが、カメラにバッチリだ」

正面にセットしたカメラの方を指さして、



耳もとでささやいた。

「嫌っ……こんな恰好——」

喘ぐように云って、百恵は軀を揺する。が、翳りの下の太腿の付根は、松方を深々と啜え込んでいるのだ。

「智和はこんな風には愛しちやくれないのかい、えっ」

云いながら、松方は両手をくびれた腰に当てがい、下から揺さぶりをかけた。一回、二回と突き上げる度に、百恵は露わな声を上げてうなじを反らす。

ラーゲも若妻の百恵には初めてなら、四肢のすみずみにまで滲み渡る快美感の妖しい戦慄も初めてだった。今、自分の姦通シーンをビデオに撮られているのだ、と思うと、羞恥とともに、もっと見せてやりたい、もっと恥ずかしい真似をしてみたいという倒錯した欲望が、軀の奥から吹き上げてくるのだった。

松方がさらに二度三度と抽送を行うと、百恵の腰は自ら上下に動き始めた。

松方は手の中の張り切った乳房の先を、人さし指と親指の間で弄びながら、一方の手を下腹へ這わせ、逆三角の叢の上から、女の最も敏感の宝石をやわらかく揉んでやった。

とたんに、百恵の軀の動きが烈しくなり、断続的だった喘ぎ声は、しだいに情感溢れる

甘美な啼泣に変わり始めた。

松方もまた、自分がいつも以上に気持ちがいっぱいになっているのを感じ、思わぬ失敗をしでかさないようにと慎重に抽送を続けた。百恵の味は悪くなかった。松方が突き、引く度に、熱い潤いに満ちた女体の層が、したたかに幹の先に癒着してくる。そのキュッと締めつける力といい、豊かな肉付きの柔かさといい、特上の代物と云って良かった。

エクスタシー

抽送のピッチを上げる。

ガクン——一瞬、息を引く声を張り上げた百恵は、とろけるような喜悦の頂上へ駆け上り尚も豊かな腰を三度四度と動かしながら、松方の方へ軀をあずけてきた。

が、松方は休まなかった。尚も腰を突き上げ、

「さ、床に膝をつけ」

云われるまま、両膝を床につき、上体を前のテーブルにのせる。その若妻らしいまろやかな臀を突き出した百恵を、松方は背後からあらためて獣のスタイルで犯した。しっかりと腰に手を当て、その白桃のように割れた挟間と、さらにそこから覗く、幹を啜えて捲れ

たピンクの襷の花園へ、松方は律動を送り込んだ。

続けざまに三度、百恵は文字通り獣に似た咆哮を発して、エクスタシーを極めた。

ぐったりとなった百恵の両腕の縛めを解くと、ソファの上に寝かせ、松方は依然昂ったままの軀で、翳りの下の濡れてピンクに光る縦長のクレヴアスに触れた。ピクピクとそれだけで、蜜にまみれた襷は悦びに打ち打ち震えた。位置を定めて押し入る。

躊躇うことなく、百恵は腕を相手の首に巻きつけてきた。その切長の眸は、しかし、エクスタシーの余韻とは別に、きらきらと熱いものに濡れながら、一段と愁いを帯びてみえた。

夫智和に対する愛情と哀惜の念。それをもろくも裏切り砕く己の肉体の恨めしさ——が、胸を引き裂かれながらも、百恵は甘美な瞬間を求めて、忌わしい男の首に腕を絡めずにはいられないのだ。

三度百恵を頂上へと追い込んだ松方は、そこで不意に抽送を中断すると、両手を百恵の顔の横につき、

「智和と俺とどっちがいい？」

「——」
「答えてくれよ」

松方は試しに、腰をグイと押しつけた。たちまち、百恵の口から喜びの声が洩れた。が、三度ばかり律動を送ると、松方はピタリと動きを止めた。

「嫌っ……意地悪しないでっ」

湧き起る快美のうねりに、百恵は思わず叫んで、肩に爪を立ててきた。心では羞らいながら、豊満な腰は上下に揺れて、食欲に悦びを味わいつくそうとしている。

「いつまで気取ってるんだ。こんなに締めつけてるくせに」

熱い潤いに打ち込んだ幹を、松方はさらに二度三度擲擲するように動かした。

「あっ、い……い——」

眉根をキッと寄せ、染み渡る法悦を味わう百恵。その間にも、ねばっこい薄膜が松方の幹を柔かく包み、先端を襲が両端から舐めるように愛撫してくる。

がまん比べになった。

初めに百恵が狂ったように頭を振り乱した。

「お願い、焦らさないでっ」

「なら答えるんだ。智和か、それとも俺がいか」

百恵は無言のまま頷いてみせた。

「それじゃわからん。ハッキリ云ってみろ」

松方が、片手で百恵の顎を持って正面を向

かせると、百恵は訴えるような眼差しで彼を見、

「あ、貴方の方が、ずっと——」

素敵よと云って、自ら上体を起して、震えながら唇を重ねてきた。上下の唇を交互に重ねると、奔流のように溢れ出る情感に煽られ、松方は残った頂上への道のりを、烈しい抽送とともに昇りつめた。

欲望を迸らせる松方を、ともにエクスタシイを極めながら百恵は、包み込むようにしっかりと受け止め、奥へ奥へ引き込んで、さらに深い甘美な痙攣を与えた。

松方が離れようとする、百恵は肩を抱いて引き止め、彼もそれに逆らわず、去り行く喜悅の余韻を味わうようにふくよかな唇を吸い、左の二の腕の付根に残った、二つの大きな種痘の跡にも唇を押し当てた。

百恵がマンションに帰ったのは、午後八時過ぎだった。

服はナイフでズタズタに引き裂かれていたので、百恵は裸の上に松方のコートを羽織っただけの恰好で車に乗せられた。眼隠しをされ、車は用心深くグルグルと街中を走り回ってからマンションへ着いた。例の地下室がどこにあるのか、皆目わからなかった。

「近いうちに連絡しますよ。もし、今日のビ

デオを返して欲しいなら、今日あったことは内緒にしておくんだな」

部屋まで着いてきた松方は、最後は脅し文句を並べて、百恵からコートを受け取ると、先ほど自分の腕の中で切ない身悶えを示した豊満な肢体を一瞥し、出て行った。

ドアが閉まると、ホッとする気持ちと同時に、胸の中で烈しく込み上げてくるものがあった。

すぐにバスルームへ行き、シャワーを浴びながら、百恵は今日一日の出来事をふり返ってみた。

それは何故か悪夢のようであり、遠い過去の記憶のようでもある。今朝までの優雅で満ち足りた新婚生活が奪われたとは、どうしても信じられなかった。

が、しゃがみ込んでシャワーのノズルを当たった体の奥から、どろりとした白い液体が流れ出したとき、自分の身に起った忌むべき事件が、はっきりと実感できた。

智和から電話があったのは、バスルームを出てから、空腹を覚えて台所に立ったときだった。

「さっきまで打ち合わせがあつてね。今やっ」とホテルの部屋に着いたところなんだ」

智和は新しい映画のロケのために今朝方京



都へ立ったのだった。

「どうだい、何か変わったことはなかった？」

百恵は一瞬息を呑んだ。智和の言葉は、一家の主人が旅先から電話をかけたときの、きまり文句なのに、百恵は胸の内を見抜かれたような気持ちになったのだ。

「いえ、何も——」

そう答えて、自分が初めから今日の出来事を夫に隠す決心でいたことに、そのときになって気づいた。恐らくその決心は、松方のバィヴ責めの前に、若妻としての慎しみを忘れ、醜態を演じたときから定まっていたように思われる。

「何だか元気ないみたいだね」

「そうかしら。そんなことないと思うけど」

あわてて明るいい声を出してみた。

「もう恋しくなった？」

「ふふふ」

こうして話しながらも、智和の声を聞いて、深い傷口が癒されていくのがわかる。が、その智和もこの件に関しては、頼ることができない。

「まあ、こんなことはないと思うけど、しつこいテレビ・レポーター達が押しかけて行くかもしれないし、女の一人暮らしは物騒だからね。部屋にはしっかり鍵を掛けておくんだよ」

「ええ、それじゃお仕事がんばってね」

松方から呼び出しの電話が掛かったのは、それから三日立ってからだった。

「いいかい、人に見られてもあんただとわからないように、サングラスをかけて来るんだぜ。俺は駐車場で待ってる。白のミラージュだ」

「あの、例のビデオは返して下さるんでしょう？」

「さあな。あのビデオはある人物に預けてあるんだ。頼むなら、その男に頼むんだな」

「誰ですか、その方」

「これから会わせてあげますよ」

「お金は用意しなくていいんですの」

「ハハ、気が早いな。お金で買えるものならいいんですがね。ま、今日のところは必要ないでしょう。そうそう、今晚は帰れないかもしれないから、家族の方には適当に口実を作って話しておくんですな。十五分以内に下りて来て下さい」

「あ、あの——」

すでに電話は切れていた。

例によって眼隠しをされ、車は静かに走り出した。眼隠しは、先日のようにピッタリとした布製のものではなく、サングラスの裏側に墨のようなものを塗った不透明のものだった。したがって、眼鏡との挟間から、辺りの景色を盗み見ることも、できないことはなかった。

が、それが全くの無駄骨だったことに、百恵はまもなく気づいた。

車を降りたのは、都心に近い豪華なマンションの地下駐車場だった。

百恵はサングラスをかけたまま、松方に手を引かれてエレベーターに乗せられた。

エレベーターは最上階で停まり、二人は廊下を歩いて「M・S」と書かれた、プラスチックの標札のかかる部屋の前で立ち止まった。

チャイムを押すと、すぐにドアが開いて、

百恵は背中を強く押されて中へ入った。

「もういいだろう」

部屋の中に通されたところで、サングラスを外された。眼の前に立っている男を見て、百恵はハッと眼を見開いた。

「やあ、元気かい百恵ちゃん。いや、新浦夫人と云うべきかな」

パイプを咥えて、そこには酒田政義が立っていた。

生人形地獄

美保戸 実彦

あらすじ

龍二郎は名家の生れながら身をもちくずし、女郎屋・天狗楼の女衞をなりわいとしている。

父親の代に親交のあった須黒男爵は龍二郎の常顧客であり、龍二郎は男爵から特別待遇を受けている。

男爵邸におもむき男爵が折檻中の奥女中小夜を囑るのを手つだい、美肉のごしようにんにあずかる。

帰り際、屋敷の玄関にうずくまる乞食の娘を捕えて天狗楼につれ帰るが、父親は乞食姿に身をやつして仇討ちを企てていた士族の者。娘の姉はなんと天狗楼の女郎に身をおとしており、ちようど都合があつて主人より折責を受けているところだった。

天狗楼の上客「ご隠居」こと富田弥平は、呼び名こそご隠居だが、レッキとした現役の高利貸し。ご隠居の呼び名はここ数年前までやっていた商売を止めて隠居仕事に高利貸しを始めたところから付けられた。

大震災の下サクサに大儲けした金を元手に始めた高利貸しだが、これが昨今の不景気で有卦に入り、ここ新宿界隈の中産階級相手にあくどく稼いでいる。

年の頃は四十五、六、ズンダリした体つきに丸顔の禿頭、その禿頭にわずかに残る毛を後生大事にボマードで横に梳いているところは、ノンキナトウサンの風情だが、その金壺眼はノンキどころか利を生むものなら、ひとすじ見逃さぬとばかりキョトキョトと、時には陰険に、時には冷酷無残に光っている。むしろその光がこれだと思う女に向けられると、さらに増すことは言うまでもなく、家では妻妾同居を強いている上に、高利のカタに責め

落としたサラリーマンの若妻やオフィスガールをもてあそぶことも多いという噂。

このすこぶるつきのひひ爺が、かねてお眼当ての染香を縄付きでおもちやにできると聞いて、眼を輝かさぬはずはなかった。ましてその妹を水揚げできるというおまけ付きである。それを「わしは変態は好かん」とか「姉と妹をひとつ床に並べてなど人の道に反する」とか心にもないことを言つてゴネて見せたのは、持ち前の吝嗇から玉代、水揚げ代を値切ろうという魂胆に他ならなかった。

「江戸時代、吉原に遊ぶ大尽の行きつくところはこのような遊びで、そのチャンスを買つても手に入れたと言いますがなあ。わたしの出入りしている某公爵は年をとってからの遊びはこれに限るなどと言っておりますぜ」龍二郎はあんたがいやなら買い手は他にいくらでもいると言わんばかりの顔をして見せた。



結局ご隠居が言う値で信玄袋の紐をゆるめ

る気になったのは、「お大尽遊び」という龍二郎の言葉に自尊心をくすぐられたせいだろう。

暗い廊下を奥へ案内されて行きながら、なおもさつき払った大枚の金のことを未練がましくブツブツ言のに、龍二郎は、

「同じ女郎ながら染香にひと味違うところがあったのは、旧士族で、親がこの誇りを忘れぬよう小さい時から訓育したからですよ。妹もなかなかキリツとした娘です。そこら辺の土百姓の娘と違います」

おおいに商品価値を説いた。

「士族くらいじゃ高が知れとる。華族の令嬢というのなら、金庫を空にしても悔いんがな」

「ま、それはちとムリというものでしょう」

そう言葉を返しながら、龍二郎は暗い行く手に百合子姫の白い面影が立つのを見た。弥平がいくら金庫の底をはいたとて、百合子姫は買えないだろう。が、下司は下司なりに限らない上淫を夢見ているのが痛快だった。

廊下を幾曲りかして、突き当りの板戸を排した所が目的の奥座敷であった。灯は明るくともしてあるが、すすけて黒光りする柱や鴨居の隅々に何やらいかげん臭いをしみ込

ませた八畳の床の間である。

中央に延べられた二枚重ねの敷布団の上に染香が寝かされていた。掛布団はなく代りに緋縮緬の長襦袢が掛けられており、その盛り上りの様子からどうやら股を左右に捻げられているらしい。

そして今一人、今夜水揚げの相手のミヤという妹は、その傍の黒光りする床柱に、桃色鹿の子の長襦袢を着せられ、乞食の時の蓬髪はういういしい桃割れに結われて、後ろ手に縛られている。

この座敷の光景を見たご隠居は、さっきまでの不平たらたらも一瞬に忘れたように、ほうと嘆声を発した。

「こりゃ、趣向だな」

「この龍二郎、客に損はさせませんよ」

ズカズカと踏み込んだ龍二郎は、ミヤのあとに手をかけて、そむけた顔をグイと弥平の方に向けた。

「乞食に身をやつしても、生まれつきの美質、磨けばこのとおり、姉にも劣らんでしよう」「うむ」

ミヤはキリリと稚ない唇を噛みつつ、つぶらな瞳にきつい光を剥き出しにして弥平をにらみ上げた。金で縛り上げた女たちしか抱いたことのない弥平にとっては、こんな小娘の

反応にタジタジとなったようだ。

「今日手に入れたばかりで、まだ水揚げの作法も教えとらんのです。で、姉の男あしらいを見習わせようと思ひましてね」

そう言うとき龍二郎は猿轡を伸ばして染香の体に掛けてある長襦袢をサッと剥ぎ取った。

ふうわりと舞い上る濃艶な脂粉の香りと共にあらわに明りのもとにさらけ出されたのは布団の上に人の字がたに縛りつけられた、一糸まとわぬ染香の裸形だった。両腕は後ろ手にいましめられて、柔らかな乳ぶさも上下から締め上げられて固く盛り上り、両の足首は布団の下をくぐらせた縄で、幅いっぱい捻げられて縛りつけられている。さらに腰の下にはご丁寧に腰枕まで当てがわれて、剥き出しの下腹は綺麗に刈りそろえられた恥毛を誇示するように盛り上げている。むろんその陰の弥平の惚れ込んだ道具も丸見えである。うっすら縦割れを開いて、二枚の舌をわずかにのぞかせているのが、天井の明りを受けてうっすら紅に光っている。

弥平は喉をヒクヒクうごめかせ、舌で分厚い唇を舐めまわした。

いくら女郎といえども、客に素肌を見せることをいやがる。よほど狎れた客に対してもそうだ。帯紐を解き湯文字をはずしても、長

襦袢だけは肌身からはなさないのが女郎の誇りとなっている。彼女らにすれば、ズロース一枚だけで舞台上踊るエロショーの女など最低の女に見える。

そんな古い考えに縛られている女が、一条まとわぬ裸形を、どうぞ存分にいじりまわして下さいとばかり腰を持ち上げているのである。しかも両手両足を縛られて。長い女遊びの経験の中でも、こんなことは初めてであった。

これは染香の立場から言えば、死に勝る屈辱であるに違いない。その屈辱が敷布に捻じりつけた無念の形相に、さらけ出した白い腹の喘ぎに、内股の慄えに剥き出しになっている。妹の眼の前で生き恥を曝し、その上同じ床で妹を破瓜させる悲惨に染香を耐えさせているのは、父を救いたい一心からだ。龍二郎がこれらの悲惨の代償として得られた金を保釈金として、彼女らの父を牢から出してやると約束したのだ。それがなかったらいか

妹を左右に見渡せる位置に置いた。膳は今夜流されるミヤの破瓜の血を思わせる朱塗りであった。

弥平は床の上に信玄袋を大事そうに置くと、龍二郎と向き合ってあぐらになった。

「注ぐ前に、今夜の玉をお見せせねばいけませんな」

龍二郎は柱に立縛りにされているミヤに寄り添うと、長襦袢の肩を剥き、衿をくつろげて、硬く盛り上った乳ぶさを剥き出しにした。「小柄なので小学校を出たばかりかと思っていたら、これでもう十五だそうですよ。しかし裸にすると、けっこう実は入っているように」

裾をはだけられると知って、ミヤははじめて「いや」と声をあげた。くくられた足首をよじり膝をすり合わせて「いや、いや」と愛らしい桃割れの頭を振りたてる。

前をはだけられた長襦袢の下は何も着けていず、白い下腹から腰、太腿が剥き出しになった。下腹にはあるかなきかの下草が萌え、まだ稚な児を思わせる柔かな肉の割れ目が見え、さらけだした。前を

で、どうかと思ったんですが」

その顔も、桃割れを結われると同時に厚化粧され紅を塗られて、とてもこの昼下りまで道端の蔭に坐っていた娘とは思えない。

「さ、いきましよう」

銚子を取り上げて、龍二郎は弥平の盃にのみなみと注いだ。



姉妹の生
目を肴に
酒をくむ

「それじゃ、邪魔者はそろそろ退散しますかな」

数献やりとりした後、龍二郎は腰を浮かしかけると、弥平があわてて止めた。

「あんたがいてくれんと困るよ。わしは縛った女の扱い方を知らんで」

「なに、当り前に扱えばいいんです。飲みながらこうやっていじくるのもよし」

龍二郎は左手に盃を持ったまま猿轡を伸ばして染香の股ぐらに触れた。襷をめぐってなぶりながら覗き込んだ。そこはまだしっとり自然の湿りを見せているだけだ。二本そろえた指を差し込むと、痛そうに呻きをあげた。

「こっちも喉が渇いているようですから、一杯飲ましてやりますか。それに妹の祝いでもあるし」

「さあ、ご隠居、祝いの膳が来ました。前祝いに姉と妹の活き貝を肴に一献いきましよう」

龍二郎は女中の手でさし入れられた膳を姉

満たした盃を、片手の指で大きくくつろげた襷の間に垂らした。

「ああ、お、おゆるし……」

染香ははじめて声をあげ、腰を大きくよじった。龍二郎はさらに実を剥いて、そこにも酒を垂らした。染香はもたげを腰を激しくゆさぶって悲鳴をあげる。

「そら、上の口でも飲め」

龍二郎は染香の首を抱え込み、口移しに飲ませた。

「ざっとこんなもんで、なぶり放題というわけです」

濡れた口髭を整えながら振り返ると、弥平は興奮をあらわにして、手にした盃を口に運ぶことも忘れていた。

「もっとやって見せてくれ。面白い」

「それじゃ、ご隠居はミヤの方をなぶりながら見ていて下さい」

龍二郎はミヤを柱から解き放すと、剥き出しの下肢をあぐらに組ませて足首を縛り、その縄尻を肩からうしろにまわして後ろ手のところまで留めた。ゆるい海老縛りである。まだ長襦袢をまとい細帯は締めているものの、うしろにたくれてしまい、体の前は剥き出しのなぶり放題の姿だ。これを龍二郎は弥平のあぐらの前に据えた。

「なんなら仰向けに引っくり返しませうか」

龍二郎が肩を押すと、ミヤの小さく折りたたまれた体は、鹿の子の長襦袢の裾を長く曳き、腰から下を丸見えにして逆しまにひっくり返った。

「かんにんしてッ……い、いやあッ」

歯を食いしばり、稚ない顔を真っ赤にして耐えていたミヤの口から、激しい悲鳴がほとばしった。年頃のおぼこ娘にとっては死にもまさる辱かしい姿だ。それをなんとか逃れようと右に左に体をひねるのを、龍二郎がガツシリと押さえ込み、あぐら縛りに拡がった膝をさらに大きく押し拡げた。

「水揚げには慣れたご隠居でも、こうあからさまにおぼこの秘溝を覗くのは、はじめてでしょう」

「あ、あねさまッ……助けて……」

羞恥の様に、ミヤはただの小娘に返って泣き叫ぶ。

「ミヤちゃん……が、がまんして……」

染香も酒を注がれた秘肉のむず痒い火照りに身を揉みつつ、

「お父上のために……」

はげますのも涙の中だ。

逆しまに掻きくつろげられたミヤの股の奥は熱れかけた白桃の実さながらだった。掻き

のける必要さえなくかぼそい毛をまばらに生

やした柔肉は、ひとすじとおった縦割の両側にふっくり盛り上り、ちよっぴり浅紅の秘唇をはみ出させ、頂点には実がまだ厚い皮をかぶってわずかにそのありかを示すに過ぎない。

「めくってごらんさい」

「あ、う、うん」

酔いと興奮に禿頭を赤く染めた弥平は、あわてて盃を置くと、唇を舐め舐め柄にもなく慄える指を、手入らずの柔肉にかけた。

「ああ、いや、かんにんしてッ」

ミヤが小さな腰を振りたてた。

「ちよっとしたお医者さまごっこの気分ですな」

そんな龍二郎の冷やかしも耳に入らぬげに弥平は両手の指で引きはだけた肉の奥を、金壺眼を異様なまでに血走らせて覗き込む。

二枚の活きのいい刺身を思わせる襷まで左右にふれて、小さくつぼまった秘溝をのぞかせている。その可憐なただずまいは今日の昼見たお小夜のその比ではない。まさにこれから色づこうとする実さながらである。

「いい玉だ。わしもこの年になるが、こんなおぼこははじめてだ」

龍二郎の脳裏を、またまた百合子姫の面影がよぎった。あの高貴な姫も、このような実



を股間にひっそりと熟成させているのだろうか……。

「盃を与えてごらんなさい。水洗いした刺身みたいな、もっとプリプリするかもしれないよ」

弥平は盃を肉のくぼみの上に傾けた。

「あ、ヒイ……」

ミヤがグンとあごを衝き上げ、交又させられて足の裏を反らした。

肉の盃は襲をヒクヒク収縮させて、滲み込む酒精分を満たしていたが、やがて一部を蟻の戸渡りから尻の穴にあふれ出させただけで、注がれた大部分を体の奥に吸い込んでしまった。穴の奥がまるで喉を鳴らすようにゲビゲビとうごめくのが見えるのだ。

「飲んじまいましたぜ。処女膜には月のものが出る小さな穴があいているというのは本当のようすな」

「う、うん」

ひひ爺は欲望が喉までせり上ったか、ただうなづいて見せるだけだ。その処女膜を確かめようとするかのように、さらに掻きくつろげて覗き込んだ。

「ついでに盃を返してもらっちゃどうです。」

穴に口をつけて吸い出すんですよ」

言葉を待たずに弥平は禿頭を耀かせてミヤ

の股ぐらに顔を押し当てた。ミヤは悲鳴をあげてあぐら廻りの下肢をゆすりたてつつずり

上る。それをがっしり掴み止めておいて、弥平は禿頭を振りたて振りたてチュウチュウと舌を鳴らす。

龍二郎は顔をそむけてすすり泣いている染香の股の間にもどった。

「すこしは濡れたわね」

無造作に指を捻じ込まれて、染香は備えも忘れて悲鳴をあげた。

「ふむ。さっきにくらべるとだいぶ練れてきているな。もう一杯やろう。妹さえ飲みほしたんだから、姉なら二杯でも三杯でもいいだろう」

「おゆるし下さいまし…… おゆるしを……」

「なあに、今日はミヤが女になるめでたい日だ。商売気を忘れて悦んで見せるがいいぜ」

ミヤが逆しまになって弥平に股ぐらを吸われて呻いている傍わら、銚子を取った龍二郎は、酒をラッパ飲み口に含み、大きくくつろげた染香の秘肉にビュウと吹き込んだ。

「あ、……し、しみますッ…… かにんして……」

……

「しみるか、そうかい」

もっとしみ込ませようと、指で秘肉の上を突といわず襲といわずシコシコと酒精分をす

り込んだ。

「ああ、ど、どうしよう……」

「その調子で声を出すがいい。そうすりやミヤの心もほぐれて破瓜も楽になる。もう一杯やろうか」

もう一度口に含んだ酒を、今度は口移しに染香に飲ませた。ついでに口をつけたまま舌を吸ってやると、鼻を色っぽく鳴らし肩をゆさぶって応えてきた。もはやこの羞恥地獄から逃れる道は、愉悦の中に身を灼きほろぼすしかないと思いつめたか、それともはや酒に酔うて思い乱れたか。龍二郎はそんな染香がいとしく、片腕に首を抱き込み、片手で乳ぶさをやわやわと揉みあげてやった。

すぐ傍では、ミヤが泣き声をあげながら顔を振っている。その泣き声からさっきまでの張りが失われかかっているのは、弥平熟練の舌さばきが、おぼこが固く秘めたみだら心にじよじよに訴えはじめたのに違いない。

「そら、ミヤがいい声で歎きたしたぞ」

「ああ、なんてあさましい……」

「父親のためだ、忍べ」

龍二郎は力ない顔をこっちに向けさせて、ふたたび口を吸いつつ、手を股の間に伸ばした。そこはさっきとは見違えるように熱く火照り、飲まされた酒とは異質のねっとりした

ものをたっぷり含んでいる。

「ああ……」

口を吸わせたまま、染香は鼻で歎きつつ腰を慄わせた。龍二郎の巧みな指が、酒精をたっぷり吸収して赤く起立しきった実をいじりだしたのだ。いくら男に狎れた女郎でも、この感覚に鈍感になることはない。いや、女郎なればこそ、ここを自由に客になぶらせて気をやってしまうことを防ごうとする。

その女のいのちを根まで剥き出しにされてクリクリいじりまわされるつらさ、羞ずかしさ、そして痺れるような心地よさ。なまじっか酒精分にひたされているために、感覚がじかに伝わらず、まるでそこから心地よい酔いが発するかのよう、腰全体がズキズキとわずき出すのだ。

「ああ……龍二郎さま……」

口づけから解放された染香は、ねっとりうるんだ瞳で、近かちかと覗き込む白哲の顔を恨めしく見た。

「おめえの客はおれじゃない」

「そんな……あたしをこんなはずかしい体になされておきながら……」

眼元をボウとけぶらせた羞じらいの色は、恨みつつもいつしか心の奥深くで惚れてしまった女のものだ。

が、龍二郎はその瞳をさりげなくはずして、股の間にあぐらになった。

「ご隠居、こっちをひと啼かせしてよござんすかね」

ようやく弥平は夢を見ているような顔をもたげ、口のまわりのベトベトをペロリと舐めた。

「お前さんがやって見せるのかい」

「いや、こいつを使いますよ」

龍二郎は布団の下から、数知れぬ女の樹液を滲み込ませて、木目もわからぬくらい黒ずんだ黄揚細工のみごとな張形を取り出して見せた。

「ミヤに男の啜え方を教えるにや、いいんじゃないですか」

「うむ、いいだろう」

弥平は逆しまにして転がしていたミヤの体を引き起こし、後ろ抱きにして膝の上に乗せ上げた。姉が張形を啜えてよがり狂うところを後学のために見せてやろうというのだ。

男の指に

乱れ喘ぐ

美女二人



ミヤの桃割れはガククリ崩れ、赤い手絡がかぼそい頸すじに垂れて、呻くたびに揺れている。

弥平の左手は稚ない乳ぶさをこねるように動き、右手は酒と樹液とつばきが入りまじったものでぬめぬめと光る股間にうごめいている。そこは稚ないただずまいなりに充血して、襲もさつきよりひとまわり大きくなり、実も珊瑚色の頭をポツチリのぞかせている。水揚げの準備が万事ととのったようだ。

それを斜に見やりながら、龍二郎は同じようにくまなく開きたてられた姉の股の奥に黒光りする張形を当てがった。同じ女の持ちものでも、こちらは数多くの男を夜毎に啜えてきたものだ、それだけに柔かく、奥まで開き切って樹液を吐いている。押し当てられた張形の先端を楽々と呑み込んだ。

「ああ……ミヤちゃん、見ないでッ」

しっとり濡れ乱した黒髪を敷布によりりつけるようにのけぞりつつ、染香はうわずった声をあげた。がその腰は酒を飲まされてむず痒い秘肉に刺戟を与えられる快感に、おのきよじれるのだ。

小口を小突かれて焦らされる切なさ、叫びが歎き声に震えだすのを、ミヤは信じられないものを見るように、涙をいっぱいためた瞳で見ている。いや、無理やりあごに手をかけて見せつけられている。そこに泣き悶えているのは、売られて行く前の印象に残る気



貴いばかりの姉ではなかった。

「あ、あねさま……」

「ミヤちゃん、見ないで……」

声のなかばで、ウウツと白く汗に光る喉を
反り上げたのは、野太い猪首が熱い肉を引き
ずり込むようにして没して来たためだ。

「ああ、き、きつうございますッ、龍二郎さ
ま！」

ガクガクと腰を衝き上げて、嫌悪とは裏腹
に、もはや止めようもない肉の悦びに、染香
は狂乱した。人の字に曝された裸形全体から、
むっと息づまるばかりの色気を汗と共に立ち
昇らせつつ、くなくと舞い狂うさまは、女
郎の身ながら気をやることを禁じられた女体
が、はじめて恋しい龍二郎に責めなぶられて、
その被虐の中に腹の底から湧き立つ愉悅を存
分に味わい尽そうというのであろう。

「ああ、いい……き、気持ちようございま
すッ、龍二郎さまッ」

一寸刻みに啞え込まされるにつれて、のけ
ぞりそり返り、ずり上りつつ、染香は腹の底
から悦びの声を絞り出す。

このあまりな激しさに、弥平も息を呑み、
ミヤまでが魂を奪われたかのように。いつし
か姉の腰の動きに合わせるように、腰をもぞ
もぞうごめかし始めている。その敵意剥き出

しの瞳もとろんと霞んで、龍二郎の意図した
とおり、水揚げには無上の実地教育になった
ようだ。

張形をなかばまでしか与えずに、そこで小
刻みに動かして姉を悶え泣きさせながら、龍
二郎はそんなミヤを振り返った。

「わかるか、ミヤ、男と遊ぶというのは、こ
んなにも心地よいものなのだぞ」

さすがにミヤはハッと顔をそむけた。

「毎日腹いっぱい白い米を食べ、男にこうや
っていい気持ちにしてもらえる。その上お前
の場合はそうしながら父上を救い出すことも
できるのだ。なんと女郎というのはいい商売
ではないか」

染香はそれを否定したくとも、その言葉を
失なっていた。胎奥まで逞ましいものを入れ
てもらえないもどかしさに、腰を小刻みにゆ
すりたてつつ、煽々とした歎き声を絞り出し
ている。そして、「そうだな、染香」と問わ
れると、もっと可愛いがって欲しさに、ガク
ガクうなづいてしまうのだ。

「ようし、それじゃ妹のために、思い切りいい
音をあげて気をやって見せるがいい」

龍二郎はゆっくりと張形を根元まで沈めた。
「う、うむ……」

白眼を剥いて大きくのけぞった染香は、拡

げた下肢をグソと突っ張らせつつ、もたげた
腰をわななかせた。

「まだだ。また気をやるのは早い」

スーと手を引くと、染香はもはや焦点も定
かでない瞳をカッと睨って大声をあげた。

「こ、このまま……おねがいでございます、
……このままいかせて下さいましッ」

「ダメだ、妹に今の心地よさを言ってやるの
だ。そうしたら心ゆくまでいかせてやる」

「そんな、むごい……龍二郎さま、お慈悲で
ございますッ」

ズルズル抜き出されてゆくのを腰で追い求
めながら染香は泣き叫んだ。

「さあ、言え、言わんとこのまま抜いてしま
うぞ」

「も、申しますッ」

やるまいとその筋肉を必死につぼめて啞
え込みながら、染香は絶叫した。全身に水を
浴びたような汗だ。

「ミ、ミヤちゃん……」

泣き悶えつつ、染香はおびえたようになって
いる妹に眼を向けた。

「あ、あねさまは、いま、龍二郎さまにこん
なにされて……死ぬほど、いい気持ち、なの
ですよ……」

「あねさまッ」

伝記

淫縄狐火街道

第一回

美濃村 晃

街道の異変

「騒がしいことだな。早馬はこれで二度目になる。こう早打ちを度々走らせるようでは丹波福知山の稲葉家によほどの大事が起ったとみえる」

茶店の、よしず張りの陽覆いの蔭から照り返しの強い往還を覗めながら、舌打ちをするような調子で云ったのは、茶店の床几に腰をおろしている旅の侍達の中ではいちばん恰幅の良い頭株の人物だった。

「は、仰せの通りです。なにやら稲葉

藩に通じる丹後街道は、朝来人馬の往還すさまじくただならぬありさま。早速人をやって何事が出来ましたか調べさせましょうか？」

「従者らしい侍が云うのをさえぎって、
「あ、いや。そのままにしておくがいい。かえっていらぬ探りを入れると、こちらの正体までが露見するもとじゃ」と制したのは、流石に人の頭に立つ侍の貫録だった。

この篠塚の茶店のある丹後街道は東は若狹に接し、西は但馬、そして南は丹波につながっている。北側はすべて海だ。

その海辺の街道を、往還の旅人を押しつけるようにして、朝から早打ちの駕籠や早馬が砂塵を卷いて通りすぎるのである。よほどの鈍感な頭の持主でない限り、丹波福知山四万五千石の稲葉淡路守の城下に何事か異変が生じたことを感知するのにさして苦労はなかったはずである。

これが丹波福知山四万五千石雁間詰の藩主稲葉淡路守紀通が乱心の果自刃した為の騒ぎだったと判ったのは、ずっと後のことであった。



れ
え

十手を持った男

「おい。ねえさんよう……へへ。そんなに急ぎなさんなよ。えっ？行く先は大方、京の町あたりだろうが、へへ、袖すりあうも他生の縁……なんて云うじゃねえか！この暑いさなかだ。仲よく話でもしながら旅をしようとは思わねえかい？」

さつきから、眼付きのよくない四十がらみの男が、由良川の橋を渡った頃からうるさく話しかけてきて離れるようすがなかった。

「なあ……ねえさんよう！」

「旦那、すみませんねえ。あたしやすこしばかり先を急いでおりますので、お相手をしてもらえないんですよう……すみませんねえ……」

ていよくつっぱねたつもりが、男はなかなかはなしてくれなかった。

「へッ。このおれをゴマの蠅かなどと勘ちがいしているんじゃない？へへ、安心しなおいらはホラ、この通り御用を預っている者さア……ね……」

男は、腰の間から、ヒョイと十手を抜き出してあかるい街道の陽にかざした。

十手の先に聳えているのは、このあたりで名高い由良ヶ岳で、街道をもう少し行くと、やがて、山椒大夫の物語りに出てくる安寿姫の墓があるのだった。

十手を見せられた女は、[「]厭な奴に逢ったなあ[」]という顔をして、さりげなく話をそらした。

「まあっ、親分さんでしたかえ。そりやおおみそれしちまってすみませんねえ……それにしても今時分、こんなところに御用の筋でもあるんですかねえ」
「い、いや、なあに、御用の筋と云やあまあそれにちげえねえんだが、実は、女を一人このあたりに追い込んで探してるのさ、えへへへ、おめえさん知るめえなあ……」

「えッーとんでもない、なんであたしが親分さんの探している女なんかを知っているのですか……冗談もたいがいにして下さいましよ……ばかばかしいねえ……」

「ふん。知らねえのか、そいつは悪か

ったなあ……」

「へええ……で、その女はよっぽど悪いことをしたんでしょかねえ。人殺しの女賊かなんかで、凄いい状持ちで……おこわい！」

「いやあ……おいらの探している女は、そんな兇状持ちなんかじゃねえんだよう。もっともその女は白い餅肌桜の入れ墨をしていていやがるってよ。くふふッ、めっぼう美しい女だそうだが」
旅の男はうすわらいをかくして十手を腰にしまいこむ。女は尚も訊ねた。

「で……親分さん。しつっこいようですがそのおたずねの女の名前は何と云うんでしょうねえ……親分さんのようないい男に追われている女の名ぐらいは聞かせておいて下さいな……」
「うむ。その女の名は……狐火のお紺といつてな、素肌に朱彫りの桜の刺青をしているというのが目じるしだあ」
「へええ、女だてらに朱彫りの刺青をしているってねえ……狐のおコンと云うのもふざけてますわねえ……あッ。こっちの道が桂林寺へ出る近道ですから……あたしはここでおいとましますよ……はいさようなら」

と、女はそのまま左手の道へと行っ

てしまった。
「ちえッ。ちよつとばかりいい女だから何とかあたりをつけて今夜の泊りの女にしてやろうと思ったんだが、ちくしよう今夜のところは、朝代^{あさしろ}の宿場にも泊って飯盛り女でも抱いて寝るとするか……」

男は舌打ちをして、今宵の泊りと決めたしのめの宿場へ入っていった。

風呂場のぞき

「ああ、いい湯だねえ……」

お紺は、湯の中へ静かに裸身を沈めてうつとりと眼を閉じながら、昼間の道中の出来事を思い出していた。

お紺は、湯の中でひとりごとを云った。

「ふ、ふッ。そういえば、きょう街道で逢った間のぬけた男は、いまごろどうしているだろうねえ……狐火のお紺を探しているとか云ってたようだけど、見付かったかしら？」

ホホホ……と、おもしろそうに笑って、肩に湯をかける。

そのお紺の肩から乳房にかけて、燃えるような朱彫りの桜が咲いているのだった。

「ほ、ほほ、一緒に歩いているあたしを、当の狐火のお紺だとは気がつかず、お紺という女を知らねえか」だってさ、あんなドジな十手持ちに捕まっていたまるもんかねえ……ふふふふッ」

お紺が風呂の中で笑っているとき、その窓外で、

「ちくしょうッ……」

と口惜しがっている男がいた。それは公儀隠密頭井関半九郎から十手を預けられて狐火のお紺の探索を命じられた人買いの辰造だった。

辰造は女客の入浴姿でも盗み見するつもりで夜の食事の終ったあと、ふらりと宿の庭に出て風呂場の窓から覗いていたのである。

「ちくしょうッ。あの女がおれの探している狐火のお紺だったのか！ そう云えばまぎれもない、素肌に朱彫りの桜のいれずみだ。あの刺青を見ただけでもたまらなくなってくるようだなァ……それにあの、毛の生えたあたりの土手のふくらみが何とも云えずたまら

ねえなあ……けへへへッおしりの大きなところも俺好みだしよ……へ、へッへッへ！」

この辰造という十手男は、井関半九郎から十手を預かるまでは、丹羽で人買いをしていた奴だった。稼業柄で今までにも、何人もの女を縛ってきやがったのだ。辰造は、お紺の裸を見て日頃の助平心がむくむくと頭をもたげてくるのだった。

「へッへッへへ。いまに見ろ、あのお紺の阿魔め！ 井関さまのお指図通り必ず引つとらえて締め上げてやる。いずれは俺が縄をかけてやる女だが、その時にゃあ、何もかもむき出しのままの素っ裸にして縄をかけてやることにするぜ……へへッそれにしてもこの俺さまもこてえられねえ仕事を引き受けたもんだなァ……これまでは女を縛って売りどばして金にして過してきたが、こんどは御公儀隠密頭の井関半九郎さまの配下になったんだぜ……その俺の仕事が、狐火のお紺というめっぼう好い女を捕えて締めあげて丹羽福知山の稲葉家の隠し金を埋めた場所を白状させるといふ役まわりだ……へッへへ。

そろそろたまらなくなりはじめてきやがったぜ……」

ひとりごとを云いながら辰造の奴はお紺の裸を覗いて、禪の下のを硬くしているのだった。

「け、へへへッ。たまらねえケツをしてやがる……」

辰造め、窓の外から伸び上るようにして見とれていた。

「だ、だれだいッ！ そこに居るのはッ！」

お紺、湯殿の窓の外に人の気配を感じて、思わず叫んでいた。

洗い場に立て膝になって胸の隆起を肘で隠して手桶に汲んだ熱湯を窓に向けて

ザーッ！とあびせた。

「うッ！ あっ熱いッ！」

熱湯を頭からあびせかけられた辰造は、

「あっちっちっちッ！」

と、窓の下で踊るように飛びはねたが、顔面から首すじにかけて赤むけするほどの熱傷を受けた。

「ちえッ！ あちちちッ！ くそっ……こんなことしやがって！ おぼえている

「お紺め！」

と大声で叫んだが、その辰造の声が湯殿の中のお紺に聞えた。

「おや？その声は……あっ！あゝのとき
のまぬけな親分さん？」

「うッ！お紺ッ！ま、待ちやがれッ」

辰造は、お紺に気付かれたと判ると逃してなるものかと、庭から宿の廊下
にかけ上がり、風呂場の出口へ駆けつ
ける。

罠にかかったえもの

狐火のお紺は、辰造が湯殿の出口に
まわって行かない間に裸身のまま湯殿
をとびだしていた。からだを拭う間も
衣類を身につける暇もなかったのであ
る。ただとっさの間に、真紅な湯文字
を手につかんでいたのは流石に女だっ
た。

「お紺め、どこへ逃げやがった？」

辰造が騒ぎたてたので、宿屋中は騒
がしくなってしまった。

「おれは、こういう役儀の者だ！いま
ここを逃げていったお紺という女を探
しているのだこの宿のあるじを呼べ！」

辰造は、井関半九郎から手渡された、

隠密手型を、宿の者に示してお紺を捕
える手伝いを命じた。隠密手型は、黒
の漆染めの牛皮に金箔で三ツ葉葵の紋
が押しつけられている大仰なもので、
各地の関所は云うに及ばず宿役人、各
藩の郡役所などにも通行手型として地
役人の協力が要請できる効力があつた。
「ええ、親分さんに申し上げます」

宿のあるじと名乗る者が、おそろお
そろ辰造のところへ出てきて、お紺を
いまやと裏の土蔵の中へ追い込みま
したので捕らえるのはもう時刻の問題
だと告げにきた。

袋のねずみのお紺

「親分さん。女はもう袋の鼠でござい
ますから逃げられるはずがございませ
んよ」

「うむ。そいつは手柄だったな。あの
女は御公儀隠密頭の井関半九郎さまが
追っておられる狐火のお紺という女賊
だぞ。若し取り逃すようなことがある
と、この家におとがめがあるぜ。どん
なことがあっても女は逃しちやあなら

ねえ」

辰造は、宿のあるじを十手で脅しあ
げてお紺が逃げ込んでいるという裏の
土蔵の戸前のところまで案内させた。
「へえ。この土蔵でございます」

「ふーむ。こんなところへよく追い込
んだものだな」

などと辰造は云ったが、本当のそこ
ろは、風呂から逃れ出たお紺が腰巻一
枚の裸をどうすることもできずにとり
あえず逃げ込んだものであつた。

土蔵は厚い壁で囲まれていて厳丈に
造られていた。

「裏に出口はねえんだろうな」

「へえ、裏には出口はございません。

この入口だけで……へえ」

「ところで……おやじさん」

「へ、へえ……何事でございましょう
か」

「お紺はいま、どうしているんだ！」

「へ。あの女は風呂から出たままの裸
で、腰巻一枚で、どこへ逃がれようも
ねえようですよ。へへへへッ」

「そうか。しかしあの女は、狐火のお
紺と云われたほどの一筋縄じゃいかね
え女賊だぜ。丸裸にしたって平気で逃



げる女だ。腰巻一枚ありやあおんの字さ、あの女は少しの油断もできねえんだ。いちばんいいことは、まずあの女を縛りあげてしまうことだな」

「へえ、おっしゃる通りでござえます」

「そう気がついたら、おめえが行ってむりやりにでも縄をかけてきな！」

お紺をここから逃さないためにはまず縄をかけることだと気がついた辰造は、宿のあるじにお紺を縛る縄を持って来させた。「お、おい、この宿のあるじを呼んでくれ」

「へ、へいッ。宿の主人の清助でございます。親分さんのお申しつけの縄をいろいろ持ってまいりました」

「ふむ。どれどれどんな縄だ見せてみな」

辰造は、土蔵の中に隠れているお紺を縛る縄を、清助に持ってこさせていろいろと選ぶのである。土蔵の中に隠れているお

紺は裸でいるのだから辰造にしてみる
と、もう籠の中にいる鳥をつかみ出す
よりも容易なことだったはずである。
しかしいま、土蔵の前でお紺を縛るた
めの縄をいろいろと選んだりしている
のは、辰造の変態的な好みの現れであ
った。

「あの、朱彫りの桜を背負ったすっぱ
だかのお紺を高手小手に縛り上げるに
は、どの縄がいちばん俺の好みに合う
だろうか？」

などと、ぞくぞくしながら考えるの
だった。

素っ裸の高手小手縛り

辰造は、宿の亭主清助に云ってお紺
を縛らせたあと一升徳利に冷や酒を入
れて土蔵に持ってこさせた。

土蔵の二階にいるお紺を酒を飲みな
がらゆっくりいたぶるつもりでいやが
るのだった。

「おい清助。お紺はしっかりと縛って
あるのだろうな」

「へえ……それはもう力いっぱい縛
ってありますんで、あの縄が解けるは

ずはねえと……へ、へへッ思いますがね」
「ふふ。そうかいそうかい。そんなら
いいんだ……」

と、辰造は云ったが、清助が片手に持
っている赤い布に眼をとめて訊ねた。

「おッ その赤い布は何だい？」

「け、へへへへッ！これは、お紺の阿
魔の湯文字ですよ。けへへへへッ」

清助は、手に持った腰巻きを辰造に
見られると悪戯（いたづら）を見付けられた子供の
ように照れて赤い布を背後にかくした。

「うん？それは何だ……おッ？お紺の
腰巻きだな？そんなものをおめえが持
っているところを見ると……お紺は
土蔵の二階で、腰巻きまで剥ぎとられ
た素ッ裸で居るんだな？……」

「へ、へえ。お紺はハダカもハダカ、
何もかもすっかり丸見えの丸裸で……
高手小手に縛ってありますから、親分
さんがどんなお調べをなすっても、お
紺はどうすることもできませんので……
へ、へへへッ」

清助は淫らな笑いを片頬に浮べなが
ら云った。

「旦那。もうこんなになっていらっし
やいますんで、えへへへへッ、おたの

しみなこと……」

と、辰造の禪の下のもものが硬直しは
じめて大きく前が盛り上っているのを
認めてそんなことを云ったが、辰造は、
お紺が土蔵の二階に丸裸にされて縛ら
れていると聞いただけで、この好色な
男は下半身の一部を充血させているの
だった。

淫らな舌なめずり

「ふへへへへッ。お紺よう、待たせた
ようだなあ……おれだよ……うふふ
ふふ。宿場の入口で別れたきりだった
が、こんど逢ったのは土蔵の中さ。け、
へへへへ元気だったかい……なアお紺
よう」

と、土蔵の二階へふらふら上ってく
るのだった。お紺は縄尻を土蔵の大黒
柱につながれていた。

「あーッ！」

お紺は、思わず声をあげた。辰造が
淫らな眼つきをして土蔵の二階に上っ
て来たことを知っても、どうすること
もできないのだった。

「へへッ。お紺よう……おめえまっば

だかだなア……えへへッ、すっかり見えてしまつてゐるぜ……」

辰造は、お紺の縛られた裸身を眺めながら酒を飲むつもりでいやがったのだ。

「あッ、あアッ！」

と、お紺は縛られた身を悶えた。足を、どう組み直してみても下腹部の黒い繁みは男の眼から隠すことはできないのだった。

「は、はずかしいッ！」

困り果てたお紺は、うしろ手に縛られたまま、下腹部を隠すために上体を前かがみにして極度に身体を二つ折りにすると却つてうしろから見ると、おしりの穴と飾り毛に囲まれた肉桃が見えている。

「え、へへッ。いつまでもそうしていろ。おめえのそんなたまらねえ姿を肴にしなから酒を飲むのもいいもんだぜ。けへへへッ」

辰造は、そんな羞恥の姿を曝して身を縮めているお紺を前にして、チビリチビリと酒を呑みながら、稲葉家の財宝のあり場所を、ねちねちと訊くのであった。

「さあお紺。こうなつたら覚悟を決めて、すっかり聞かせてもらおうか？」

「な、なにを、しやべれと、云、云うんだいッ！あたしやなんにも知らないようッ」

「へ、へへッ。そこまでシラをきるつもりならこちらから話してやろうか。おめえ、おとといの昼間、丹羽福知山四万五千石の稲葉家の城代家老黒岩図書と会つてたろう？ そのときおめえ、何を頼まれた？ それをみんな正直にしやべつてしまえッ！」

「そ、そんなことを云つたつて、あたしは知らないよッ。そ、そんな、何萬両ものお金のことなんか知らないよッ！」

「へ、へへッ。もう半分は吐いたも同然じやねえか！ 何も金のことなど訊ねちやあいねえのによ……て、へへッ。そうかいそうかい、城代家老の隠した稲葉家の隠し金というのは、テへへへッ、そんなにあるのかい？……そいつは気がつかないなッ」

辰造は、いいことを聞いたとばかり眼を輝やかせた。
「あッ、しまった！」

とお紺は思つたが、もう間にあわない。

「で……だ。その金はどこにあるのか知つてゐるんだらうなあ……えッ？」

「そ、それは……云、云えないッ！ そ、それだけは……言えないッ！……ああッ」

「ふ、ふふッ。そんな素ッ裸のまま、どこまで知らぬ存ぜぬが通せるつもりでいやがるんだッ。け、へへへッ。お紺よう、おめえのようない女が、女の生き恥を曝して悶え苦しむ姿を見るのは、たまらねえ眺めだらうぜえへへッ！ どうしても云わねえなら、ちよつと泣いてもらうことになりそうだなあ……へ、へへへッ！」

辰造は、舌なめずりをしながら、お紺のむっちり豊かな臀部をいやらしいまで撫でまわすのだった。

—— 次号につづく ——

SMポルノ

連載第4回

標的は牝犬

人妻・夏子は悩乱にのたうつ顔を
のけぞらせ戯きわめきながら、両
脚を激しく突っ張らせ、男をしっ
かり啜えこんで離さない。

火夏圭介



(1) 深くそして荒々しく

地獄の苦しみにも似た便意が、うそのように消えていた。その心地よい解放感が、夏子の屈辱をさそった。

「へへへ、ずいぶんと派手にやらかしたものだな」

トイレの水を流しながら、英次は笑った。トイレット・ペーパーで丹念に清めてやりながら、うわ眼使いに夏子の顔を見る。

「俺がぶち込んでやってから、尻の穴が前よりひらくようになったぜ、奥さん、へへへ……ふっくらと口を開いてたれ流してたからよう」

排泄の模様を意地悪く説明しながら、綿棒を使って奥まで清める。だが、そうされても夏子はすすり泣くだけで、抵抗しようとはしなかった。

「おもしれえもんだ。奥さんの尻の穴がググツと盛りあがってふくらんできたかと思うとドバツだからよ。まるで噴火口だぜ、へへへ」

意地悪くささやく。

夏子のアヌスは、まだ口を開いたまま、ヒクヒクと痙攣を見せていた。英次はすっかり清めると立ち上がって、夏子をうしろ手に縛った縄を解いた。

「さてと、第三ラウンドだぜ、へへへ、奥さん、両手を壁について尻をつき出しな」

「そんな……かんにんして、さんざ羞かしい姿を見せたのよ。もう、これでゆるして」

夏子はすすり泣く声で言った。うしろの英次をふり返る顔が、哀しみをみなぎらせている。

「だめだ。第三ラウンドはトイレの中だと言ったはずだぜ、へへへ」

英次はかまわずうしろから夏子の腰を抱きこんだ。強引に押し入る。今日になってから三度目の菊交だった。

「う、ううッ……ひどい、ひどいわッ」

夏子はうめき声をあげて、顔をのけぞらせたものの、もう逃げようとはしなかった。両手を壁について、英次を受け入れる。

ふっくらと盛りあがった肉壁を、内側へめくり込むようにして、英次は深々と貫いた。うしろから抱きすくめ乳房をわしづかみにする。

「今度は奥さんも自分から腰をゆするんだぜ。いいな、

あらすじ

美しい女に異常な執念を燃やす暴力団組長の息子・英次はいつも子分を二人従えて趣味の女狩りにでかける。しかし英次は女を普通に抱くだけでは満足せず、縄で縛り、柔肌を鞭打ち、アヌスを腸で責め、パイプ責めなどあらゆるなりを加えたあげく、アナルセックスまでもっていかないと満足しない。こんな変質者の英次に狙われた人妻・夏子の余りにも悲惨な物語はいよいよ佳境を迎える……

な、フッフ」

英次はゆっくりと腰をゆすり出した。えぐるように突き上げ、こねくりまわすように回転させる。

「ほれ、腰をゆすらねえか」

英次は叱咤しながら、深く荒々しく責め立てた。

「かんにんして……」

夏子は泣きながら何度も哀願した。しかし、英次にはかてなかった。するどい責めの前に、夏子は悲鳴をあげ、泣く泣く腰をうねらせだす。

一度、自分から腰をうねらせてしまうと、あとは腰を切ったように崩れ出した。もう、おぞましきも蓋じらいもなかった。

「フッフ、その調子だぜ、奥さん。ほれ、もっとゆさぶるんだ。うねらせろ」

英次はようやく夏子を崩壊させた興奮に、うわずった声で叫ぶ。

「い、いや……あ、ああ……あうッ」

夏子はなよなよと顔をふって泣いた。はっきりと歎き声とわかり、あられない風情である。

夏子は牝へと変わり始めていた。さっきまでのおぞましきは、めくるめく官能のうずきに変わり、肉という肉が敏感に反応する。もう、自分でもわからない内に双臀がうねり、とまらないのだ。

「あ、あうッ……あおおッ」

夏子の唇から惜しみなく歎き声があがる。それは気も遠くなるような悦楽の快美だった。アヌスを中心に、からだ中がドロドロとろけ出すようで、官能の渦に巻き込まれていく自分を、夏子はどうしようもなかった。

玉の汗が噴き出し、双臀をゆすり、うねらせるたびに、その汗が飛が散る。

「激しいな、奥さん、そんなにいいのかい」

「あ、ああ……いッ、いい……」

「フッフ、ほれ、もっと気分出すんだ。ほれ、ほれッ」

英次は天にも昇る気持ちで夏子をおり続けた。

そこにはもう、気性の強い夏子の姿はなかった。あるのは一匹の牝と化した、貧欲なまでの女肉である。

「あうッ、あうッ……い、いいッいいわあ……もっと、もっとう……」

「へへへ、そんなにいいのか。やっとな奥さんらしくなってきたぜ」

夏子が生々しい歎き声をあげ、我を忘れて自らめくるめく官能の渦に没入の始めると、英次は意地悪く、矛先を引き上げる動きを見せる。

「だめッ、やめないで……もっと、もっとよう……」

夏子は狂ったような声をあげて、英次を離すまいとした。からみつき、奥へ引きずり込むような蠢めきをみせる。壁についた両手は、まるで英次を抱きしめたいように、壁をかきむしっている。

英次はもう、有頂天だった。夏子をついに崩した。自分から腰をゆすり、離すまいとからみついてくる……英次にとって、これ以上の悦楽はない。狂ったような眼が、一層不気味さを増して、ギラギラと光っている。

「奥さん、やめてやろうか？……へへへ」

「いやッ、やめないで……」

夏子は、もう、自分でも何を言っているのかわからない様子だ。肉体の叫びが言葉となって、ほとぼしる。

「そうかい、奥さん。よしよし、もっとときつくしてやるからな」

英次は腰をよじって更に深くねじ込むと、猛然とたけり狂ったように責め始めた。

その激しきときたら、夏子の骨がきしむほどだった。突き上げられるたびに、英次が腸から口へと飛び出してくさそうである。

「ひ、ひッ……いッ、いい……いいわあ……た、たまらないッ」

夏子は声をあげて歎き叫び、両手で壁をかきむしった。りたいたりする。

今、自分がどこを犯されているのか、誰れに犯されているのか、いや、犯されていることすら、夏子は忘れていた。まるで愛する夫とちぎり合っているような喜びがようだった。

「ひッ、ひいッ……も、もう……」

たちまち夏子は登りつめた。

悩乱にのたうつ顔をのけぞらせ、歎きわめきながら、両脚を激しく突っ張らせた。まるで狂ったように。英次をしつかりとくわえ込んで離さず、痙攣を見せながら収縮を伝えてくる。

「うおッ……すげえ、すげえぞ、奥さん」

獣のように吠えながらも、英次は動きをとめない。獣さながらに夏子の腰をかかえこみ、腰をゆすり立てる。英次自身も、もう、押えがきかなくなっていた。からだ中の淫らで熱い血が、突きあげる矛先に集中してくる。

「あ、あうッ……おかしくなるわッ……ま、また、またよッ」

夏子の絶頂は止まることを知らず、連続的に歎きつづける。また激しい痙攣が走り出し、そのたびにわけがわからなくなっていく。

「あうッ、あうッ……あああ、ま、また……」

「くそッ、俺も、もう……うおお……」

「ひッ、ひいッ……いく、いくわッ」

夏子は、牝の本能もあらわに歎き悶え、おぞましい汚辱をからだの奥深く浴びせられながら、気も遠くなる恍惚の底へと沈んでいった。

(2) 真っ赤に咲いた菊花

菊交の快楽をたっぷり堪能した英次は、ポタポタと落ちる汗を手でぬぐいながら、トイレから出た。

「へへへ……いい気持ちだ、すっきりしたぜ。まったくいい味をした尻だぜ」

廊下で待っていた会田を見て、英次はヘラヘラと笑った。これ以上の快楽はないと言う、ゾツとする笑い声だった。

「会田、俺はビールでも飲んでくるからよ。この牝を寝室へ運んどけ、フツ、フツ、フツ」

さすがの英次ものどがかわいたのであろう。その命ずると、前もかくそうともせず、台所へ向う。

「へい、坊っちゃん」

会田はトイレの中をのぞいた。

夏子はすすり泣きながら、グッタリと座りこんでいた。放心しきって、今にも気を失ないそうだ。白い肌は匂うような色香にくるまれ、汗でヌラヌラと光っている。もう、さんざん英次にくい荒されたはずなのに、夏子のからは、妖しいばかりの悩ましさだった。犯され、征服された女特有の美しさである。

「奥さん、そうとう気分出してたようだな。どれ、尻の穴を見せてみな」

会田は、意地悪く命じた。汗に濡れた黒髪をつかんで

しごく、夏子はフラフラしながら、双臀を高くもたげた。その臀丘をつかむと、会田は割り開いた。

真赤な菊の花が咲いていた。はれぼったく充血して、すぼまることを忘れ、生々しく口を開いてすらいる。まだヒクヒクと蠢めいているみたいで、軟体動物を思わせる。

それは男の欲情をそそらずにはおかない妖しいまでの生々しさだった。

「哀しい……」

夏子はつぶやくと、すすり泣いた。ひくツ、ひくツとしゃくり上げるような泣き声である。そのたびに、英次の濁液がドクドクとしたたり流れる。なまぐさい濁液の白さが、不気味だった。

「坊っちゃんが夢中になるのも、無理ねえぜ。つらいだろうが、うらむんならこんないい尻をしている事をうらむんだな、奥さん」

ティッシュ・ペーパーをあててぬぐい、清めながら会田は言った。清めながらも、指先でまさぐり、その感触を楽しんでいる会田である。

「こ、こんなからだにされて……も、もう……」

「泣くんじゃねえよ。泣くのは寝室へ行ってからだぜ、奥さん」

会田は手の平で、パシッと夏子の双臀をはたいた。夏子の腕をとって、トイレから連れ出す。

寝室へ入ると、英次が洋服ダンスをゴソゴソとかきまわっていた。手にはビール瓶を持ち、らっぱ飲みである。

会田は夏子をベッドの上へ迫りあげると、うつ伏せにした。腹の下にマクラを押し込み夏子の双臀を突き出させる。英次の狙うところは決っているのだ。

「坊っちゃん、いつでもいいですぜ」

会田の声に、英次はニンマリとうなづいた。夏子に歩み寄り、上を向いた白い双臀に手を這わせる。

「も、もう、かんにんして……」

夏子はすすり泣く声で言った。もう、抵抗する気力も体力もない。

「あまったれるな、へへへ……」

英次はバシッと双臀をはたいた。夏子の太腿を大きく開かせる。ほとんど抵抗はなかった。更に臀丘を割り開いて、アヌスを剥き出しにする。

そこへ英次は、荒々しく張型を突きたてた。生ゴムで出来たイボイボのついたグロテスクな張型である。真中



がくりぬかれていて、そこから浣腸も出来る仕組みになっている。

「あ、ああッ……もう、そこはかんにんして……」

夏子は顔をのけぞらせ、シートを手で握りしめた。歯をくいしばり、うッ、うッとうめき声をあげる。ジワッ、ジワッと張型がもぐり込んでくる。

「か、かんにんして……お尻が、お尻がこわれちゃう……」

「こわれやしねえよ、奥さん。なにしろ、これだけいい尻をしてるんだ」

英次はあざ笑った。長い間、拡張を強いられた夏子のアヌスは、思ったよりもスムーズに張型を受け入れた。夏子はフトンに顔をうずめて、くぐもった泣き声をあげている。

「ああ……どうして、どうして、お尻ばかりを……」

「ガタガタ言うんじゃねえよ」

英次は夏子の手首をつかんで、ベッドから引きずりおろそうとした。どこかへ連れて行く気なのだ。

夏子はうずくまったまま、からだを硬くして英次を見た。

「ど、どうする気なの？……もう、かんにんして……」

「さっさと立てよ」

英次はいきなり、夏子のアヌスに埋め込んだままの張

型をゆさぶった。

ひいッと弾かれたように、夏子は身を起こした。その手を英次が引く。

「さあ、くるんだよ、へへへ」

「ど、どこへ行くと言うの……」

二、三步足をすすめた夏子は、あわててからだをこわばらせた。歩くと張型が微妙にからだの中で、位置を変えろのだ。

「うむむ……うッ、いや……」

夏子は唇をかみしめて、うめいた。

張型のイボイボが、容赦なく繊細な肉壁にこすれ、うごめく。それはおぞましく、羞かしい感触だった。

自然とからだの前かがみになり、夏子は英次の腕にすがった。

「こいと言うのがわからねえのか」

夏子の腰に手をまわして、英次は強引に歩かせた。ふらつきながらの、よちよち歩きである。歩くたびに、アヌスが火のように熱くなり、その熱がからだ中にひろがっていく。夏子は耐えきれずに、立ちどまった。

「うむむ……こんな、こんなことって……どこへ行くの？……うるせえ。さっさと歩かねえか、牝のくせしやがってよう」

少しでも足をとめると、英次は容赦なく張型で突き上げ、夏子を歩かせる。

玄関までひっぱってこられた夏子は、とたんに顔色を変えた。

外へ連れ出される……夏子にはわかにおびえ、からだをすくめた。

「い、いやあッ……外でなんて、いや、いやよう」

「フッフ、このムッチリしたからだを、皆んなにも見せてやるんだ。この俺に尻の穴を犯られるところをよう」

夏子が泣き叫ぶのもかまわず、英次はズルズルと引きずった。

「英次坊っちゃん、どこへ行く気で？」

会田があわてて、英次の前へ立ちはだかった。英次は何をしでかすかわからない。欲望のおもむくままに突っ走る飢えた野獣と同じである。それだけに、会田としても眼が離せないのだ。

「どこへ行くこうと、俺の勝手じゃねえか」

英次の眼は、死んだ魚の眼のように不気味な色で濁っている。こんな眼をしている時はきまってとんでもない事を考えているのだ。

「坊っちゃん。外へ出すわけにはいきませんぜ」

一糸まとわぬ全裸の夏子を白昼外へ連れ出せば、どんな騒ぎになるかはわかりきっている。

「どけよ、会田。俺の邪魔をするんじゃないやねえ。俺はこの牝を引きまわしてえんだよ」

「いくら坊っちゃんでも、それだけはきくわけにはいき

ませんぜ」

「うるせえ。どけってんだよ」

発作をおこしたように、英次はあばれ出した。己れの欲望以外は頭にない。

「坊っちゃん。ここで楽しむんです。昼に女をスッ裸で連れ出すなんて、ムチャですぜ」

会田は英次をなだめるように、抱き止めた。その声は低く、ドスがきいて迫力がある。その上、すごい力だ。さすがの英次も、会田にあっけはとうしようもない。

わめきちらしていた英次もやがておとなしくなった。

「ちくしょう……わかったよ、会田。ここで楽しみやいんだろ……」

英次は渋々従った。それでもまだ不満らしく、ブツブツと口の中でつぶやく。英次にしてみれば、おもり役の会田と堂島は、うるさい存在でしかなかった。

玉子とソーセージ

会田のおかげで、夏子は救われた。救われたといっても、全裸で外へ連れ出されなかっただけで、羞かしめが終るわけではない。

夏子は再び二階の寝室に連れもどされた。途中、台所に寄って玉子二個と、フランクフルト・ソーセージ、バナナを持たされた。



「こ、こんなもの……どうするつもりなの」

「フッフ、いたずらするに決まってるじゃねえか」

英次はせせら笑った。

ベッドの上にあお向けに横にされる。

「膝を立てておっぴろげな」

「いや……」

夏子はふるえるからだを硬直させた。だが、逃げようとも、さからおうともしない。

英次は無理やり膝を立てさせると、左右へ割り開いた。

何もかもが剥き出しになる。妖花ともいえる女の部分があらわにさらけ出され、その下に張型で貫かれたアヌスまでがはっきりと見える。

英次の指が、肉の合わせ目に這った。花卉をつきむようにして、左右へくつろげる。アヌスにしか興味を示さない英次にしては、めずらしい事だった。

「あ、ああ……」

夏子は声をあげて、身をよじった。羞恥の嵐に責めさ
いなまされて、からだ中が総毛立った。

「か、かんにんして……も、もう、いや」

「尻の穴ばかり責められて、ここがさびしいんじゃないのか」

英次は玉子をひとつ取り上げた。サーモンピンクの肉襷もあらわな女の最奥に、玉子が冷たく押しつけられる。

「う、ううッ……」

夏子は息をつめた。

（玉子を、い、いれられる……）

張り裂けるような感じが、襲ってきた。夏子の狼狽をよそに、玉子はジワジワと沈んでくる。

「あ、ああ、かんにんして……そ、そんなものを入れないで……」

夏子は全身をこわばらせて、泣き出した。両手で顔をおおい、絶息するよううめき声の入り混じった泣き声である。

「う、うむむッ……大きすぎるわッ……」

「冗談言うなよ。ガキを生んでるんだ。これ位楽にのみこめるはずだぜ」

「うむむ……う、うッきつい、きついわ」

夏子は耐えきれず、声をあげて泣きじゃくった。サーモンピンクの肉襷は、チューブがのびるようにジワジワと拡張された。めり込んでくる……そんな表現がぴったりのである。

「へへへ、うめえだろう」

英次は残酷にねじ込んでいく。

やがて、玉子の一番太い部分がめり込むと、まるで玉子をのみ込んだ蛇が口を閉じるように、肉襷がヒクヒクとすぼまり出す。英次は指先で更に押し込んだ。

「うッ、うむむ……いやあ……」

「いやじゃねえよ。本当はうれしくせによう、ほれほれ」

英次はへらへらと笑った。

すっかり玉子が見えなくなるまで、押し込んでしまう。指を埋めこんで、玉子がのみこまれている事を確かめる。英次はまた、へらへらと笑った。

顔をおおっている手をどけて、英次は意地悪く夏子の顔をのぞき込んだ。

「うれし泣きかい、フッフ……」

羞恥と屈辱、哀しみにうちひしがれた夏子の泣き顔だった。

「へへへ、今度は尻だ」

「お、お尻は、もう、かんにんして……こ、これ以上、されたらこわれちゃう……」

「こわれたって、かまやしねえよ、へへへ」

英次は意地悪く言った。夏子を外へ連れ出せなかった不満が内にこもって、嗜虐性が一層色濃く漂っている。

「よっん這いになりな。尻をおっ立てるんだ」

「ああ……」

夏子は泣きながら、ベッドの上でよっん這いになった。また、おぞましい排泄器官にいたずらされると思うと、恐ろしさと屈辱に夏子は戦慄した。

「もっと膝を開いて、尻をおっ立てるんだ」

英次は冷たく命令する。少しでも夏子がとまどいを見せようものなら、英次は容赦なく張型でえぐった。

「み、みじめだわ……」

夏子は膝を開いて、双臀を高くもたげた。

「おもしれえ。もっとみじめにしてやる、フッフ、何かに入れてやるか……」

張型を引き抜いた英次が、まず選んだものはバナナだった。

「いや、そんなもの……」

「へへへ、尻の穴は欲しそうに、パツクリと口を開いてるぜ」

英次は皮を剥くと、バナナの先をゆっくりと夏子のアヌスに這わせた。

ひいッと声をあげて、避けようと腰を左右ヘクリッ、クリッとよじる。だが、逃げ出そうとはしない。もう、そんな気力も、体力もないのである。

「い、いやあ……お尻は、もう、いや……本当に、おかしくなるわ……」

「へへへ、おかしくしてやるぜ」

英次は、バナナの先をジワジワと押しつけた。せっか

くのバナナを潰してしまっではおもしろくない。形を潰さないように、少しずつ貫いていく。めくれあがったように剥き出ている繊細な肉壁が、内側へめり込むようにうごめきながら、バナナを受け入れていく。

「う、ううッ……入れないで……」

夏子はシートにかみついて、うめいた。

バナナの先が三分の一ほど、もぐり込むと、夏子は耐えきれなくなつて、シートをかみしばったまま、狂ったようにかぶりをふり出した。その瞬間、バナナはかみ切られ、スルッとして夏子の中へ消えてしまった。

「ひッ……だめえ……」

けたたましい泣き声をあげて、夏子は顔をのけぞらせた。まったくの偶然だった。夏子がバナナの侵入を拒ばもうと、活約筋の力をふりしぼった為、バナナを切り取る結果となつたのだ。

喜こんだのは英次である。

「俺が命令する前に切り落とすとは……へへへ、たいした尻の穴だぜ。その調子で、どんどん切るんだ」

「か、かんにんして……」

「あまえるな。バナナは何本でもあるんだからな。言う通りにしなきゃ、全部入れるぜ」

英次はおもしろがって、グイグイねじ込むのだった。いくらおぞましいと思っても、夏子は本能的に侵入を拒もうと、すぼめてしまうのだ。そのたびに、切り取ら

れたバナナが、夏子の奥へもぐり込んでしまう。

「も、もう、いや……いや……」

夏子はからだ中が真赤に灼けた。その灼けた血が、今にも毛穴から噴き出しそうであった。

「も、もう、いやあ……お尻が、お尻がこわれちゃうッ……」

夏子は子供みたいに、声をあげて泣きじゃくるのだった。

尻責め三種の神器

「う、ううッ……も、もう、やめて……」

夏子はあえぐように、うめいた。もう、腹の底まで、切り取ったバナナでギツチリと詰め込まれた感じである。

会田にとめられて、英次はようやくやめた。そうでなければ、いくらでもバナナを押し込もうとしただろう。

「坊っちゃん、女をガタガタにしちいますぜ。少しは休ませねえと……」

会田はあきれて言った。疲れることも、あくことも知らぬ英次の欲望である。

「俺の好きなようにやるだけよ、へへへ、ガタガタになりゃ、別の女をさがすだけさ。もったも、これだけいい尻をした女は、めったにいないもんじゃねえ。俺だってガタガタにしたくはねえよ」

英次はへらへらと笑いながら言った。本心は、夏子をガタガタにしてもいいと思っているのだ。いや、ガタガタになるまで責め抜いてみたいと思っているのだ。

「へへへ……バナナの次は、ソーセージで可愛いがってやるぜ」

英次は、フランクフルト・ソーセージを取るように会田に命じた。長さは三十センチ近くもある太いものだった。

「こいつを尻に使う気ですか、坊っちゃん」

「そうだ。早くよこせっ」

「前ならともかく、尻には……あんまりムチャしないで下さいよ、坊っちゃん」

「さっさとよこせよ。俺のよりちよっぴり太いだけじゃねえか」

会田は、渋々とソーセージを渡した。アススをきたえあげた商売女ならともかく、夏子には明らかに太すぎる。

「ひいッ……」

それを眼にするや、夏子は泣き顔をひきつらせ、恐怖に全身を凍りつかせた。

「そんな……そんな……お、おおきすぎるわッ、そんな大きなでなんて……」

「大きすぎるから、おもしろえんだよ」

「か、かんにんして……そんなの、こわい、こわいわッ」
夏子のからだは、ブルブルとふるえ出した。長いだけ

に、実際よりずっと太く見える。英次に貫かれるだけでも、張り裂けそうなのだ。それを英次よりも太いソーセージで……恐怖の色がみなぎった夏子の顔が、おびえおののく。

「裂けちゃうわ……こわい、こわいわ」

「もっとこわがりな、フッフ、そのおびえた顔が、たまんねえんだよ」

英次はバシッと夏子の双臀をはたいた。

恐怖にすくんだような双臀を押えつけると、英次はソーセージの先端を夏子のアヌスに押しつけた。むごく埋め込みにかかる。

「ひッ、ひいいッ……」

夏子は絶叫をはりあげた。英次はバナナの断片をのみ込んだままの夏子のアヌスに、更に長く太いソーセージをのみこませようとしている。

「ひいッ、ひッ……いやあ……」

「あばれるんじやねえよ」

一度で押し入れるのは、とても無理だった。英次は何度も勢いをつけて押しつけ、ゆさぶり、ねじって押し込もうとした。そのたびに、ソーセージの先が、ジワジワと少しずつめり込んでいく。

「い、いやあッ……ひいいッ、ひッ……」

「尻の穴の力を抜くんだ。ほれ、ほうれッ」

「ひいいッ……ひいいッ、ひッ、痛いわ、痛いッ……」

激痛が走った。逃げようとずりあがっても、すぐに英次の手で引きもどされてしまう。

「力を抜けてんだよッ」

英次がどなった。夏子が侵入をこぼもうとからだをこわばらせる為、思うように入っていない。英次はまるで、とりつかれたように彼々に力を加え、押し込んだ。

「ひいいッ、ひッ……痛いッ……」

「痛いじゃねえ。もう少しなんだ、へへへ、それ、それッ」

夏子の絶叫を楽しみながら、押し込んでいこうとソーセージをねじる。やがて、夏子の繊細な肉壁は、いっばいまで拡張され、ソーセージの先がもぐり込んだ。ソーセージを口いっぱい、裂けんばかりにのみこんでいる風情だった。

「き、きつい……大きすぎるわ、裂けるう」

夏子は息も絶えだえにうめいた。もう、悲鳴をあげるのも苦しい様子である。美しい顔は、油汗さえ浮べて苦痛にゆがみ、両手でシーツをかきむしっている。

「どうでえ、会田。とうとう入っちゃったぜ、へへへ」

会田の顔を見て、英次は得意気に笑った。

尻尾みたいにブラブラとたれ下がったソーセージをつかむと、英次は更に深く押し込み始めた。

「ひいッ……も、もう、入れないでッ」

「へへへ、もっと奥まで入れてやるぜ」

夏子は泣き叫んだ。奥にひしめきあっているバナナを、押し込むようにして、ソーセージがズブツ、ズブツと押し入ってくるのだ。

「ひいッ……ひッ、ひいッ……」

まるで生きたまま解剖されるような、地獄の苦しみだ。内臓の地獄だった。

「ひいッ……殺して、いっそ、殺してッ」

耐える限界をこえた苦痛に、夏子の眼の前が暗くなってきた。やがて、夏子はグッタリとベットの上にくずれおちた。意識を失なったその顔は死人のようであった。

「ちくしよう。気を失なうのは、まだ早いんだよ」

英次は腹立たしげに叫んだ。ソーセージはまだ、三分の一程しか埋めこんでいないのだ。かと言って、人形のような夏子を責め続けても、おもしろくはない。

「くそッ、眼をさまさせてやる」

英次はズボンの皮ベルトを抜いた。ムチ打とうと言うのだ。

皮ベルトをふりあげた英次を、会田はうしろからはがいくめにしてとめた。

「そいつはいけませんぜ、坊っちゃん」

「何をしやがる、会田」

「亭主に気づかれるような傷はつけない約束ですぜ」

会田は皮ベルトを取り上げた。

英次のムチ打ちは強烈なのだ。一度ムチ打ち始めると、

狂ったようになって、双臀が真赤になるまで打ちけるのが常だった。その傷跡を見れば、亭主が黙っているわけがない。

そんな事になれば、亭主の口まで封じなければならなくなる。それは組長に厳禁されているのだ。

「騒ぎを大きくすると、あっしらが組長にどやされますんで……坊っちゃん」

「うるせえ。オヤジが何んだってんだ。邪魔ばかりしやがって、くそッ」

英次はあばれ出した。自分の欲望を邪魔されると、発作を起こしたようにあばれ出す英次だった。

今度は、いっこうにおさまる気配はなかった。

「離せッ、手を離しやがれッ……ちくしよう、ちくしようッ」

もう、手がつけられなかった。時間的にもそろそろ覚醒剤がきれて、禁断症状をおこすころだ。引きあげ時だと、会田は思った。

「坊っちゃん、今日はこれぐらいにして……また明日、続ければいいじゃないですか」

すみません……そう言うなり、会田は英次の腹にパンチを入れた。ウラッとうめいて、英次は気を失なった。その英次を肩にかつぐと、会田は寝室をあとにするのだった。ベッドの上には、まだ、夏子がグッタリと気を失っていた。こうして二日目が終わった。

ガリバー国の マゾヒスト

有藤浩樹

一口に高校生といっても、最近では、小学生のように幼く見える女の子もいれば、まるで色気盛りのOLといった感じの女の子など、いろいろなタイプの子がいます。私が教えている女子高校は、東京でもベスト5に入るぐらいの名門校で、お嬢さん学校として良家の子女がたくさん通学しています。私は、体育だけを教えているのですが、近頃の高校生は体格が大きくて、かこまれていると圧倒されてしまいます。殊に三年生にもなると、一六〇センチ以上の背の高さの子はザラにいて、私などは背の低いほうですから、ついコンプレックスを抱いてしまいます。川中由加里はC組の中でも一番大柄な女の子で、一七二センチもあります。由加里は大柄でいながら、顔はまだどこかあどけない面を残しています。美人にありがちの冷淡なところがあって、クラスの中でも一番目立つ女の子です。ブルーマー姿の由加里は颯爽としていて、紺色のパンツから突きだした太腿がなんとも艶っぽくて、白いスポーツ・シューズが太腿のピンクの肉の色を余計にきわだたせています。由加里はなんでもさる貿易会社の社長の一人娘とかで、かなりわがままに育ったらしく、横暴さがときどき現われます。負けん気が強くて

なんでも一番でないと気がすまないようなところがあるのです。ソフトボールをやったときのことです。クラスを四つに分けて試合をさせたのですが、由加里が大きなフライを打ち、あわやランニング・ホームランとなるところだったので、外野からの好返球でホーム寸前でタッチアウトになったのです。私は、アウトを宣告したのですが、由加里はセーフだといいい張って私のいうことを聞きません。猛然と怒りだして、ふてくされたかと思うと私の体をこ突いたのです。私がよろけると、それを見ていたほかの女の子たちがケラケラ笑いました。私は膝まずいて、由加里に謝りたい衝動に駆られました。許してください、私のジャッジが間違っていました。本当はセーフなのです、と。由加里の猛々しい顔を見ていると、なぜだか体がゾクゾクと震えてきて、自分の体を由加里のその長い脚で蹴って欲しいときえ思いました。教える立場の私が、由加里に痛めつけられたいのです。いつも居丈高になって教壇に立つ私が女子高生になぶられたいのです。私は十年以上も体育の教師をしていますが、女子高校に赴任するまでは共学の中学校にいました。初めて三十数人ものブルーマー姿の女子高生に囲まれたときは、もう胸が高鳴ってしまい、自分で

もなにをしているのか判らなくなるほどでした。そのとき、私は自分の中に女から、それ自分よりずっと若い女の子からいじめられたいという欲望があるのを知ったのです。私は昔から女性を崇拜することに憧れを抱いていました。殊に十代の女の子に対する憧れは強烈なものがあつた、思春期の女性ほどこの世に偉いものはないとさえ思っているのです。ですから、私は彼女たちを大事にしてあげたいのです。そして、彼女たちから愛の囁きを授かりたいのです。一度、私は由加里に匿名の手紙を出したことがあります。由加里を思うが故の次のような内容の手紙です。

——由加里様、貴女の素晴らしい黄金のような足に私は接吻したいのです。こんなことを書くとき、きつと貴女はお笑いになるかもしれませんが、私は真剣なのです。貴女は私の女王様です。女王様は奴隷に対して何をしてくださつてもよいのです。何を命令してもよいのです。私は喜んで女王様の命令をおききたいします。どんなことでもいたします。女王様が、私の鼻汁を吸いなさい、と申されれば私は唇で女王様の鼻汁を吸わせていただき、その尊いエメラルドの液体で私の口を潤わせていただきます。そして、女王様が、私のお尻の穴を舐めなさい、と命令してくだされば

たとへ黄金色の固体が少し残つていようと、私は喜んで女王様の気高いお尻の穴を綺麗に舐めてさしあげます。由加里様、私を奴隷にしてください。そうして、思うように私を使つてください。女王様は私だけの尊いお方なのです——

高貴な女王様へ

忠実な下僕より

手紙のことはすぐにクラス中に知れわたりました。もちろん、私が書いたことは誰も知りません。本人の由加里にさえ絶対にわからないでしょう。それでもいいのです。由加里に手紙が届いたということ、更にそれがクラス中に知れわたつたということ、それだけで私は充分なのです。クラスの女の子たちはその手紙を回し読みして口々に、変態よ、コレ、とか、ワーツ、私も女王様になりたいわ、などとクラス中は大騒ぎになったのです。私はそんな騒々しさの中で、独り悦に入つてウットリとしていたのでした。



夢を見ました。とても淋しい夢を見ました。あの由加里がほかの男を連れてホテルへ入つたのです。そこで由加里は男と愛しあつたのです。あの女王様がそんなことをするなんて私には信じられません。私はその男に強い嫉

妬を覚えました。女王様は、その長くて綺麗な脚を広げて、気高くて尊い、男などが触れてはならない花園を開いて醜い男のシンボルを迎え入れたのです。いけません、女王様、そんな醜く汚い物と交つてはなりません、私は夢の中で必死に叫んでいました。私が二人の間へ入つて、交っている体を引き離そうとすると、女王様がいきました。おまえ、そこに坐つていなさい。そして、私の悦ぶ姿を見ていなさい。おまえが見ていくと、女王様の私は嬉しい、と。ですから、私はいわれた通りにそこに膝まづいて女王様の愛の交歓を見ていたのです。実にやるせない思いで、私は女王様の喜びする姿を見ていたのです。女王様は髪を振り乱してあられもなく激しい情欲の炎を燃えたたせておりました。私は思わず顔をそむけました。見ていられなかったのです。私の女王様がそんなふうになんて弄られている姿を正視できなかったのです。私は思わず男を突きとばしました。女王様の下僕として、女王様をいたづっている男がたまらなく憎かつたのです。俯伏せて女王様と交つていた男は私の腕に突きとばされ、ドタツと鈍い音をさせて仰向けに転がりました。私は男の顔を見て思わず自分の目を疑いました。なんと、その男は私にそっくりではありません

んか。そうなのです。その男は私自身だったのです。私の頭は混乱しました。私は自分自身を責めなければなりません。女王様に謝罪しなければなりません。女王様、お許しください、私は奴隷の分際で女王様と交ってしまいました。どうか私の不埒をお許しください。私は不意をつかれて脚を開いたままの女王様の横に膝まづいて深々と頭をさげました。おだまり、おまえは二重の罪を犯したのだよ。一つは私の愉しみを妨げたこと。もう一つはおまえが私と交ったこと。これは、おまえ、大変な罪なのだよ。女王様にそう叱られて、私の胸は二重の罪を犯した痛苦で今にも張り裂けそうでした。私はすっかり困惑した気持ちのまま、やりきれなくただ頭をさげているばかりです。大きな罪を償うためには、さっきおまえが妨げた悦楽を、さっき以上に取り戻すことが必要だ。それを、おまえがやりなさい、私を悦ばせなさい。女王様はキッと眼を見開いて、そう命令するのです。その眼は私に対する憎悪で赤く炎のように燃えています。このまま、ずっと精力が尽き果てるまで、私を悦ばすのだよ。私は恐れおののきました。女王様にそんなことをしてはいけない、私ごときが女王様と交わるなんて。聖なる女王様の肉の中へ、この汚く醜い私の肉が入り込む

なんて……。しかし、さっき交情を共にしていたのは、この私ではないか、私は奴隷の分際をわきまえず、女王様と交っていたではないか……。私は悔みしました。煩悶しつづけていた。すると、女王様がカッと口を大きく開いて、おまえがこの私にできることといったら私を悦ばせることしかないのだよ。何をグスグスしている、さ、早くするんだ。女王様の怒りは大変なものでした。私はおそろおそろ女王様の豊満な肉体に近づくと、聖なる花園に自分の汚いシンボルを当てがいました。けれども、私は恐れ多いその行為に、醜いシンボルを怒張させることができなかったのです。女王様、こともあろうに私なんぞと……お許しください。私は夢中になって胸の中できながらなんとか委縮しているシンボルを大きくさせようと焦りました。しかし、もったいないことと思えば思うほど、焦れば焦るほど、委縮したままシンボルは怒張しないのです。由加里様——ッ!!

★

の教室へ行きました。教室の電灯をつけるのはまずいと思い、懐中電灯の明りだけを頼りに、由加里の机を探したのです。汗だくなつてやつと探しあてたのです。机の横にナイフで、ユカリ、と彫ってあります。由加里がそのふくよかな臀部を乗せるであろう椅子が、可愛いらしい花模様の小さな座蒲団でくるまれています。私は夢中になって座蒲団に顔を伏せました。甘酸っぱいような妙な匂いが鼻をつきます。しばらくウツトリと眼をつむり由加里の体臭がしみこんでいるであろう座蒲団に鼻を押しつけたまま、陶酔感にわれを忘れていました。机の下に汚れたスポーツ・シューズが置いてあります。高鳴る胸を抑えようもなく、私はシューズの片方を手にとると匂いを嗅ぎました。ツーンと脂と汗が混った匂いが鼻をつき、私は思わず舌を出してシューズの中を舐めました。私の女王様……。何回となくそう胸の中で呟きながら、由加里のシューズの中を舐めていたのです。きつと誰かが見ていたら私のそんな姿に気絶することでしょう。由加里本人に直接できない分だけ余計に感情は募るばかりです。ああ、私は一度でいいから由加里にいいてもらいたい、激しく私をなぶって欲しい。いたぶって欲しい。次から次へと感情が押し寄せてきて、私

机の横にへたへたと倒れこんでしまいました。



誰か、私のブルーマーを知らない？ ヤー
ネー、どこへ行ったのかしら。由加里はきつ
とそんなふうについてあわてふためている
に違いありません、私は昨晚、というよりも
今日の深夜、由加里の机の引き出しからブル
ーマーを盗んだのです。どうしても、女王様
がはいている、体臭のしみこんだブルーマー
が欲しかったのです。由加里には申し訳ない
気持ちでいっぱいなのですが、どうしようもな
く欲しかったのです。案の定、体育の時間
にガヤガヤと騒いでいるのが聞えました。何を
騒いでいるんだ。私が聞くと、由加里が怒っ
たような顔をして、ツンツンしながら、あの
先生、ブルーマーがないんです。机の中に入
れておいたのに……。といって焦だった様子
で机の引き出しをバタバタと開閉しているの
です。今さらなものはない。先生
のところは代わりのショート・パンツがある
から、それをはきなさい。そういうと、私は
前もって用意しておいた新品のショート・パ
ンツを取りに、由加里を連れて宿直室まで行
ったのです。廊下を歩きながら、私は内心ゾ
クゾクと胸が躍っていたのです。このまま二

人で未知の世界へ行ってみよう。そこで二人
して暮してみたい。女王様と奴隷となって、
サディストとマゾヒストが二人だけの樂園を
作るのだ。歩きながら、由加里のほうを時折
チラッと盗み見て、そんな夢のような思いに
ふけるのでした。しかし、現実とは無情なも
ので、廊下は未知の樂園へはつづいていませ
ん。右へ折れて、そこには小汚い宿直室があ
るばかりです。さも事務的に白いショート・
パンツを手渡すと、由加里はその大きく艶っ
ぽい眼を片方だけパチッとまたたかせた。そ
して、まるで大人びたように微笑するのだっ
た。私は二十歳以上も年令の離れた由加里に
まるで子供扱いされたように思った。それが
私をたまらなくマゾヒスティックな気分にな
せるのだ。やけに大人びた十七歳の少女は、
まるで私を小馬鹿にしたような眼で見ている。
今にも、先生って好きねエ、とでもいいたい
げな顔をして私を見ている。しかし、私は違
う。確かにブルーマーは私が盗んだ。けれど
も、それは、別にオナニーするためのもので
もなんでもない。確かにブルーマーの汚れた
部分を舐めはする。しかし、それは由加里を
サディストに見たてての、マゾヒストのせめ
てももの欲求不満解消策なのです。小心の私が
そんなことを由加里を前にして告白すること

はできない。由加里だってそんな話をもし聞
いたならば、びっくり仰天することだろう。
ブルーマーは、そんな夢想においての、私の
唯一の楽しみ的小道具なのです。ですから、
汚れたブルーマーを鼻に押し当てていると、
由加里に屈辱感を味あわされているようで、
とても快いのです。由加里が私の顔に跨がっ
ているような錯覚にとらわれるのです。紺の
ブルーマーが並んだ中に、由加里だけのショ
ート・パンツですから、とても目立って見え
るのです。そんな由加里を眺めながら、私は
またしても深く遠い夢に沈んでいくのでし
た。眼の前の由加里の肉体がグルグルとプロ
ペラののように回って、それが段々に速くなっ
ていき、白いショート・パンツから突き出た
長い脚が私の眼を回すのです。由加里、その
長い脚で私を踏んでおくれ。私の汚く醜いこ
の顔を踏んで踏んでためつけておくれ。あ
なたは私の唯一人の女王様だ。私はその聖な
る体を見たい。そうして、あなたから可愛
がられたいのです。陶酔感で何も見えない私
の頭の中に、ただ由加里の猛々しい姿だけが、
ポーツと浮かび上がっては消え、消えては浮
かび上がるのです。由加里の肉体が、ガリバ
ーのように巨大にふくれあがり、それが私の
そばに来たかと思うと、大きな指で私をつま

んだのです。天にも昇る気持ちとは、こういうことを言うのでしょうか。指でつままれて、上に持ち上げられると、フワッとした、妙に体が浮いた気持ちになり、私はいつしかガリバー旅行記の小人のように、情けない姿になっていたのです。由加里の手の平の中で、さんさんにもてあそばれている私なのです。指ではじかれると、みじめにも転がって今にも手の平から落ちそうになるのです。手の平の上で仰向けに転がされて、上を見あげると、大仏さまのように大きな顔の由加里が笑っています。その笑いは、あきらかに私に対するさげすみの笑いなのです。おまえは、本当に可愛いねえ、私の手の平の中で、私の思う通りに動く、おまえは私の人間ペットだ、私の動く人形だ。女王様はそう言いながら、また手の平の中で、コロコロと私を転がすのです。転がされて、私は眼がくるくる回り、意識がかすんでしました。由加里が大きな顔を近づけて、フーッと大風のような息を吐きました。軽い私の体は簡単に吹き飛ばされて、落ちそうになると、また手の平で受けとめられます。やめて下さい、女王様、お願いです。私は下に落ちて死んでしまいます。私は必死になって助けを乞うのですが、そんな私の気持ちを、少しも意に介さないかのように、私

に対する虐待をやめようとはしません。それどころか、フッフッフ、おまえは可愛いねえ。可愛いから決して殺しはしない、そのかわり、生かしてもいいんだよ、と笑いながら言うのです。そうして、私を思いっきり上へ投げたのです。私の体はくるくる回転しながら、弧を描いて飛んでいき、猛烈なスピードで落下したのです。ズシーン、と大きな音を立てて落ち、私はしばらく意識を失っていたようです。気がつくと、眼の前に由加里が

立っていました。他の連中もケラケラと笑いながら私を見えています。私は跳び箱の模範を見せようとして、誤って脚を引っかけ、頭からつんのめったのです。由加里のショート・パンツが鮮やかに私の眼に入ってきて、私は意識がよみがえったのです。由加里は、私を小馬鹿にしたように、眼をつり上げて笑っていました。




~~~~~女王様の馬~~~~~



水戸・MM氏蔵



# S M 半世紀

町 陽一

一体SMに対する興味は、先天的なものであろうか、後天的なものであろうか。すなわち、誰からも教えられないことなしにその気になるのか、それとも人や印刷物に教えられて、目覚めてくるのか。

女性の場合、特に他人に憶えさせられるのが大半だと聞くが、男性の場合はどうなのであろうか。

私の場合、幼少の頃からその気があったとなれば、先天的なものと考えざるを得ないだろう。

勿論、その頃はSMなどという言葉もなかったし、サディズム、マゾヒズムという言葉は、「性の変態行為」としてしか、知られていなかった。

私が初めて、女性を縛ったのは、小学校六年の時であった。

同じクラスに私と仲の良い可愛いらしい少女がいた。

当時は今ほど成長が早くなく、小学

校六年でも、まだ「女」という感じはなかった。

今にして思えば女になっていない少女という感じでもあったろうか。

その子を放課後の教室で、椅子に後手に縛りつけたのだ。

彼女も若干の抵抗は見せるものの、決して本心から嫌がっているのではないことは、世間知らずの私でもよく判った。

プレイとはいえない、単にそれだけの遊びであったが、後年、本格的なプレイをするようになって、その時の出来事は、いまだにはっきりと思い出すことができるのだ。

もし、今、彼女に再会し、その時と同じ気持ちであれば、もっともっと楽しい本格的なプレイができるのだが……むしろ想い出の中に留めておくだけの方が良いのかもしれない。

このプレイと相前後して、私は二人の少女を縛ることができた。

一人は隣家の同級生。色白で丸顔の愛らしい子だ。

この子とは家人の目を盗んで、庭の片隅でお互いに縛り合ったりしたものだ。

胸に縄をかけた時、ふくらみかけた小さな胸が痛いといわれて、不思議に思ったこともあった。

「縛るっていうのと、括るっていうのと、どっちが良いかな」

なんて会話をかわしたのもこの時だ。この二人の少女とは勿論、着衣のままのプレイだが、向かいに住む年下の少女とは、今にして思えば、随分思い切った事をしたと思うのだが、全裸のプレイをしている。

今流行の兆を見せているロリータ・コンプレックスの、まさに走りのようなものだ。

胸も腰も、全てが少女のまままだ。私にお兄ちゃんといって、よくなついてくれた子だが、一人っ子の私は家人の留守の時など、表へ遊びに出て来た彼女を呼び込んで、裸にし、後手に縛ってみたりしたのだ。

SMといっても、全く知識の無かつ



たその頃の私だ。

縛るのも後手縛りだけ。縄も無かったので、荷造り用の細紐を使っていた。他に鞭打ちという知識もあったが、さすがに痛々しくて、実行はできなかった。

少女ヌード全盛の感のする昨今だが、少女SMというのもあるのだろうか。

まだ胸の充分ふくらんでいない、かといってまるっきりの幼女でない、過渡期にある少女のSM写真。

もっとも、私も必死になって探したわけではないので、皆無ということはいえないが、今のところ私の眼にとまっていない。

その幼女とのプレイの時、当時自分でDPEができなかったにしろ、せめてフィルムにだけ影像を残しておく努力をしなかった事が、大いに悔まれる。

そうすれば後日、貴重な写真が残せたかもしれないに……。

この幼女とのプレイの後、実際のプレイとは十年近く遠去かってしまう。

その間、高校時代に女生徒のグループが、一人の女生徒を後手に縛り（手首だけ）、そんな彼女らの階段を降り

てくるのを見て、胸を高鳴らせたり、好きな女の子としゃべっているうちに、彼女の半袖の中に、自然の毛を見て顔を赤らめたり、思春期の今にして思えば、可愛いらしい思い出は残っている。

他人を縛り、苛める、もしくは自分が受身になる、この行為が人道に反した行為であるという罪悪感、常に心の片隅に持っていた。

これは私だけの悪癖だ。だから他人には決して知られてはいけない。

「縛る」「括る」「打つ」「拷問」などという言葉は、私の口から出るときごちなく聞こえたし、めったに口にすることもなかった。

できるだけ他の言葉に言い変えるか、もしくはそのことにふれないでおこうと努力していたのだ。

それだけに大学一年の時、先輩の下宿部屋でSM誌を見た時、私は安堵とショックを受けた。

安堵とは、こんな本が出版されているということ、買う人がいるということだ。という事は、私一人では無いのだという気持ち。ショックの方は、グ

ラビア頁の絵が、私の心の奥底にあるものまで、ゆり動かすようなものだったからだ。

これは「風俗草紙」という、今では昔からのマニアの、ごく一部しか知らないのではないかと思われる本だった。写真は一枚もなく、写真ようのモノクロの絵が三枚。今でもはっきり憶えている。

空高く、木の上に大の字にりつけられた裸女。近くには鳥が飛び、重苦しい空が逃れようのない美女の運命を暗示している。

二枚目は、後手に縛られ、胸の所から上に吊られている裸女。股間に僅かな布が見える他は、裸身をおおう物は肌を喰い込む縄目だけ。

後手縛りの吊りを試みた写真はよく見かけるが、このように胸から吊っているのは、まだ見た事がない。

三枚目は、廃屋のような荒れた部屋に、裸女が柱を背に後手縛り。立ったまま縛られているが、片脚は思い切り上から吊られている。膝を吊られている為、よく伸びたふくらはぎは、力無く垂れている。股間は手前にある横木



で隠されている。

この三人の美女達が見せる、苦痛と悲しみの表情は、当時のSM誌の傾向をよく表わしていた。

SMは矢張り、人生の裏街に住むものだった。

今のようにならかに、中には裸で縛られながら笑っているような絵や写真は、皆無だった。

苦痛、羞恥、あきらめ、抵抗……、自分の意志に反して自由を奪われ、責められる世界がそこにあった。

だからこそ当時は、SMが陽の目を見る事もなかったであろう。

この本に出会ってから、私の古本屋めぐりが始まった。

近頃の古本屋には、新刊のSM誌も多く見られるが、当時は一部の古本屋に、極く限られた冊数しか見られなかった。

まだ学生だった私は、できるだけ店の主人に顔を合わせないようにして買うのだが、それでも店を出て来た時には、びっしょり汗をかいているのが常だった。

「風俗草紙」も数が少なくなった。い

つもまわる範囲の店には、見つからなくなかった。

そんな時見つけたのが「奇譚クラブ」だった。

勿論、それがSM誌と知る由もない。何となく、もしやという気持ちで手に取って見たところ、目的のものだったというわけだ。

「風俗草紙」は、間もなく消えていった。そして、私と「奇譚クラブ」との長い付き合いが始まった。少し遅れて「風俗奇譚」もそれに加わった。

私が本格的ともいえるようなプレイをしたのは、「風俗草紙」との出会いより数年後の事である。

それまで、プレイは空想の中のものでしか無かった。

残酷記録映画がブームだった頃だ。神への捧げ物に、黒人少女が生きたまま焼かれる映画があり、ポスターにもその少女が縛られているシーンが見られた。

「他から見ると苦しいと思うかもしれないけど、案外本人は喜んでいるのかもしれないよ」  
「どうして？」

こんなきっかけで、SMの話が始まった。

相手は、自分で店を出している、まだ独身の女性だった。

彼女もSMという言葉は聞いた事はなかったが、その内容にいささか興味を持ったようだ。

必死に説明する私の声は上ずり、体が興奮で小刻みにふるえるのは、それから何年後までも繰り返された。

二度、三度、会う度にその話をし、やっと一度試してみようというところまでこぎつけるのに、二ヶ月くらいかかったであろうか。

大阪郊外の温泉宿。離れをとって、さあ始めようと縄やカメラを出すと、写真は拒否され、部屋も暗くすること要求された。

さらに、最後の一枚は取らないようにということになった。

私も成人した女性とのプレイは初めてだし、このチャンスを逃がしてはいけないと、全て相手の要求を飲んで、プレイを始めた。

少し体は固いが、豊かな胸をしている。



その当時、後手縛りしか思いつかなかったもので、まず両手を後ろへまわし、手首を縛り合わせた。

胸の上下に縄を喰い込ませると、かすかなあえぎが聞こえた。

パンティをギリギリまで下ろし、一本の紐のようにする。

勿論、繁みは全て露わだ。見方によつては、全裸より刺激のかもしれない。

でも、彼女との約束は、守っているわけだ。

その唯一隠されている部分に、縦に縄を喰い込ませていく。

部屋の電気は消してある為、窓から入ってくる薄明りだけが頼りだ。

それだけに、余計神秘めいた感じが出、自分達は他人の知らない世界に居るのだという気持ちになっている。

その夜のプレイは、ほんの入門程度で終わった。

「又、会ってくれる？」

と聞いた私の口調には、不安が含まれていたに違いない。

恐らく、生まれて初めて素肌に受けた縄目だったろう。

だが彼女は、簡単に再会を約束して

くれた。

しかも、その前に電話で写真を撮つても良いという許可までも、与えてくれたのだった。

回を重ねるに従って、プレイは必然的に激しくなっていた。

大阪市内で、神戸で、鞭打ち、逆海老ら、当時、私の知っているだけの縛り方、責め方を試みた。

彼女も嫌がらずに、その全てに協力してくれた。

だが、あぐら縛りにして、大きく開かれた秘所を責めた時には、不自由な体をもがかせ、涙まで流して抵抗されたのには驚いた。

プレイ後に聞いたところでは、その日は何となく精神が不安定だったという事だった。

「奇譚クラブ」の分譲写真に夢中になっていたのも、この頃だった。

今では写真集が数多く出ている為、分譲写真も殆んど見られないが、個人の好みとしては、写真集よりも一枚物の方が良い。

ただ、うたい文句に対する期待が、実物を手にして裏切られる危険性は、

いつもつきまとっていた。

今でもファンが多いときく、梨花悠紀子嬢。しなやかな体、美しい表情、本当にどんな責めにも挑戦していたようだ。

特に印象に残る一枚は、縄目を解かれた彼女が、力無く裸身を投げ出してゐる姿。その体に、縄は一本もかかっていない。

だが、二の腕に今までの責めの跡、縄目の跡がくっきりと刻まれていた。

女体に喰い込む縄目は、勿論美しい。だが、縄目の跡にも、いいような美しいさを感じるのだ。

田原美佐子嬢、彼女を知る人は少ないだろう。ほんの一時期、姿を見せただけだから……。

だが、彼女は私の最も好きなモデルなのだ。

いや、モデルというほどプロではなかったろう。

本当に素人っぽい感じが溢れている少女だった。

彼女のカラー写真に、どんなに恋焦がれた事か。

ポーズも後手縛りだけだったような



気がする。

モデルの美しさ、プロポーションの良さ、責めの多様さからいうならば、今の方がはるかに上だが、この素朴な少女の姿は、今でも忘れる事ができない。

当時、私を夢中にさせたモデル達、彼女らは、今、どんな人生を歩んでいる事だろう。できる事なら、現在の姿を紹介してもらいたいものだ。

私の夢のモデル嬢達に、会って話ができるなら、当時をしのび、今の世相を見てSMが語れたら、どんなに楽しいだろうとも思われる。

最初の彼女と、何という事なしに別れた後、数少ないながらも、プレイ相手は断続的に現われた。女子大生、ホステス……。

もっとも女子大生というと、中年男は目の色を変えるが、プレイをしてみれば、それは若いから良いには違いないが、OLらと何ら変わりはないのは当然の事だ。

相手も変わり、回数もふえるに従って、プレイの内容にも変化が起こり、責め方もある程度、上達はしたように

思う。

SM誌の読者交歓室に、よく呼び掛けの投書もしたが、女性からの反応は皆無に近い。

今でも交歓室へは、男性の投書が殆んどだが、それに対する反応は、まず無いはずだ。

それでも、最近の事だが、一人会う事ができた女性がいた事を考えると、下手な鉄砲も数打ちや当たるの類だろうか。

彼女に至るまで、何人の女性を何回に亘って責めたか、一寸簡単には思い出せない。

彼女達は現在、消息の判っている人達は、皆平常の生活をしている、プレイによる悪影響は、無いようだ。

彼女と実際に会うまでは、だいぶ時間がかかった。

電話による連絡は、すぐについたのだが、お互いの都合がつかず、結局、一ヶ月以上後になって、やっと会えた次第だ。

初めての人と会うのは、矢張り期待と不安の入り混じった気持ちになるものだ。

SMプレイといっても、異性なら誰でも良いというものではない。

少なくとも、プレイの間は好意を持った相手でなければならぬ。

会う約束はしたものの、嫌な相手だったらどうしよう。

それでもプレイはすべきだろうか。

その心配は、彼女の姿を見た時に、一度に消えてしまった。

大阪駅前の約束の場所に、彼女は先に来て、本を読んでいた。（私が遅れたわけではない。彼女が早過ぎたのだ）

小柄で小肥り、まさに私の好みにびったりなのだ。

しかも、声を掛けて、上げた顔が可愛いらしい。

食事をしながら話をしてみると、お互いに波長が合ったのか、初対面の固苦しさはなく、気楽に話ができる。

お茶を飲みながら、過去のプレイの話を聞いてみると、昔の恋人にそれらしいプレイ（軽く縛られたぐらい）をされた程度だという。

早速、プレイを行なう事にした。写真撮ることも、気楽にOKしてくれた。



部屋に入って持参の道具を出し、カメラを用意しながら、彼女に服をぬぐように言う。

色白で小肥りの体は、縄によく合う。ただ、残念なのは体が固いことだ。後手に組ませた手も、水平以上に上がらない。

だが、胸の美しさは素晴らしく、ただ大きいだけではなく、形が良く、若さに張り切っていた。

上下に縄を喰い込ませ、突き出た乳房に洗濯ばさみを噛みつかせると、可愛い顔が一瞬歪んだが、外してくれとも、痛いとも言わなかった。

プレイの時、言葉で責める人がいるようだ。羞しい言葉を言わせたり、言葉で恐怖を与えるような……。

だが、私はプレイの時、しゃべるのを好まない。神経を視覚と触覚に集中したい。

後で聞いてみると、彼女もそうだったそう。

彼女とのプレイの間中、私が口にしたのは、縛り方を変える時の、ほんの二言三言だけだったと思う。

それに彼女は、色々な責めを試みて

も、弱音は決して吐かなかった。

回を重ねるに従って、責める方法も強くなっていったのだが、蠟燭責めも、鞭打ちも、相当思い切っていたつもりだが、体で反応はしても、口で泣き事は言わなかった。

吊り責めもしてみたかったのだが、設備のある所がなく、また、彼女の体重では、私一人で安全が保証できそうになかったので止めておいた。

私の使う縄は、クレモナの八ミリが主となっている。

ゆっくり吊るせば、シングルでも体重を支える力はあるが、まあダブルにした方が安全だろう。

それ以外にも麻縄と綿ロープは用意してある。

麻縄は、女の柔肌により残酷さを表わすのに、ぴったりだ。

藁縄も良いのだが、室内のプレイにはごみが多く出て、後始末に困ってしまう。

綿ロープには力はない。綿ロープはいくら太くても、吊りには使わない方が良い。

だが、捌き易いし、被縛に慣れてい

ない相手だと、肌触りも良くて、余計な苦痛を与えないで済む。

麻縄の場合、新しいものをそのまま使うと、刺激が強過ぎる。

新聞紙を燃して、ケバを取ってしまふ必要がある。

さらに柔かくしようと思ったら、木のまわりにまわして、往復運動をくり返すことによって、強度は落ちるが滑らかにってくる。

どの縄を使うにしても、当然縄目の跡は残るし、また、それがとても美しいのだが、どうしても跡が残っては困る相手の為には、縋帯はどうだろうか。

実際に試した事はないのだが、結構面白い物ができるような気がする。

ただ、伸びる質の縋帯は、プレイに向かないのではないか。

もう一つの小道具に、洗濯ばさみがある。私はこれを乳首責めに使う。相当痛い事だろう。

だが、前述した女子大生の場合、苦痛の表情は示したが、相当長時間我慢したし、張りのある乳房の為、一度などは自然にはじけ飛んで、こちらの方



が驚いた事があった。

勿論、これは痛いのに弱い相手には使えない。

この他、柔かい筆を用意する事もある。浣腸は好まない。まだ実施した事もない。小説や映画でも、長々と浣腸の描写をされると癖易してしまう。

あれは、心理的な責めになるのだろう。

心理的な責めを私は好まない。どうも、後に深い傷が残るような気がするのだ。

肉体的な責めは、終わってしまったえば、それで全てが終わるのだ。

そうなれば、心理的なものは陰性で肉体的なものは陽性だともいえるのではなからうか。

勿論、これは個人的な好みだから、良いとか悪いとかいう問題ではない。

鞭打ち、これも良い。勿論、血が出るほど打つことはない。

白い肌に赤い筋が残るくらいが良い。従って、鞭は用意することなく、ベルトで済ませる。

手錠、鎖の類は使わない。見た目には柔肌金属という取り合わせが良い

のだが、肌にそわなような感じを受ける。矢張り女体には縄が良い。それも後手縛りが良い。

まず、手首を縛る。胸から縄をかけたり、首に輪をかけるのから始める方法もあるが、体を縛っている間、両手が自由だというのは、どうも不自然だ。

まず手の自由を先に奪うのが、本道のような気がする。(実際に縛っている時を考えてみると、胴体に縄を掛けられている間、両手は自由がきき、ダラツとしているというのは、どうも間が抜けている感じがするが、どんなものだろうか)

M写真で、胴体には凝った縄の掛け方をしているのに、手は手首を縛っただけというのを、良く見掛ける。

いくら手首を強く縛っていても、二の腕を縛っていないと、しばらく動いているうちに、必ずといっていいくらい縄目はゆるんでくるものだ。

腕は胴体にきっちり留めておく、さらに、手首はできるだけ上にあげて縛った方が緊縛感が出る。

二の腕は柔かい為、縄目の跡が残る易いが、その跡がまた一番美しい場所

でもある。

後手縛りの次に好む責めは、磔である。

というより、両手を上げた姿が良い。というのは、腕の下が露わになるからだ。

腋の下には色気がある。普段、他人の目にふれない場所であるだけに、たまに見えると、とてもエロティックに見える。

さらに、腋の下に続く二の腕の内側は肌理も細かく、一番美しい肌の部分ではないかと思われる。

腋の下はきれいに手入れしてあるのも良い、自然のままに生えているのも良い。

私は自然のままの方を好むが、あまり濃いのは色気過剰のような気がする。少なめのもの。夏など電車で前に立った女学生の袖口から、自然のものが見えた時など、その日一日が明るくなる。

もっとも近頃は、とんとお目に掛からなくなったが……。

M写真でも、映画でも、中に自然の下にお目に掛かれないのは淋しい



ことだ。

服を着ていて、またヌードだけの場合、さして美しいとも思えぬ女性が、被縛姿になると、急に美しくなると思うのは私だけだろうか。

女性は美しい。

だが、被縛女性はもっと美しい。

しばらくプレイは途切れたが、暖かくなると再開の兆がある。

昔なじみのしかり、また、新しい相手も見つかるかもしれない。

大阪はどうも東京に比べて、女性のマニアが少ない感じがする。

大阪の女性は、東京人に無いものを持っているはずだ。

その魅力と一緒に探し出していきたいものだ。

縛りの真の美しさ。

女性をより女らしく見せる縄

そして、そこから見い出す、SMの真の追求。

この快楽は、消えることは絶対あり得ない。

本当のマニア（単なる変わったセックスマニアではなく）の為の雑誌として、「奇譚クラブ」も、栄えん事を！





# SMビデオガイド

## 映画からのビデオ

にっかつを主に東映やその他のプロダクションで劇場用に作った映画のビデオ版。

これは、劇場で見た映画で、これは良いと思ったビデオソフトを買えば、内容は解っているのだから、当りはずれはない。

しかし、劇場用映画は殆んどが一時間を一寸越える上映時間だが、ビデオの多くは三十分の短縮版で（たまには一時間のものもあるが）その三十分の中にこちらのSMシーンが

どれだけ入っているかが問題である。

ビデオ化する側は、三十分で何とか一応ストーリーをまとめようと試みるが、こちらの側はSMシーンだけをピックアップしてもらえばそれで十分なわけである。その両者のギャップがしばしばしゃくの種となる。

『お柳情炎縛り肌』にっかつ NR〇一〇  
金一八、〇〇〇円、主演 谷ナヲミ 監督  
藤井 彦

上州あたりのヤクザの親分の娘として生れた谷ナヲミが、長い旅から帰ってくると、跡



筆者がビデオ製作の際に撮った



目を継ぐ筈の弟が弱虫のため、子分の某と、その情婦が一家をとりしきっている。そこでいろいろとあって、谷ナヨミと、東照美が地下室に檻禁される。東照美の身代わりとしてナヨミが上半身裸体で縛られて坐り、その両足首に縄をかけて左右にひろげられる。情婦が筆でナヨミの乳房をなぶる。このシーンはナヨミの大きくて形の良い乳房と、それにかかる縄目が仲々美しい。

次いで、後手に縛られて部屋に引き立てられる。そして戸板の上に開股して縛りつけられる。全裸のナヨミの局部に、すりおろした山芋をトロリとたらす。このシーンは天井からの俯瞰撮影で綺麗にとれている。それから後手に縛られたまま中腰で、前後から二人の子分にサンドイッチ風に犯される。そこに男が助けにとびこんで来て一巻の終りとなる。このビデオでは、谷ナヨミは十分に美しくいし、縛りのシーンは、全体の約三分の一位はあるので、まあまあ買って損をしたとは思わなかった。谷ナヨミのファンなら一八、〇〇〇円も止むを得ないかも知れない。

『残酷黒薔薇私刑』につかつ NR〇二一  
金一八、〇〇〇円 主演 谷ナヨミ 監督

藤井克彦

昭和初期の赤学生恋人である谷ナヨミが

憲兵隊に捕えられ、そこで恋人の行き先きを白状せよと拷問される。

天井から下っている横棒に大の字形に吊られ、ゆっくり廻りながら鞭で打たれ、次いで赤い腰巻一つで駿河間ひのスタイルに吊られぐるぐると回転させられる。私はこの駿河間ひのシーンをお目当に買ったのだが、腰巻きの下に厚いパットを入れているらしく、腰のあたりがモコモコしている上、背中が反って居らず、あまり良い形ではなかった。その上、SMシーンは冒頭の五分足らずで、あとはどうでもよいお話ばかり、これでは谷ナヨミファンといえども、いささか高いお買物。

『縛り絵伝奇、淫ら肌』につかつ M三

金一〇、〇〇〇円 主演 谷ナヨミ

これは、谷ナヨミがにつかつに登場する以前に某プロダクションで「縛り絵伝奇」という題名で公開したものである。その後題名を「縛る」だったかに変え、谷ナヨミの三本立上映などで再公開したので見たことのある人も多いだろう。

話は唐人お吉がハリスと覚わしき外人に、閨房でのおたわむれに縛られる。それをのぞき見た日本の写真家第一号下岡蓮杖の夢や回想シーンに、ナヨミの縛られ姿が何回か登場する。これはまだナヨミのうんと若い頃の

作品だから、ナヨミの顔も肌も美しいし、自慢の乳房も誠に立派である。縄がけも、一部、後手首が縛ってない手抜きもあるが、まあまあ割合とよく縛ってある。それに唐人お吉は芸者だから当然大きなかつらをかぶり、着物姿で布団の上で縛られるので、時代物的雰囲気は十分に出ている。時代物のSMビデオはあまり例がないので、その意味でも点数を割り増しして良い。ただし縛りシーンはコマ切れで全部合計しても六、七分位なものである。

これは定価も安いし、色の具合も別に悪くはないので、谷ナヨミファンならば、お買い得だと思う。

『縛り』につかつ M二三 主演 丘なお

み 日野蘭子 金一〇、〇〇〇円

これも某プロダクションで「鞭と緊縛」という題名で上映された劇場用映画のビデオ用短縮版である。

お話は医大入学を目指す浪人の部屋に同棲している年上の女、丘なおみが、セックスばかりかSMサーヴィスまで献身的に御奉仕している。赤い小さなパンティ一枚のなおみが、後手に手首だけを黒い紐で縛られ、懸命にフエラチオをし、顔面にザーメンを浴びる所は単純な縛りだが、割合とムードがあって良い





シーンである。男はそのまま布団に入って寝てしまおうが、なおみは縛られたまま尿意を訴える。

前のシーンと続いているのに、どういうわけか、なおみの赤いパンティはなくなり、全裸になっている。とすると、男はなおみの顔面に一発放出した後すぐにもう一回、今度は真面目に本来そうあるべき所に発射したので

あろう。うらやましいことである。

排尿シーンはなくて、次の縛りシーンではピンクのパンティを半分脱がされたなおみがカニ縛りで尻を天井に向けさせられている。男がその辺をいたずらした上に、イチヂク浣腸を手にした所で次のカットに移る。このシーンも短かいし、縛りも単純だが、まあまあ悪くはない。

なおみが帰郷している間に男は日野繭子を部屋に連れ込む。二人でおきまりの作業にはげんでいる所になおみが帰って来て一寸もめるが、すぐに三人でいわゆる3Pの状態となる。なおみと繭子のレズ風のからみは一寸良いい。その後、なおみと繭子が二人共縛られるのだが、ストーリーの都合でなおみの手首を縛ってないのはなさけない。ストーリーより縛りを優先してもらわないと困るのだなあ、我々SM族にとっては。

なおみは、その自由な手でメスを取り出して(医学部の学生ではない浪人生がメスを持っているのも変な話なのだが)繭子や自分の肌に少しでも傷をつけるように男に要求する。男は肌にメスをあて、少し血を出す。繭子は怒ってその部屋を出て行く。

この監督は誰か知らないが、SMとは血を流すことと思つてサーヴィスをしたつもりか

も知れないが、つまらないことをしたものだ。それより、折角二人の女を縛ったのだからもっと綺麗に手首までキチンと縛って、ゆっくりとSMレズプレイをとればよかったのにと思う。

丘なおみの熱演と、日野繭子の可愛らしさは買うが、今一つ物足りない出来である。

## 生録りビデオ

前の章では劇場用に作った映画のビデオ版だが、こちらは最初からビデオ用にとつたものである。したがって予算が少ないので出演者も少人数だし、セットや小道具もお手軽に出来ている。しかしストーリーにはこだわらず縛りシーン優先だから縛られシーンの量はこちらの方がはるかに多い。値段も三十分もので一万円以下である。

『縛りSEX調教師』につかつ A〇一

主演 青野梨魔 豪田路世留 監督 佐々

木忠 金一〇、〇〇〇円

冒頭から、廃屋のような荒れた部屋に全裸の女が首と大腿にかかった縄で宙吊りにされている。女は仰向けで上体は斜になり、腰と膝が曲がり、少し開股しているようだ。かけられた縄目の量はかなり多くかなりきびしい縛りである。



宙吊りのまま男に責められ、遂に尿失禁をするが、男はそれを喜んで呑む。

縛られたままの女を床の上に降ろすと、不自由なスタイルで一戦交える。このシーンは仲々良いが、この女は梨魔でも路世留でもないようだ。

次いで梨魔が和服を着て椅子に後手に縛られている。このシーンでは、白い布の目隠しと、同じく白い布の中央にこぶを作り、それを口の中に入れて縛った猿轡がなかなか良い。あまり露出していないが、妙に色気がある。その梨魔の面前で男と路世留のセックスシーンが演じられるが、ボカシが入るのは御愛嬌である。

次いで後手で上半身を裸にして縛られている梨魔を、黒い革具と黒ストッキングに身を固めた路世留が調教をするシーンとなる。この時の縛りも割合とキチンとしているし、路世留が「女王様と呼び！」とせまったり、自分のあそこを梨魔になめさせたりしてSMムードが高まるのだが、なぜかこのシーンは短かいのが物足りない。

次のシーンでは胸の縄はそのまま手首だけほどこいてビールを呑まされている。どうして後手のまま呑ませないのだろう。後手の不自由な姿でビールを呑ませた方が、ずっとSM

ムードが昂まると思う。

その後、両手を頭上に揃えて立縛りにされた梨魔のパンティを通して尿がもれる。この辺は可もなく不可もないといった所。

その後、梨魔と路世留のレスシーンもあるがこれは縛られていないので私の批評の対象外である。

このビデオは全体の三分の二位は縛りシーンだし、縛りも劇場用のものより厳しい。

そんなわけで、一〇、〇〇〇円ならまあまあといった出来である。

『緊縛社員旅行』ヘラルド社 主演 青野

梨魔 監督 稲尾 実 金一〇、〇〇〇円

OLの梨魔が路上で妊婦緊縛のビニール本を拾う。自室でそれを見ているうちに興奮した梨魔が青い縄で自縛を企てる。自縛だから当然自分の手首は縛らない。しかし、自分のパンティを自分の口に詰め込むカットは一寸よろしい。そこから空想シーンになり、白い太目の縄で縛られ、久保新二に責められる。このシーンでも白布で口唇を割って猿轡をさされるが、梨魔はなかなか猿轡が似合う。ただ空想シーンと現実シーンを区別するため、空想シーンでは画面の周辺をボカしているのがわずらわしい。

次の空想シーンでは部屋の中央に大の字に

縛られ、久保新に鞭打たれる。大の字縛りの時に胸や胴を縛るのはそろそろしくて不可ないが、股間にもふんどし状に縄がけしてある。ここでも、手拭で口を割った猿轡がかまされでいて、アップになった顔が可愛い。

現実の場面にかえり、会社の社員旅行で、久保新と意気投合した梨魔は実際に縛られることになる。青い縄で、ブラチャイ縛りにさ





れる所はなかなか上手に縛っているが、腕に全く縄がかかっていないのは欠点である。縛られた梨魔をうつ伏せにして背後から犯すシーンでは、背中の縄目が全くだらしくなく、前面の縛りがマアマアだけに、一層ガツカリさせられる。

最後に全裸でグルグル巻きに足首まで縛られた梨魔がニヤニヤ笑いながら廊下を小刻みに歩いていて、それを他の社員が見てびっくりするシーンがあるが、これは全くの蛇足でこういうコミカルな扱いはSMムードを壊すものである。

このビデオでも全篇の約三分の二は縛りシーンだし、部分的にはよいカットもあるが、全体的に見ると、前にあげた「SEX調教師」に劣るようである。

## セミプロ作品

これはアマチュア作品と呼んでもよいのだが、金をとって売っているのだから、セミプロとしておこう。

前の章までは、プロの監督と俳優とカメラマンが、プロ用の器材を使って撮影したものだから、一応ストーリーにはなっているし、画面や色もきれいにとれている。

セミプロ作品は、まず素人のスタッフが、

家庭用のビデオカメラで撮っているので、色は悪いし、カメラアングルも出駄羅目、ストーリーなぞ全くない。多くはマンションの一室でぶっつけ本番でとったものである。

しかし、セミプロ物は、まず圧倒的に縛りシーンが多い。それだけを撮っているのだから、余分なものがない。

縛りはさして上手くはないが、殆んどが演技なしのSMプレイそのものだから迫力がある。縛られる女性も無名の素人と思われるがその割に美人が多い。

そんなわけで、セミプロ物はそれなりに存在価値があると思う。

『K氏の記録Ⅱ社第一巻』金一五、〇〇〇円

Ⅱ社はその後VAN社と改め第三巻まで出しているようだが、これはその最初のものである。

タイトルも出演者もなく、いきなり縛りシーンが始まる。

若い娘が白いパンティ一つで後手に柱に縛られて坐っている。胸にX字形に細縄をかけ腕には縄はかかっていない。腰にも一卷きしパンティの上から縦縄がかかっている。

中年の男がブリーフ一つの姿で、白いローソクを二本手にして女を責める。女の悲鳴と



表情がリアルで迫力がある。柱からはなれて裏返しの畳の上でもだえる女の股間を押し広げてローソクをたらす。パンティの上からだがアッパになったりして結構いい線を行っている。

次のカットでは、カニ縛りでうつ伏せにされている。男は一本のローソクをどこかに挿入した上、別の三本のローソクで責める。



次いで仰向けにしての剃毛シーンだが、石鹸の泡の下に白いパンティが見えるのは頂けない。

それから次から次へと全篇縛りの連続なので、それを一々書いてはきりが無いが、途中、全裸後手のまま部屋の中を逃げ廻るカットは仲々良い。

また全裸開股の半吊りシーンは、頭は床面



についているものの、両肢の間にローソクが立っていたりする。

このビデオの主演の女は、そんなに美人と

は云えないが、終始大声で悲鳴をあげ続け、動き廻わり、仲々の熱演である。熱演といつても、別に演技というわけではなく、自然に悲鳴をあげているだけかも知れないが、なまじつかな演技よりよほど面白い。

縛りそのものは上手くも、丁寧でもないし、アパートの一室だけでとったものに過ぎないが、それでも結構楽しめる。

『α社 第二巻』 金一五、〇〇〇円

前項の第一巻が割合に良かったので第二巻も買って見た。

これも、題名もスタッフ名も人らずいきなり責めシーンが始まる。

責められる女は第一巻の女とは違うが、結構綺麗な可愛い子ちゃんである。

責める女は二人居て、一人は一卷にも出た中年男で、もう一人は、一寸若い男である。

ファーストシーンは白い服に赤いスカートをはいた女の子が立ったまま両手を挙げて柱に縛られている。その着衣を少しづつむしって行き、パイプ責めなどに及ぶ。

次いで、後手に柱に縛るが、今回は腕にも縄をかけてある。女の乳房は小さいが、まだ

少女らしい新鮮さがあってよい。

責められる時の表情や悲鳴もなかなか可愛いらしい。

全裸後手で仰向けにし、両脚を持上げて腰を浮かせてのパイプ責めのシーンは、後手の手首や、女の顔に本当のSM感が出ていてなかなかよろしい。

また、女の口にパンティを噛ませる所もよいがそれを吐き出させないように上から縛らないと面白くない。

それから女の乳房を男が足で責める所も短かいが良いカットだった。

このα社のスタッフは、セクシャルな責めにウェイトがあるようで、パイプや刷毛などで乳房や局部を刺戟するような責めが続き、前作でもそうだったが、長いファックシーンで終りとなる。それはそれで悪くはないが、直接セックスに結びつかないSMの楽しさを表現したのを見たいと思うのは私だけだろうか。

この第二作も、第一作とよく似た傾向だが第一作より少しだけ良い点数がつけられる。その理由の多くは女性の可愛いらしさから来ているのだが、とにかく、見終ると御苦労様といいたくなるような熱演?である。



投稿作品

# 僕の憎まれぐち

画・文 室井亜砂路



再生「奇譚クラブ」おめでとうございます。旧誌が書店から姿を消して月日もたちました。今や書店に行けば極彩色の表紙のSM雑誌が何誌も並び、ビニール本屋にはSMコーナーが出来、SMホテル・SMクラブ、SM喫茶と、街にはSMの文字や情報があふれております。かつて変態性欲と蔑まれ、日陰の花と呼ばれたSMも今や、堂々と市民権を得て百花繚乱の我世の春、まことに喜ばしきかぎりと見えます。しかし実は、今程SM誌の内容が貧しい時代はないのも事実です。

他誌にあふれるSM小説の内容といえ、知性皆無の悪人が、白痴同然の貴婦人(?)を下ダバタ縛って尻腸するというワンパターンが並んでいて、とても読み通せないものが大多数です。旧誌の団鬼六氏の「花と蛇」はSM文学の名作の一つでしょうが、功罪の罪の方を言えば、それがSM小説の「ノウ・ハウ」になり形骸だけを下手になぞったSM小説風が港にあふれた事です。決して団氏の責任ではないのですが、模倣で時流に乗っても品位はあらそえません。SM愛好者もただの人、SM物、一般物を問わず、人間の描けていない小説は、いくらコケオドカシの道具立てを並べても所詮読者の胸をうつことは出来ません。旧誌以前にSM的場面を扱った



小説がなかったわけではありません。しかし旧誌が最もユニークだったのは、それまで悪人としてしか描かれなかったサディストの立場、滑稽な変態としか描かれなかったマゾヒストや女装愛好者の立場に始めて立ったという事でしょう。加虐嗜好を持つ読者にとって小説中の責め手は自分の分身です。血も涙も無く女性を責め続ける品性下劣な悪人や、生活感の全くないプレイボーイに誰が感情移入出来るでしょう。やくざや悪人が登場するのが全て悪いわけではなく、我々は血の通ったやくざや悪人を見たいのです。彼達にもそうしか生きられぬ人間の悲しさや滑稽さがあるはずです。たとえば旧誌の「鬼六談義」に描かれたチンピラや変質者達のなんと人間くさかったことでしょう。あたりまえの事です、SM的嗜好の持ち主が皆、犯罪者や悪人になるわけではありません。大多数の人達は、普通の市民生活をしながら、幼時から人知れず持ってしまった他人とは違う型の性欲を、他人に恥じつつひた隠しにして生きているので

出し、旧誌の黄金時代となったのです。読者がいつの間にか書き手と変わり、書き手が読者として発売日を待ちわびる共犯幻想さえ生まれます。まだ十代だった素人の私までが、「僕のイメージ画集」という下手なイラストを投稿したものも、そうした幻想の中にあっただけかもしれない。印刷された自分の絵のせいかもしれません。印刷された自分の絵のあまりのひどさに赤面し、貴重な誌面に恥をさらすのはもう止めようと何度も思いながら、その度に編集長の温かい励ましのお手紙をいただき、描き続けたものでした。

さて、旧「奇譚クラブ」は使命をはたして消えたのでしょうか。その後量産され続けたSM雑誌やSMビニール本群を一見すれば、SM文化はますます発展してきたとも思えますが、実はそれは、旧奇タ誌が当時の出版界の最前線で血を流しつつ切開いてきた宝を、よってたかつて風化させボロボロに喰いちらかしてきた歴史でもありました。粗野な時流におされ、消えるべくして消えたであろう奇タは、又この時代に呼びもどされ、再び現われるべくして現われたと言えるでしょう。今、再刊された御誌に望むのは、あの時代に旧誌が立っていた位置、時代の最前線に今も立ち

続けてほしいという事です。他誌が振り返らない、人の心の闇に眼を向け、

他人に知られたくない恥かしい性癖を持つ少数者、日陰者の立場に立ち、今迄誰も性欲を感じるはずがないと思われていた事物にエロスを感じている孤独な人達の心を開かせてほしいのです。社会に役立つ者以外は斬り捨てる合理主義文化の中で、変態と呼ばれ、心が病んでいると言われる彼達こそ実は選ばれた人達なのです。その人達の言葉を聞き、その人達の案内で未知の世界に旅立ちたいのです。手垢の付いた道具立てではなく、生きている人間の生きている心情を読み、新しい驚きと共感を持ちたいのです。

一寸だけ昔を懐かしんでみれば、沼正三氏のエッセイの格調の高さや、「家畜人ヤプー」「影の国」「大噴火」その他のSM・SFのイメージの豊かさ、「芳野眉美氏の華麗な生活」、田代俊夫氏の「薔薇と蜜蜂」等のユーモア・M・Sの楽しさ面白さは他誌に類をみない物でした。又「コンプフンドシ」、女斗美、糊やボマードの粘着性物質嗜好、ゴムマニア、お灸マニア等、次々と紹介される特異性向は人間の不思議さ、哀しさを伝えてそれぞれ魅力的な読物でした。今のSM誌では忘れられているこうした方向を再びとりあげ発展させ、さらに新しい分野をも開拓してください。たとえば縛りも浣腸もない心理的SM小説

読者の一体となった一種濃密な雰囲気を作り



とか、悪人が一人も登場しない暴力小説とか、女性が決して裸にならない官能小説なんてものに、どなたか挑戦してみていただきたい。

又旧奇誌の研究として、編集者、旧執筆者、モデル、読者代表、研究者達の座談会なども、もし実現出来れば文献資料としてとても興味のある記事が生まれると思います。

又、伊藤晴雨画伯や栗原伸画伯、春川ナミオ画伯達の麗筆もリバイバルで再録出来ないものでしょうか。少々堅くても内容のしっかりした論文も、毎号ひとつは読みたいし、洒落なエッセイもほしい……と欲はかぎりなく続きます。

書店で貴誌を見付けて、懐かしさのあまり、つい身勝手な事を書き並べてしまいました。かつて旧誌の発売日に心をときめかした読者の皆様はどうしておられるのでしょうか。

今も家族にも言えない性癖に悩みつつ、仮面の人生を生き続けているのでしょうか。それとも氾濫するSM情報に浸って満足しつつ、明朗なる実践者として浮名を流しておられるのでしょうか。生き方はそれぞれ違っても、おたがい困った性癖かかえた変態者同志、せめて品性だけは落さぬよう、何とかうまく昇華させて生きて行きましょう。貴誌の御発展、心からお祈り申しあげます。





## 読者投稿

# 腰巻風俗



## 腰巻党

現在の若い人には、何んだ、あんなフロシキみたいな物がと笑われますが、戦前の者にとっては腰巻と云う下着はなまめかしい物でした。私が中学生の頃、登校中朝きまって三十才位の着物の良く以合う美人の奥さんが、主人や子供を送り出したのちにタライで洗濯をしているのですが、タライをはさむようにしてしゃがんでしてますので、裾がわれて真赤な腰巻が見え、それが左右にわれ、白い太股が赤い布の色がまさぐり合って、妖しく美しく私の目にうつります。下校の時その家の洗濯竿に、朝、洗ったあの赤いお腰が干して

あると、たちどまり見つめます。あの美しい奥様の肌に巻かれていたと思うと欲しくなります。一度で良いからその腰巻を私の手に入りたいと心が迷います。その当時雑誌などに亭主の好きな赤お腰とかいう文句がのつています、私は何回でもそのところを繰り返し読みます。私は赤い腰巻をひとときも傍から手ばなせないほど好きです。この人生に赤いお腰ほど美しく魅力的なものが他にあるでせうか。私はもうあのまっ赤に燃えたつようなお腰を見ると、なんともいえぬ情感におそわれ、うっとりとしてしまい、赤いお腰と白い肌、ああ思い出すだけでも私の体はせんりつし、私の身も魂もとけそうです。最近の雑誌やビニ本などに女性のパンティや全裸の写真を見ますが、私はなんの感興も起こりません。裾から赤いお腰がチラリと見えたり、まっ赤なお腰一枚でお腰と肉体との調和した美しさになんとも云えぬ美しさを感じます。道行く女性の裾からこぼれる赤い蹴出しなど、たまらなく私の気持ち惹きつけます。風の吹く日裾がめくられて腰巻が見えようものなら、どこまでもついて行き、風が吹いて裾をまくる度に胸をときめかし、もう一度風サンよ、裾をまくってくれと何度でも何度でも願ってついで行くのです。私の青年時代は女性ほとんど

ど和服ばかりでしたから、雨降りなど裾を上げ、赤や花がらのお腰が見ごとに街中で見られたのに、この地上から消えて行ってしまった残念です。雨あがりの翌日など、どの家の物干場にもまっ赤、花模様、桃色などのお腰の洗濯ものがならんでひるがえる光景が無くなつてしまいました。日本髪に黄八丈の着物の乱れた裾に真赤な腰巻、真紅の長襦袢姿、或いは腰巻一つの姿、又すっかりはぎ取られ、赤い色彩の上にのたうつ裸身、エロチズムと美と妖しい喜び、こんな事を空想する私の顔の上に、芸者さんが着物を赤いお腰と共に大きくまくり上げ、さ、良くにおいをおかぎ、あんたはこの赤と白い股間が好きなのだろ、と息もとまりそうにおしつけて来ます。私は天国にいるみたいです。帰りに、このよごと一週間も洗濯してない腰巻が欲しいのだからと頭からすっぽりとかけられます。私は宝物の様に家に持ち帰り、それを大きくひろげ、またニオイをかぎ、ほほずりし、腰に巻いたりにして楽しみたい、そんな空想をしています。パンティは若い人には良いでしょうが、私みたいな方も居ると思います。腰巻党、団結して頑張ろう。



# レスポスの園1

## 結城紀子

私は、ここ道後温泉の一角で、小さなスナックを開いております。今年で三十三才になる独身の女です。実は、この手記を書くことも、ほんの数日前に東京の古い知人から依頼されて決心したばかりなのです。私は、この手記がどんな本に載るのかもよく知りません。とにかく、君の今までの半生をありのままに綴ってくればそれでいい、ということなので、読む方々の興味をそそることができかどうか心許ないのですが、私のような女の性癖を発表できるチャンスはそうあるものではないでしょうから、子供の頃の記憶から順に書いていこうと思います。

レスビアン——という呼称で私たちは呼ばれます。女同志の愛。世間では、いろいろと好奇の眼でとらえられているようです。でもそのほとんどは、男性側から興味本位にとりあげられ、描かれた姿でしかありません。よくストリップの看板に、「狂乱レズショー」

とか「天狗レスビアン」とかいうのが見受けられます。私は拝見したことはないのですが、いったい、本物のレスビアンが出演していることがあるのでしょうか。あんな見世物に出るなんて私には信じられません。小説や写真などで取りあげられているレスビアンも、そのほとんどは男の人の勝手な想像によるものが多いと思います。私の知る限りでは、山口年子さんとか青柳友子さんといった女流作家そして、清岡純子さんの活動という程度のごく少数の人達が「本物」の作品を提供して下さっているにすぎません。ホモの人達のための雑誌はたくさん出ているのに、何故、レスビアンのための雑誌は出ないのかしら。私も東京にいた頃は、「若草」というガリ版刷りのレズの雑誌を読んでいたことがあります。現在、こんな田舎に移り住んでいると、めったに入手できません。本屋さんで売っていませんから。もっとも、本屋さんで売っていても買に行けないかも知れませんね。

私が自分を、男を愛せない、女だけしか愛していけない同性愛者だと自覚したのは、十五、六才の頃だったと思います。でも、今、思い起してみますと、その前にも自分の性癖を形成していった、いくつかの出来事があり

## ゴムフェチストより

山紫護謨男（京都）

私は二十五才のゴムマニアです。復刊された奇譚クラブの読者でもあります。旧奇クは近くの古本屋にて購入し、愛読しておりました。とりわけゴムフェチに関する部分はすべて切り抜き、大切に保存しております。

私は中学入学以来、ゴムの匂いに強い性的経験を覚えるようになりました。その後今日に至るもゴム好きはますますエスカレートするばかりです。

私は現在、一人暮らしですから誰はばかりことなく毎日ゴムプレイを楽しんでおります。私の「相手」は、ゴムの合羽、長靴、レインシューズ、手袋、廃車となった自転車のタイヤ、前掛などです。これらを時々日干しをして一段とゴム臭くして、一人身悶えます。

私の夢は、ゴムマニアの女性と結婚することです。ゴムマニアは、男性より女性に多いといわれています。

どうか、奇譚クラブ編集部の皆さま方、



ました。

確か、小学校へ入学したばかりの頃です。

私の生家は、東京の大田区にあって、父は宝石商でした。経済的には豊かで恵まれた環境といつてよいかと思います。母は、私を産むと同時に子宮底部大裂傷を起こし、手術の甲斐もなく他界しました。三年後、父は再婚して、私が小学校へ入る頃には、義母との間に男の子が一人おりました。義母は優しい人で私も弟も、わけへだてなく愛してくれていましたから、私自身、中学生になるまで義母を実母だと思いこんでいたくらいでした。

その日、父母と弟は外出していて、広い家には私とお手伝いのお多恵さんしかおりませんでした。ピアノの前で、バイエルのお習いをしていた私は、急にアノことをしたくなったのです。アノこと、というのは、ピアノの椅子の縁に下腹部——クリトリスのあたりだったと思います——を当てて、前後左右に体を動かすことです。その頃、私は無意識のうち、幼児性のオナニーを覚えていたものかと思えます。そのことがどういうことなのかはもちろん何も判っていないわけですが、便意や尿意を催すと、どういうわけか、その行為がしたくなったのだと記憶しています。ただ子供心に、その行為があまり良いことではな

いとは思っていたのでしよう、必ず、だれもないことを確認してからでないと行ないませんでした。

その日は父母が外出しているのだという安心感があつたためでしょうか。下腹部のもしかいような、せつないような充血感にさいなまれて、ピアノの椅子の縁へ跨ぐような姿勢で下腹部を押しあてると、いつもの動きを始めていました。別に声を立てたわけでもないのですが（小学校一年生の女兒のオナニーですから、ほんの一時期の幼児性愛であり、たいていの人の場合、お医者さんゴツコという陽性の形で現われ、やがて消えていく種のもので、声などたてるわけもありません）、運悪くそんな私の姿を、お手伝いの多恵さんに見つかってしまったのです。……

（つづく）



私どもゴムマニアにとって最も頼れる、頼もしい雑誌にしてください。潜在的ゴムマニアはかなり多いと思いますので……。

他のSM誌はあまりにゴムマニアを軽視しています。せめて奇譚クラブだけでもゴムマニア重視の方向を定めて欲しいものです。例えば、ぜひ、通信欄にゴムマニア専門コーナーを設けてください。それから毎号、ゴムマニア関係のものをのせてください。心よりお願い申しあげます。

## 生ゴム愛好会

仁志木好美（別府）

私は、復刊2号で、仁志木好美のペンネームでゴムフェチの小品を発表させてもらった者です。旧奇クの休刊以来、ゴムマニアは発表する場所を失い、落胆の日々を送ってまいりましたが、このたび、新奇ク誌編集部のご好意により、いつでも投稿を歓迎するというお言葉をいただきました。これを機会に全国のゴムマニアで愛好会をつくり、文通やプレイを楽しみたいと思います。ご賛同の方は、編集部回送のお手紙をください。心からお待ちしています。





# 奇クサロン



## 私の縛り方

N 生

初めて投稿します。奇クサロンは復刊1号以来、楽しく拝見しており、いづれは私も投稿してみようと考えていました。というのは、毎号拝見する写真で見える限り、愛好家諸氏の縛りも私の縛りと大差ない（失礼ですが）ような気がしていたからです。勿論、本職（？）の緊縛師とやらも顔負けの、すばらしい緊縛術も拝見しますが、大半は私とどっこいどっこいではないかと思っているのです。そんなことをいえば、いかにも私が縛り上手のように聞えるかもしれませんが、投稿した写真をご覧いただければお判りのように、至

って下手クソで

あります。SM

誌に掲載されて

いた亀甲縛りが

あまりすばらし

いので、さっそ

く真似をして縛

ってみたのです

が、いざ自分で

やってみると、

どこをどう縛っ

ていいのか見当

もつかず、ご覧

のように、なんともだらしな縛りに

なっていました。プレイメイトは

取引先の会社で働くOLで、2年前よ

り妻に隠れてつきあっております。従

順な性格の彼女は、私が始めての男と

いうこともあってなんでもよくきいて



くれるので、プレイメイトとしては最高です。週に2回ぐらい、モーターでプレイに耽けるのですが、SM雑誌を読ませてマゾ教育を施すことにしています。奇クはシロウトっぽい内容で読みやすい、というのが彼女の感想です



が、それがまたいいのではないかと私は思っております。愛好家のSM誌である奇クにプロは必要ないのです。奇クの発展を祈ります。

## ゴム紐の緊縛

八方破郎

妻を相手に緊縛プレイを始めて3年になるが、最近、少しマンネリ気味になっている。噂によれば、SMスワッ

プなどという刺激的な遊びもあるそうだが、私も妻もそこまでは決心がつかねている。もともと、私の緊縛はセックスの前菜みたいなもので、縛られた妻がいろいろと身悶えるのを眺めては性的興奮を高める、という程度のものである。このような私が、本格派の奇ク誌に投稿するのは面映ゆい感じであるが、枯木も山の賑いとやら、もしも妻の緊縛姿態が誌面に載るようであれば我慢して観賞していただきたい。愛好家諸兄は、緊縛用のロープに凝

って、自ら縄を編んだり、好みの色に染めたりするそうだが、私の場合、誠に無頓着で、ありあわせのもので間に合わせてしまう。主に荷造り用のロープ（綿製）だが、干し物用のナイロンロープ、和服用の腰紐、私の兵児帯、ストッキング、手拭い、ハンカチなども使う。ホテルやモーテルでは寝巻の紐を活用する。二人分の紐があればいろいろな縛りができる。今回、投稿した写真の中に、自転車の荷台に使う黒いゴム紐で縛ったものがあるが、これはたまたま妻を自転車に乗せてホテルへ行ったときに使ってみたものである。ゴムの弾力が意外な効果を発揮して、ロープとは違った緊縛プレイを楽しむことができた。愛好家諸兄もあまりロープにこだわらず一度試してみてもは如何であろう。

## マゾ女の 晒し責め

ヒデオ

3年間つきあっている二十二才のOL、M子を飼育中です。M子は生来、







マゾ性があるのか、始めて縛った時も抵抗せずにむしろ、ひどく興奮して愛液もたっぷりあふらせたものでした。

M子は性格もおとなしく、私のいいなりになっていますが、どちらかというと、牝犬や牝豚などの畜化願望が強



いようです。牝犬プレイでは、私のほうが呆れるほど真剣になり、首輪をつけて這いまわったり、牝犬のおションなどもやってみせてくれます。そのせいか、貴誌に連載され始めた「犬と私と夫」という投稿作品を熱心に読んで

ほんとに犬と交わることができるとかしら、などと犬とのセックスを本気で考えているそぶりさえみせます。私には獣姦趣味がないのであまり興味も湧きませんが「犬と私と夫」の成り行きには興味を感じています。私は、女をただ縛るだけでなく、晒しものにするのを好むのできるだけ惨めな格好にさせてやります。

M子はセックスを交えたプレイを好むので、晒しものにされるのはつらいらしいのですが、黙っていいなりになっているので、好きな格好に縛ることができます。江戸時代では、不義密通の男女や心中の片われ女が橋のランカンに裸で晒され、笑いにされたそうですが、M子のぶざまな格好を晒し者にで



きたら面白いだろうな、と考えています。

## 猥語弄り

川上緑山

ふとしたきっかけから十五才も年下の小学校女教員と深みにはまり、今年で2年目になる。実をいうと、私がS

M雑誌を読み始めてからまだ半年ほどしかたっていない。それまで、そういう類の雑誌があることすら知らなかったのだから、今でもSMとは一体なんなのか、よく判ってはいない。ただ、私の場合、女の体を汚したいという願望は少年の頃からあったようで、近所の女の子に泥をなすりつけてはある種の快感を味わっていた記憶がある。彼女のほうも、ウマが合ったというべき

か、自分の体を汚されることに快感を覚えるということ、スベルマや小便などを全身にかけてやると、とても喜ぶ。職業柄、いつも矜持を保っているのも、そんなときは思いきり解放感を味わえるようだ。投稿させてもらった写真は女体落書きだが、卑猥な言葉は知性も教養もある女だけにひどく汚された感じを受けるらしい。私は、セックスの最中に卑猥な言葉を言ったり、言わせたりするのが好きなのだが、これも彼女をひどく興奮させるようだ。こんな趣味がSMといえるかどうかかわからないが、もしよかったら誌面の一隅にでも載せていただきたい。それを彼女に見せて弄ってやろうと思っている。ただし、目隠しだけはよろしく頼みます。

## 股間縛りの 楽しみ

又野行夫

奇ク読者の皆さん、お元気ですか。始めて投稿する二十九才と二十三才の夫婦です。奇クサロンは毎号読んで、







S Mプレイといってもいろいろあるものだ、と感心しています。私が好きなのは、股間縛りにしてロープをギュッと食いこませたものです。身動きをすればロープがどんどん食いこんでいくので、それだけでいじめる効果は絶大です。S M写真を見ても縛り方が複雑でよくわからないから、すべて自己流ですが、妻は、あんまり強く縛られると息ができなくなるといっているのです。今の程度でいいと思っています。妻が苦しがるのはアグラ縛りで、5分ともちません。ご覧にいれる写真は、新婚間もなく(1年前)のもので、現在は妊娠中なのでS Mプレイはしていませんが、出産したらまた始めようと思っています。

## 顔面いじめ

顔好生

僕は奇ク復刊1号を偶然、本屋で見つけ、2号、3号とも続けて買いました。他のS M誌も読むのですが、奇クは妙な雰囲気があって面白いと思います。



す。僕が興味を持っているのは「顔面いじめ」ともいうようなプレイで、高慢な女の顔を思いきりいじめてみたいのです。現在つきあっているのは女子大生で、別に高慢ではないのですが、顔をいじめるとやはり僕は興奮します。ロープでグルグル巻きにしたり、ガムテープを鼻がひしゃげるように貼りつけたりするのです。彼女は、顔がゆがんじゃうから嫌だというのです。

僕はどうしてもそうしないではいられないのです。彼女とセックスするときも、顔をロープで縛ったり、パンソウ膏をベタベタ貼ってひきつった顔にすると、何もしないより数倍も興奮してしまいます。投稿した写真は、家族が旅行で留守のときに僕の家裏庭で撮影したものです。人に見られる心配のない場所なので、安心してプレイできました。野外でのプレイは始めてなの



興奮してしまい、体のほうの縛りまでは気がまわらなかったようです。でも気に入ってる写真なのであえて投稿してみました。「顔面いじめ」に興味を持っている人からの投稿をお待ちしています。僕のプレイの批評もお願いします。

## くすぐり責め

サイトウ

SM雑誌を読み始めて五年、念願がなつて昨年、プレイメイトを得ることができ、SMプレイの真似事を始めることができました。私は、ローソク責めや、腸責めなどはあまり好きではなく、軽く縛ってのバイブ責めや羞恥責めなどが好きです。特にバイブで責めたてて、身悶えするのを眺めていると自然と興奮してきます。剃毛責めもやってみたいのですが、彼女は妹とお風呂へ入って洗いつこをする習慣があるため、まだ剃毛はやっていません。彼女がヨワイのは、くすぐり責めです。筆の先やコヨリなで、腕腹や内腿、





足の裏、アヌスなどをくすぐると、縛られた体をドタンボタンさせて悶えます。さんざんくすぐっておいて、体を調べてみると、流れだすほどになっているので、多分、強烈な快感があるのだと思います。パイプで責めるときは主に乳首や局部を中心にやります。くすぐったがりやの彼女は乳首も敏感で小さなパイプで責めるとよく悶えます。最近、アヌス専用らしい、先が細いゴムになっているパイプを手に入れたので、アヌス責めにはこちらのほうを使います。局部責めにはどんな方法が

あるのが、ぜひ、奇ク誌に発表してください。参考にしたいと思います。

## ハーレムの王様 キング

僕は「女奴隷」マニアです。ハーレムの王さまのように、何人もの女奴隷にかしずかれて好き勝手に振舞いたいというのが、僕の夢です。現在、二十一才になる女奴隷を「一匹」飼っていますが、もっと増やすことができました。

と思っています。女奴隷は、僕の足元に膝まづいて、僕の命令を待ちます。僕の命令で、女奴隷は全身を使って奉仕するのです。フェラチオが一番うまい女奴隷が、その夜のセックスの相手になります。そんな夢にひたっているときが一番楽しいです。





# M化教育

Y生

この写真は、人妻（夫公認）とのプレイの一コマです。年令は三十六才、丸顔のポッチャリした、色白で小柄です。乳房は才腕型、ウエストはくびれており、M性は一〇〇パーセントに近い、従順な人妻です。ゴムバンドには2ヶ所に突起物があり、媚薬を塗って



挿入してあります。装着したまま、四つん這いで部屋の中をグルグル歩き回されているうちに快感に達してしまい、ゴロツと倒れてしまいました。この人妻のご主人は、妻がほかのS男性に責められる写真を見て感激するということとです。人妻のM化教育は、ほかの男性に責めを託すことが一番いいのでは



ないか、と私は考えております。ご覧に入れる貞操帯は、私が特にM女用として試作したもので、一カ月ぐらいかかって作りしました。これはまだ試作品で、股間の部分に穴を二ツあけることも考えています。バギナ挿入用（セックスやパイプ責め）とアヌス挿入用（腸など）に必要なだろうと思います。更にクリトリスを責める仕掛けも考案中です。洋装和装どちらでも装着したまま外出できるし、将来はリモコンも取りつきたいと考えています。変形バタフライなどもたくさん作っていますので、マニア夫婦、女性からのお呼びかけをお待ちします。

「奇クサロン」は読者の広場です。日頃の成果をどしどしご投稿下さい。文章、写真なんでも結構です。



# 読者ポスト



○誌名を見て懐しさがこみあげてきました。

小生が学生の頃、初めてこの世界を知ったのも奇譚クラブでした。古い号を今でも大切に保存してあります。いつの間にか休刊となり久しく消息が絶えていましたが、昨今の異常なSMブーム、やはり甦ったなという思いです。旧号は古書店で一冊千円も二千円もするほど貴重なものになってしまいましたが、SM誌の正道ということとで人気があるのでしよう。なにしろ、あれほどのマニア誌は他にないのですから。でも、今度の復刊号は少し

紙質がよいようですね。内容のわりには（失礼）上質すぎるのではないのでしょうか。どうもあの頃の怪しげなムードがありません。グラビアは豪華でも構いませんが、紙面と活字にもう少し工夫を。それに小説もあまりいたしません。まるで同人誌を読んでいるようです。じっくり読ませる内容のものにしてください。旧号の名作、珍品を選んで紹介するのも一興と存じます。先づは、感想のみにて失礼します。（KS生）

○復刊号を拝見していて、なかでも驚いたのは「縄妾志願」の女性からの通信欄です。特にマニアの方やパートナーを見つけようとしている男性にとっては貴重なものと思います。ただ残念なのは、女性たちの都道府県名ぐらいは掲載していただきたく思います。もし地方の方ならプレイをするときに不都合なことがあると思います。そして、もう一つ欲をいうと女性のメッセージを増やしていただけたらと思います。以上、勝手なことばかり書きましたが、他誌にはない通信欄なのでよろしくお願いします。（尼崎市・匿名希望）

○懐しい誌名を書店にて拝見し、復刊2号を購入いたしました。深夜、家人の寝静まるのを見はからって一気に読了。私が昔、耽読していた頃の奇クとはだいぶ違う印象を受けま

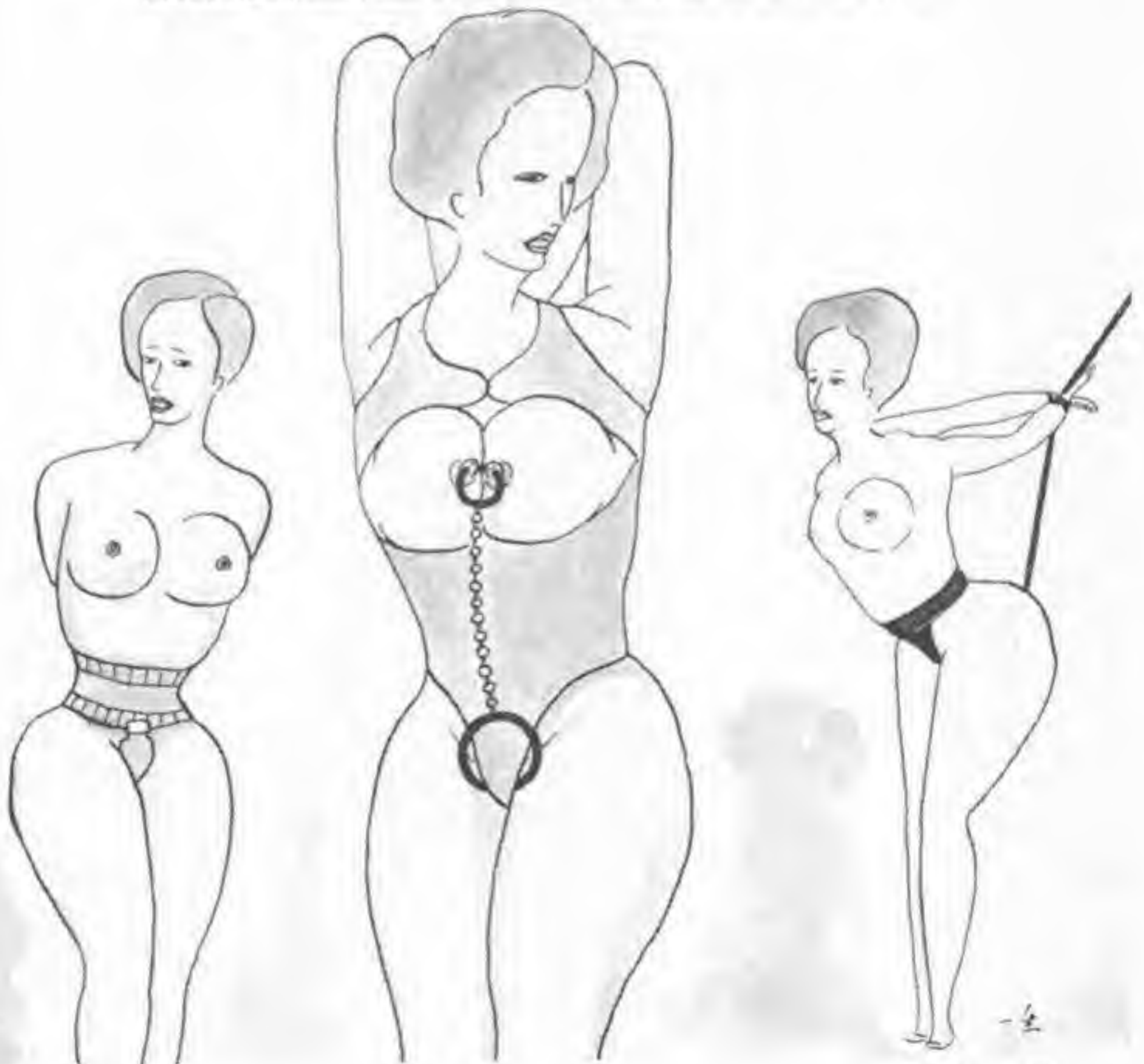
した。まず、S小説の類ですが、手なれた作家と覚しく、うまく書かれているのですが、どうも今ひとつピンとくるものがないようです。SMチックな性描写があれば、それでSM小説と呼べるものではないと思うのですがいかがでしょうか。ヒロインを含めて登場人物に新鮮味がなく、ストーリーもワンパターンのような気がしてなりません。もっとも、旧号の奇クでも、ほんとにSMの真髄に迫る小説は、ほんの二、三本しかなかったような気がするのですが、なんともいえませんが。これは各自の好みの問題かもしれないので、私の感想が当たっているかどうかはわかりませんが、ほんとのSM小説は性描写の激しさとは違うところにあるように思うのです。SMポルノ小説なら他誌にも載っているのですが、貴誌ではもっとコクのあるものを読みたいと願っています。カラー写真については、正直なところ他誌に見劣りします。ページ数も少ないのですから他誌と競争するようなことはせず、むしろ、貴誌独自のカラー写真を掲載したほうがいいのではないかと思います。どんな写真かといわれると、私にもわからないのですが、私が一番に感銘を受けたのは「懐かしの奇ク嬢たち」でした。懐しい女性たちのフォトが並び、それこそ一枚一枚穴のあくほど見つめ



て、ついでにまだ独身だった当時の頃も思い  
浮べたものです。そして、今、目にしても、  
なおかつ新鮮な感動を呼ぶ奇ク嬢たちに目を  
洗われる思いをしました。これは、単なる懷  
古趣味ではなく、昨今のSM誌に登場するモ  
デルたちにはないものを奇ク嬢たちに感じる  
せいだろうと思うのです。勝手なことばかり  
書きましたが、せっかく復刊された奇クを大  
事にしたい一読者の卒直な感想ゆえ、無礼の  
段はお許しください（東京・菅野）

○復刊1号、2号を読みました。僕はSMマ  
ニアで、売っているSM誌はほとんど読むの  
ですが、奇ク誌のようなSM誌は始めてです。  
話によると、昔も出ていたそうですが、僕は  
昔のものは読んだことがないので知りません。  
感想をいうと、ほかのSM誌ではあまりドキ  
ドキしないのですが、どういうわけか妙なム  
ードがあつて人前では読めません。特に、僕  
は「生人形地獄」というのが気にいっていま  
す。それから、「奇クサロン」の投稿写真や  
文章も一字一句読んでいます。奇クは、毎月  
末に発売されるようですが、僕が住んでいる  
ところへは一週間ぐらいも遅れてくるので、  
そのうち直接注文しようと思つてます。これ  
からもドキドキするような小説や写真を載せ  
てください（福島・HHH）

## 廊 画 稿 投



坊矢一生



# 倒錯愛のメッセー



私、四十八才の壮年ざかり。一六七センチ六十五キロ、顔はまあ良い方です。スポーツをするのが趣味です。私の別荘の広間で、おっかけまわして裸にして、ひもなどで縛ったり、そのほか色々責めたい。SMプレイにもってこいの場所。またはホテルへ行って狭い一室で思う存分いじめたいのです。近隣のM女性の方、ご連絡下さい。来ていただいても良いし、私の方で指定の所へ出向いても行きます。お便りお待ちしております。

No 1 私歌山市

K S

女性の体は、それ自体が美しい。だが、縛られた女体はさらに美しい。SMを知ることにより、人生の楽しみが広がるものです。SMはルールあるプレイであるうちは変態ではありません。異常性欲と見なされるのは、ルールを踏み外した時。お互いに好意と信頼があれば、その心配はありません。私、四十六才、会社員、プレイ歴は二〇年以上になります。Mの女性……とはいいいません。経験がな

くても、SMに興味のある方をお待ちしています。プレイの内容はその人に合わせます。信頼の中で人生の新しい楽しみを見出しませんか。

No 2 大阪

町

復刊第2号を書店で見つけ、驚きと共に購入致しました。私の性の芽ばえ、そして狂春(?)は奇クと共にありました。SMを知り性の本当の喜び、求めると共に与えられるSMという高度な性の様態を知り、本当に良かったと思っております。さて、私、本年三十五才になる一部上場企業の間管理職です。次の様な方とご交際をお願い致します。Aを中心とした羞恥責めに興味のあるカップルまたは女性の方、VTRに興味のあるカップルまたは女性の方。なお、私の方にはSM、レズ、浣腸等の自作及び外国製のものが多数あります。もしよろしければそれらを見ながらのプレイや、プレイの録画等も楽しいかと存じます。以上、あくまでも紳士的に秘密厳守

を大前提としたご交際をよろしくおねがいます。特に女性の方には、失礼ですが援助も可能です。

No 3

V・A生

二十六才、独身のS男性。一八二センチ、八〇キロ。残念ながらまだ経験はありませんが、M女性と交際したいと思っています。私の今の目標は女性を調教して好みのタイプにする事です。女体改造の研究もしています。色黒を色白に、シミやソバカスを消し、少女の頃の肌に戻します。体型は一六〇センチ以上、六〇キロ以上、B九〇、W六〇、H九〇のゴールデンサイズにします。目的に応じて食事、体操、催眠療法などを用います。骨太で腰幅が広く、肉付きのよい女性が好みです。さらに鳩胸で背が高ければいいことなのです。三十五才ぐらいまでの独身または未亡人、人妻は夫の了解あれば可。プロは不可。一日妻も募集します。また、年下のM男性とも一度はプレイしてみたいです。詳しいことは話し



合って決めます。二人だけの秘密は厳守し、返事は確実に書きます。暇なときにお手紙下さい。気長に待っています。

No 4 山口

黒魔獣

私は二十六才、独身の会社員です。身長一八二センチ、体重八〇キロ。SMに興味を持ったのは高校時代からです。毎月、SM誌が発売されると、学校帰りに学生服のまま、本屋へ行き、お金が足りない時は、少し値切ってまけてもらったこともあります。今は、まさか値切りませんが、SM誌を買う時は表紙が若い女店員に見えるようにさし出し、彼女が顔を赤らめるのを見て楽しんでます。本がたまつてくると、気に入った写真だけ切り抜き、スクラップ帳に貼りつけて整理しています。さて、実際にプレイをしてみたいとは思いますが、残念ながら相手がいません。今のところは、犬を縛っていじめています。どなたか、この哀れな牝犬の代わりにして下さい。プレイの内容は話し合っただけです。よう。初回のみ編集部回送にて願います。二人だけの秘密は厳守し、返事は確実に書きます。あなたの暇なときにお手紙下さい。

No 5 山口

SM愛好家

私たちは中年の四〇代と三〇代の夫婦です。できましたら同年のM夫婦さまか人妻さまと

のお交わりを細く長くお付き合いを願いたく、プレイはSMの常道として、浣腸のいろいろなテクニック、アヌスへのテクニック、多様な願望ある方をアクメまで導きます。Mの奥さまへはVへのテクニック。私の妻はS五〇パーセントM五〇パーセントです。両Mプレイ、レズSMは性具の挿入。羞恥縛りは多様な体位によるV・A・Pへのテクニック。医具はゴム性のもので最高の用具です。剃毛及び下半身への美容術などは夫婦とも十年ほどの体験済みです。気心を大切に、ご夫婦ともども、またはM性の人妻、極秘でおもてなしさせていただきます。珍プレイ、異ったプレイをお知らせ下さいませ。私たちと打ち合わせあえる方、プレイフォトと共に便り下さいませ。また、妻と共に下着フォト、セミヌードもいかがでしょうか。ご返事確実にさせていただきます。

No 6 関西

H & H

奇ク復刊おめでとうございます。私は貴誌の黄金時代を知る四十五才のファンです。今ちまたではSMのはんらんしている時代ですが、豊かな人間性と節度ある中でSMの世界を追求する姿勢は奇ク誌においてはあります。さて、私はSMを好み、妻は望みません。人間この短い一生です。SMプレイの世界を

まじめに追求する女性求めます。人間として相手を尊重し、社会人の責任として秘密を守れ、そして品性のある人に限ります。プロまたはお金目当ての人はお断りします。お会いして話し合い、気が合えばプレイに進みます。よう。この殺ばつとした時代であればこそ、SM（両性の本能の世界）をとっぴりと味わってみませんか。こんな私の考えに賛同して下さるM女性の方、便り下さい。S紳士としておつき合いさせていただきます。なるべく大阪に近い方を望みます。遠方の方でも結構です。便りは男性名でお願いします。SMS生

No 7 大阪

SMS生

住所を知られたくない人へ  
文通相手に住所を知られたくない場合は、当社「回送扱い」を利用して下さい。相手へ出す手紙の封筒へは住所を書かず鉛筆で、「回送」とのみ記入。当社名で回送します。



## 投稿規定

### 〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニマル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

### 〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

### 〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分以上大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

### 〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

### 宛先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室



# 「読者通信欄」への投稿

※郵便料金に注意して下さい

## 宛先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10  
 ストックビル501号  
 風俗資料保存会編集室

- 1・400字以内で通信文を書く。
- 2・通信文の内容は“交際”にこだわらず、本誌の感想、雑感、ブレイ報告など、なんでも結構です。
- 3・投稿文の宛先は左記へ。

## 「読者通信欄」掲載者への手紙の出し方

- 1 手紙を書く。
- 2 手紙を封筒①へ入れて封をする。  
住所、氏名を書いてもよい人は書く。
- 3 Na、ニックネームを記入した回送シールと60円切手3枚をクリップでとめ、  
封筒①と一緒に少し大きめの封筒②へ入れて封をする。  
封筒②のウラには正確な住所、氏名を記入して下さい。
- 4 封筒②の宛先は左記へ。  
※当事者間で生じたトラブルに対しては、当会は責任を負いかねます。

No. \_\_\_\_\_

様

回送シール

S.57.5.31まで有効

No. \_\_\_\_\_

様

回送シール

S.57.5.31まで有効

No. \_\_\_\_\_

様

回送シール

S.57.5.31まで有効



## 編集室ノート

○4号めが出て、どうやら、3号雑誌といわれずに済んだようだ。旧奇ク誌の栄光を背負っての再出発だけに、並の雑誌作りとは違う苦勞がつきまとう。そんな奇ク誌を十数年にもわたって作り続けていた旧誌の編集者たちは、もしかしたら「怪物」だったのではないかと考えてしまう。先日、お会いした四馬孝氏のお話からも、その「怪物」ぶりの一端が伺えて興味深かった。多くの読者の方々からお手紙やご寄稿を戴きながら、多忙にまぎれて、まだご返事を差しあげられずにいる。誌



上を借りて、遅延をお詫びしたい。妊婦ハント「膨満の快楽」は原稿の整理がつかず今月はお休みさせていただいた。次号からイラスト入りで掲載の予定である。今月から美濃村晃氏の「淫細狐火街道」が始まった。それに四馬孝氏のイラストも掲載できた。段々と昔懐しいメンバーが揃いつつある。読者の皆さんからの遠慮のないご意見、本誌に嬉しいご投稿をお待ちします。

5月号「映画情報」の映画名は「女囚セツ

クス集団」でした。脱字をお詫びします。

### S Mモデル募集 年令・容姿不問

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座一の22の10、ストークビル501号 風俗資料保存会宛



一生



# オ 美世子の記録



賀山茂の育てたM女性の実録

SMを知って  
性の喜びを知る  
女は可愛い  
動物です。!!

## 賀山茂の

第1弾!!



|||| 3人の女が責めの競演 ||||

SM生活30年——  
アマチュアでは  
SMを知る  
第1人者  
です。

SMビデオ!!

芝居  
ではなく、  
本当に責めた  
ハードSMです。

お申し込みは…

東京都中央区銀座1-22-10 ストックビル501号

**サム・ビデオセンター**

(定価15,000円。ベター・VHSを  
明記のうえ現金書留にて送金下  
さい。5日以内にお送りします。)

奇譚クラブ 6月号 定価1000円 昭和57年 6月1日発行 発行所(株)きたん社  
東京都新宿区新宿1-7-11 加藤ビル1F 電話03(354)6241番 発行人/森田公治  
編集/風俗資料保存会 東京都中央区銀座1の22の10ストックビル501号



